

ズバリ！「飛鳥・藤原まるごと博物館」検定の
要点整理(初級編・中級編対策)

For 2024年(第2回)検定試験



Edited by 鉄田憲男(奈良まほろばソムリエの会 専務理事)

Based on 『飛鳥・藤原まるごと博物館検定 公式テキストブック』

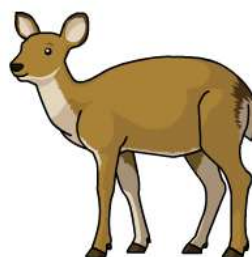
CONTENTS

- 巻1. 飛鳥・藤原地域の概説
- 巻2. 歴史と古代の国際交流
- 巻3. 飛鳥・藤原地域の文化財
- 巻4. 『万葉集』をはじめとする文学
- 巻5. 民俗、伝承、文化
- 巻6. 歴史的風土保存の経緯、現状と今後

1. 飛鳥・藤原地域の概説

項目名	解説	頁
やまとさんざん かぐやま 大和三山（香具山、 うねびやま みみなしやま 畝傍山、耳成山）	大和三山に囲まれた平野部には、 ^{ふじわらのみや} 藤原宮が造営。畝傍山と耳成山は、独立した火山。香具山は ^{とうのみね} 多武峰から延びる稜線の裾が切り離された端山。高さは、高い方から、①畝傍山（西）、②香具山（東）、③耳成山（中央）の順。	P16
あまかしのおか 甘檜丘	国営飛鳥歴史公園。中腹と東麓に、 ^{そがのえみし} 蘇我蝦夷・ ^{いるか} 入鹿の ^{いっし} 邸。乙巳の変で入鹿が殺された直後に、蝦夷は自邸に火をかけて自害。	P16
いかづちのおか 雷丘	丘上に15世紀頃の中世城 ^{じょうさい} 砦跡（雷城）。もともとは東と北に大きかったか。	P17
ごはれつさん 御破裂山	^{とうのみね} 多武峰の最高峰。藤原鎌足の廟山。天下異変の時には、この山が鳴動し、神像が破裂するとされた。	P17
みなぶちやま 南淵山	明日香村 ^{いなぶち} 稲淵・ ^{さかだ} 阪田。奥飛鳥の入口。稲淵は南淵の転訛か。	P17
たかとりやま 高取山	日本三大山城として有名な高取城跡がある。山頂の城跡には壮大な石垣。	P17
にじょうさん 二上山	^{おだけ} （雄岳と ^{めだけ} 雌岳）大和と河内の境界。雌岳南麓の竹内峠には横大路につながる竹内街道が通り、大和と河内を結ぶ交通の要衝。	P17
あすかがわ 飛鳥川（明日香川）	行者川・細谷川・寺谷川（船戸川）が ^{かやのもり} 栢森で合流して飛鳥川となる。	P19
たかとりがわ 高取川	近鉄飛鳥駅前を国道169号に沿って北に流れる川。古代の「 ^{ひのくまがわ} 檜隈川」。	P19
よねかわ 米川	桜井市 ^{たいえ} 高家に源。桜井市の吉備池廃寺の発掘により、古代の百済川か、とも。	P20
なかかわ 中の川	米川の支流、古称は「八釣川」。斉明天皇の「 ^{たふれごころ} 狂心の ^{みぞ} 渠」を踏襲した河川。	P20
てら 寺川	桜井市多武峰 ^{ろくろ} や鹿路峠に源。川西町で大和川に合流。古称「倉橋川」。談山神社の参道には、屋形橋が架かる。	P20
はつせがわ 初瀬川（泊瀬川）	飛鳥時代から大和川や寺川とともに、舟運に活用。三輪山の裾をめぐり、川西町で佐保川と合流して大和川に。桜井市金屋河川敷公園に「佛教伝来之地碑」。	P20
つるぎいけ 剣池（石川池）	^{こうげん} 孝元天皇陵（橿原市石川町）に隣接。日本書紀に「 ^{そうとうれん} 双頭蓮」の記事。	P21
畝傍池（深田池）	推古天皇が作ったため池。橿原神宮境内。 ^{かんがい} 灌漑用水の確保、洪水調整も。	P21
ますだいけ 益田池堤跡	橿原ニュータウンの辺りにあった平安時代初期の巨大なため池の跡。高取川に ^{せき} 堰を築いて作られた。益田池児童公園内に堤防の一部が残る。	P22
ひがしいけじり いけのうち 東池尻・池之内遺跡	巨大な人工池の跡。堤状の高まりと南の水田一帯は、 ^{いわれ} 磐余池の候補地の1つ。	P22
飛鳥 ^{せき} 七堰	飛鳥川上流に7つの堰。木ノ葉堰、 ^{とゆら} 豊浦堰、大堰、今堰、橋堰、飛田堰、佐味堰。	P23

吉野川分水	同川上流に津風呂ダム・大迫ダム、十津川に猿谷ダムを建設し、盆地に水供給。	P25
でんぱたりんかん 田畑輪換農法	用水確保と連作障害を防ぐため、2～3年周期で、稲作と畑作を交互に行う。	P28
あすかいし 飛鳥石	飛鳥周辺で産出する石英閃緑岩、花崗閃緑岩のこと。硬度や耐久性が高く、石舞台古墳の石室も、石英閃緑岩（家形石棺は、凝灰岩製）	P33
たつやまいし 龜山石	高砂市加古川西岸域で産出する流紋岩質凝灰岩。二上山凝灰岩より硬い。	P33
てらやまいし 寺山石（石英安山岩）	羽曳野市の寺山～鉢伏山にかけ産出。飛鳥では牽牛子塚古墳石槨の外周石材。	P33
あそ 阿蘇ピンク石	阿蘇溶結凝灰岩とも。橿原市植山古墳や高槻市今城塚古墳の石棺で発見。	P33
にじょうさんぎょうかいがん 二上山凝灰岩	二上山山麓で産出する白色凝灰岩。主に家形石棺に使用。牽牛子塚古墳は、巨大な二上山凝灰岩の一石をくり抜いた横口式石槨で、墳丘斜面は二上山凝灰岩の切石を積み上げていた（復元整備では、石川県小松市の瀧ヶ原石を使用）。	P34
てんりさがん 天理砂岩	天理市豊田山周辺で産出する凝灰岩質の砂岩。軟質、軽量だが耐久性に難。低い石垣や敷石など、使用は限定される。	P34
けっしょうしつせつかいがん 結晶質石灰岩	瑪瑙石、白大理石とも。川原寺にこの礎石が28。滋賀県石山寺付近の産か。	P34
はいばらいし 榛原石、 けっしょうりよくでいへんがん 結晶（緑泥）片岩	榛原石は、室生火山岩の通称。結晶（緑泥）片岩は、紀の川流域で採取され、ともに板石として多用。板状節理により容易に厚さ3cm程度の板石材として採取が可能。敷石や石積みとして多用。カヅマヤマ古墳、小山田古墳でも。	P36
しんしゃ 辰砂（硫化水銀）	朱（水銀朱）の原料で、丹とも呼ばれる。顔料のほか、漢方薬、宗教儀式、金の精錬にも用いられる。産地には丹生の名がつく古社が多い。	P35
飛鳥・藤原の宮都	奈良県内で4件目の世界文化遺産の登録をめざしている遺跡群。 橿原市、桜井市、明日香村にある宮殿・官衙跡、仏教寺院跡、墳墓の3つのグループに属する22の構成資産からなり（2023年8月現在）、「飛鳥宮を中心とする構成資産群」と「藤原宮を中心とする構成資産群」の2つに区分。 王権の所在地である「宮都」（宮殿と都城）が置かれたという価値により、世界遺産をめざす。	P38～44



2. 歴史と古代の国際交流（1）

項目名	解 説	頁
1. ヤマト政権 と飛鳥・藤原 飛鳥時代前史	飛鳥時代は、東アジアの国際社会が大きく変化し、それに対応して日本が中央集権国家へと大きく転換した時代。儒教や仏教が国家の中核的思想とされ、律令などの諸制度や新しい文化が導入された。 飛鳥・藤原は、古代日本が誕生した地であり、日本文化の礎が造られた場所。	P46
日本国の誕生	飛鳥時代のはじまりは、592年12月の推古天皇の即位（一説には、飛鳥寺造営開始の588年）。天皇の宮は、豊浦宮から小墾田宮などを経て、飛鳥宮・藤原京へと遷り、平城京遷都（710年）までが飛鳥時代。一時的に難波や近江に都が遷ることがあったが、この間、ほぼ一貫して飛鳥・藤原が政治・文化の中心。 飛鳥時代は、大陸の制度や技術、文化を積極的に導入し、わが国が独自の文明化を推し進めた時代。儒教や仏教の伝来・定着はその先駆けであり、冠位十二階・十七条憲法の制定、飛鳥寺の造営などは、新しい政治思想や宗教観に基づく国づくりのはじまり。 藤原京は、条坊制に基づくわが国最初の都城であり、都市の誕生でもあった。	P47
<small>おおきみ</small> 大王から天皇へ	5世紀後半には倭国の君主は大王と呼ばれていたが、7世紀になると天皇（すめらみこと）と称するようになる。天皇号の成立時期は長く天武・持統朝頃とされてきたが、近年、推古朝説の支持者が増えている（天寿国繡帳銘など）。	P48
天皇の王宮	推古天皇は飛鳥で、最初の王宮である豊浦宮から小墾田宮へ遷都。2つの宮は、もと蘇我稲目の邸宅。飛鳥宮跡では、舒明朝の飛鳥岡本宮、皇極朝の飛鳥板蓋宮、斉明・天智朝の後飛鳥岡本宮、天武・持統朝の飛鳥浄御原宮の天皇6代・4期の宮殿跡が見つかる。宮殿には天皇の私的空間に加え、大極殿などの公的空間が拡大。宮殿周辺には、寺院、官衙（役所）、官営工房、苑地、天皇による祭祀・迎賓・饗宴のための施設、直線道路や運河が整備され「飛鳥京」と呼ばれるわが国で初めての宮都が誕生した。7世紀末には、中国都城制の影響を受けたわが国初の本格的な都城「藤原京」が造営。その中央には、藤原宮（大極殿や瓦葺、礎石建ちの建物で構成）が整備された。	P48
<small>れきほう</small> 時刻制と暦法の導入	飛鳥時代、中国の制度にならって時刻制や暦法が導入された。日本書紀によると、中大兄皇子が漏刻（水時計）を造り、人々に時を知らせた（＝飛鳥水落遺跡）。天武天皇4年に、初めて占星台が置かれた。持統天皇4年、元嘉暦と儀鳳暦の併用が開始され、のち（文武天皇元年）、元嘉暦が廃され、儀鳳暦を正式に採用。大宝令（大宝元年制定）には陰陽寮の官制があり、漏刻博士（漏刻を維持・管理）と、その下に守辰丁（漏刻の目盛りを計り、鐘や鼓で時を報じる）を配置した。	P51

飛鳥時代の文化	飛鳥時代は仏教文化の時代で、今日の日本文化の礎が築かれた。しかし現存する代表作は法隆寺に多く残され、飛鳥・藤原の地には、飛鳥大仏、高松塚古墳壁画、キトラ古墳壁画などが残るのみ。飛鳥文化の国際性の中核は、朝鮮半島からの渡来文化。寺院造営のための建築、土木、庭園、彫刻、絵画、工芸、芸能など多様な文化が導入された。特に百済は、中国南朝の梁から入手した儒書、仏書やさまざまな文明要素を倭国に伝えた。その後、高句麗、新羅の仏教が伝えられたほか、遣隋使、遣唐使を通じて、中国から儒教や仏教が直接伝えられた。また高麗楽、新羅楽、百済楽などが伝来し、仮面劇の伎楽が呉（中国南朝）で学んだ百済人によって伝えられた。	P54
推古天皇	欽明天皇の皇女で、母は蘇我稲目の娘（堅塩媛）。敏達天皇5年（576）、敏達天皇の皇后に。崇峻天皇の暗殺を受け、初の女性天皇として即位。叔父の蘇我馬子、甥の厩戸皇子（聖徳太子）の三者による統治体制により、国制を整備。	P56
皇極（斉明）天皇	敏達天皇の曾孫。最初、高向王に嫁いで漢王（皇子）を生み、のち舒明天皇の皇后になって中大兄・大海人の2人の皇子と間人皇女を生んだ。乙巳の変を機に弟の孝徳天皇に譲位したが、孝徳没後に斉明天皇として重祚。多武峰（田身嶺）に両槻宮（離宮）を作り、香具山から右上山まで大渠（狂心の渠）を掘り、宮の東山に石垣を築き吉野宮を造るなど、大規模土木事業を行う。	P56
持統天皇 (鸕野讃良皇女)	父は天智天皇、母は遠智娘（蘇我倉山田石川麻呂の娘）。大海人皇子の妃として、ともに壬申の乱を戦い、大海人皇子が即位（天武天皇）すると皇后として、政権運営を補佐。皇太子草壁皇子が没すると、翌年、自ら即位、697年に孫の軽（珂瑠）皇子に譲位。天武天皇と姉の大田皇女の遺児である大津皇子を死に追いやった。火葬された最初の天皇。	P57
元明天皇 (阿閉[阿陪]皇女)	父は天智天皇、母は姪娘（蘇我倉山田石川麻呂の娘）。草壁皇子の妃。皇子との子・文武天皇が病没し、文武天皇の子・首皇子（のちの聖武天皇）が幼少であったため即位。平城京遷都を実行し（遷都を「言明」）、律令国家を整備。	P57
舒明天皇 (田村皇子)	敏達天皇の子（押坂彦人大兄皇子）の子。母は父の異母妹の糠手姫皇女。飛鳥岡の傍らに飛鳥岡本宮を造営。舒明天皇11年から、百済川畔に百済宮（百済大宮）と百済寺（百済大寺）を造り始め、翌年に百済宮に遷り、その翌年ここで亡くなった。万葉集に長歌が載る（大和には群山あれどとりよろふ…）	P57
孝徳天皇 (軽皇子)	皇極天皇の同母弟。皇后は中大兄皇子の妹の間人皇女。乙巳の変のあとに即位し、年号を大化と改めて改新の詔を發布。難波長柄豊碕宮に遷都。	P58

<p>てんじ 天智天皇</p> <p>かつらぎのみこ なかのおおえの (葛城王、中大兄 皇子、天命開別)</p>	<p>舒明天皇と皇極天皇の間の皇子。中臣鎌足らとともに蘇我蝦夷、入鹿を討滅した乙巳の変で知られる。改新政府の諸改革を主導して、中央集権国家の建設を進めるとともに、百濟救援軍の指揮をとる。天智天皇6年に近江の大津に遷都し、翌年即位。庚午年籍を編成し、近江令を制定したとも。</p> <p>天智天皇10年、大津宮で没する。</p>	<p>P58</p>
<p>てんぶ 天武天皇</p> <p>おおあまのみこ (大海人皇子)</p>	<p>天智天皇の同母弟で、乙巳の変後は中大兄皇子を助けて改革を主導。大友皇子と皇位を争った壬申の乱で勝利し、飛鳥浄御原宮で即位。</p> <p>浄御原令や史書の編纂を進め、藤原京造営計画を策定して一部実施。</p>	<p>P58</p>
<p>もんむ 文武天皇</p> <p>かるのみこ (珂瑠[輕]皇子)</p>	<p>草壁皇子と阿閉皇女の間の皇子で、草壁の没後、皇位継承者として期待され、文武天皇元年、持統天皇から皇位を譲られて即位。大宝元年、大宝律令を施行。</p>	<p>P58</p>
<p>うまやとのみ 聖徳太子(厩戸皇 子、豊聡耳皇子、上 宮王、法大王)</p>	<p>用明天皇の第二皇子。叔母の推古天皇のもと、義父・蘇我馬子と協調して政治を行い、国際的緊張の中で遣隋使を派遣するなど、大陸の進んだ文化や制度を取り入れ、天皇を中心とする中央集権国家の形成を図る。</p> <p>官僚制度に関わる冠位十二階、官僚の心構えや規律を示した十七条憲法を定めたほか、仏教を厚く信仰し、その交流に努めた。</p>	<p>P60</p>
<p>あなほべのみこ 穴穂部皇子</p>	<p>欽明天皇の皇子で、母は蘇我稲目の娘・小姉君。敏達天皇の殯宮に侵入し、額田部皇女(後の推古天皇)を犯そうとして失敗し、それを阻止した三輪逆(敏達天皇の寵臣)を討った。用明天皇の崩御後、物部守屋と結んで皇位を狙うが、泊瀬部皇子(後の崇峻天皇)を推す蘇我馬子により宅部皇子とともに、誅殺された。この2人は、藤ノ木古墳(斑鳩町)の被葬者と見る説が有力。</p>	<p>P61</p>
<p>たけだのみこ 竹田皇子</p>	<p>敏達天皇と推古天皇の子。有力な皇位継承者だったが早世か。</p> <p>日本書紀によると、推古天皇は竹田皇子の墓に合葬された。古事記には、大野岡(橿原市五條野町の植山古墳)にあった推古天皇陵(推古天皇・竹田皇子合葬陵)を後に、科長大陵(大阪府太子町)に移したとある。</p>	<p>P61</p>
<p>たむらのみこ 田村皇子 (舒明天皇)</p>	<p>推古天皇の崩御後に、皇位継承をめぐる争いに。有力な継承者は、田村皇子(蘇我蝦夷が推挙)と山背大兄王(蘇我馬子の弟の境部摩理勢が推挙)。</p> <p>摩理勢は蝦夷の軍によって討伐され、田村皇子が即位して、舒明天皇に。</p>	<p>P61</p>
<p>やましのおおえのおう 山背大兄王</p>	<p>父は聖徳太子、母は刀自古郎女(蘇我馬子の娘)。皇極天皇2年、蘇我入鹿に襲撃され、斑鳩宮で一族とともに自害(上宮王家の滅亡)。</p>	<p>P61</p>
<p>ふるひとのおおえのみこ 古人大兄皇子</p>	<p>父は舒明天皇、母は法堤郎女(蘇我馬子の娘)。蘇我蝦夷・入鹿から、皇位継承を期待される。乙巳の変後、身の危険を感じ、出家して吉野山に入るが、密告により謀反の疑いをかけられ、中大兄皇子の兵によって殺害された。</p>	<p>P62</p>
<p>ありまのみこ 有間皇子</p>	<p>孝徳天皇の皇子、斉明天皇の甥。蘇我赤兄は斉明天皇の失政を挙げて謀反をそそのかす。赤兄の裏切りにより、紀伊の藤白坂で処刑された。</p>	<p>P62</p>

	万葉集に辞世の歌が載る。	
きびひめのみこ 吉備姫王	欽明天皇の孫。茅渟王 ^{ちぬのみこ} の妃となり、皇極（斉明）天皇、孝徳天皇を生む。延喜式では、墓は檜隈墓 ^{ひのくま} （欽明天皇の檜隈陵域内）とし、宮内庁はこれを明日香村平田 ^{ひらた} に治定するが、梅山古墳の兆域内のカナヅカ古墳を吉備姫王墓に比定する説が有力視されている。	P62
ぬかたのおおきみ 額田王	万葉歌人の代表格。皇極天皇に仕えた。最初大海人皇子と結ばれ、後に天智天皇の後宮に。壬申の乱後は、夫の大友皇子を失った娘（十市皇女 ^{とおちのひめみこ} ）と幼い孫（葛野王 ^{かどののみこ} ）とともに、飛鳥に戻った。	P62
おおたのひめみこ 大田皇女	天智天皇の長女。母は遠智娘 ^{おちのいらつめ} （蘇我倉山田石川麻呂 ^{そがのくらやまだのいしかわまる} の娘）。同母の妹の鸕野讃良皇女 ^{うののさららのひめみこ} （持統天皇）とともに大海人皇子（天武天皇）の妃となる。大伯海 ^{おおくのうみ} （岡山県瀬戸内市）の船上で大伯皇女 ^{おおくのひめみこ} を、娜大津 ^{なのおおつ} （博多）で大津皇子を生む。墓は、越塚御門古墳 ^{こしつかごもん} （牽牛子塚古墳 ^{けんごしづか} の南東に隣接）か。	P62
たけるのみこ 建王	父は天智天皇、母は遠智娘 ^{おちのいらつめ} （蘇我倉山田石川麻呂の娘）。8歳で亡くなり、祖母の斉明天皇は自分の陵への合葬を命じた。牽牛子塚古墳 ^{けんごしづか} の墓室には、当初は斉明天皇と建王が葬られたという説も。	P63
おおとものみこ 大友皇子 こうぶん (弘文天皇)	父は天智天皇、母は伊賀采女宅子娘 ^{いがのうねめやかこのいらつめ} （地方豪族の娘）。天智天皇の崩御後、叔父の大海人皇子（後の天武天皇）との間で壬申の乱が勃発、争いに敗れて自害したとされる。	P63
たけちのみこ 高市皇子	父は天武天皇、母は胸形尼子娘 ^{むなかたのあまこのいらつめ} （地方豪族の娘）。壬申の乱では父を助けて活躍。草壁皇子 ^{くさかべのみこ} の死後は、持統天皇から太政大臣を任命される。	P63
くさかべのみこ 草壁皇子 ひなみしの みこ (日並[知]皇子、 おかのみやぎょう 岡宮御宇天皇)	父は天武天皇。母は鸕野讃良皇女 ^{うののさららのひめみこ} （後の持統天皇）。天智天皇の皇女・阿閉皇女 ^{あへのひめみこ} （後の元明天皇）を妃とし、文武天皇、元正天皇、吉備内親王をもうけた。即位しないまま没する。束明神古墳 ^{つかみょうじん} （高取町）を墓とする説がある。	P63
おおつのみこ 大津皇子	父は天武天皇、母は大田皇女（鸕野讃良皇女の同母姉）。博学能文で、天武天皇12年には朝政に参加。しかし天武天皇が崩御すると、その翌月に謀反の疑いをかけられ、訳語田 ^{おきだ} （桜井市）の家で処刑された。	P63
おおくの ひめみこ 大伯（大来）皇女	大津皇子の同母姉。天武天皇2年、伊勢神宮に使える斎王 ^{さいおう} （斎宮 ^{さいくう} ）に選ばれた。弟の死後、斎王を解任され都に戻る。万葉集には、弟を思う歌6首が載る。	P64
やまべのひめみこ 山辺皇女	父は天智天皇、母は常陸娘 ^{ひたちのいらつめ} （蘇我赤兄 ^{そがのあかえ} の娘）。大津皇子の妃となるが、皇子が刑死したとき、髪を振り乱し素足で走り赴き殉死した（日本書紀）	P64

かわしまの 川島 (河島) 皇子	父は天智天皇、母は色夫古娘 <small>しきぶこのいらつめ</small> (忍海小龍 <small>おしぬみのおたつ</small> の娘)。日本書紀の編纂に携わる。 大津皇子の謀反を密告したとも。墓はマルコ山古墳 (明日香村真弓) か。	P64
おさかべの 忍壁皇子 おさかべしんのう (刑部親王)	父は天武天皇、母はかじ <small>ひめのいらつめ</small> (木へんに穀) 媛娘 <small>ししひとのおおまろ</small> (穴人大麻呂の娘)。大宝律令 筆頭の編纂者。高松塚古墳被葬者の有力候補。	P64
しきの 志貴 (施基・芝基) かすがのみやぎょう 皇子 (春日宮御宇 天皇、田原天皇)	父は天智天皇、母は越道君伊羅都売 <small>こしみちのきみいらつめ</small> 。白壁王 (光仁天皇) の父で、万葉歌人と しても著名。高円山 <small>たかまどやま</small> の麓の田原西陵に葬られた。	P65
とねりのみこ 舎人皇子 すどうじんきょうこうてい (崇道尽敬皇帝)	父は天武天皇、母は新田部皇女 <small>にいたべのひめみこ</small> (天智天皇の皇女)。日本書紀編纂を主宰。 新田部親王とともに長老として、聖武天皇の統治を支えた。	P65
とおちのひめみこ 十市皇女	父は天武天皇、母は額田王。壬申の乱で夫の大友皇子が父の天武天皇に滅ぼさ れたが生き残り、天武天皇7年に急逝、赤穂 <small>あこ</small> (明日香村安古か) に葬られた。	P65
かどのみこ 葛野王	父は大友皇子、母は十市皇女 <small>おちのみふね</small> 。淡海三船の祖父。高市皇子 (太政大臣) が亡く なると、持統天皇は皇位継承者の選定会議を催した。葛野王は直系継承を主張。 それにより草壁の子の珂瑠 <small>かるの</small> (軽) 皇子 <small>みこ</small> (後の文武天皇) が皇位継承者に。	P65
おみ むらじ 臣と連	豪族には、「臣」の姓を持つもの (巨勢氏、蘇我氏、阿倍氏など) と「連」姓を 持つもの (物部氏、大伴氏、中臣氏など) があつた。「臣」姓の豪族は、本拠地 名を氏の名とし、天皇家と婚姻関係を結ぶことも。「連」姓の豪族は、軍事や 祭祀などの職務を分担し、その仕事に由来する氏の名を持った。	P65
そ がうじ 蘇我氏	本拠地は、大和国高市郡の曾我 (橿原市曾我町) 説が有力。乙巳の変で本宗家 は滅亡したが、傍系の蘇我倉山田石川麻呂が改新政府の右大臣となり、その後 も連子 <small>むらじこ</small> 、赤兄 <small>あかえ</small> らが活躍し、天武天皇13年に、石川朝臣 <small>あそみ</small> の姓を与えられた。	P65
い なめ 蘇我稲目	きたしひめ 小姉君 <small>こあねのきみ</small> の2人の娘を欽明天皇の妃とし、用明・崇峻・推古の3天皇の 外戚となった。外交では百済との関係を強化、内政では屯倉 <small>みやげ</small> (直轄地) 経営で 政権の財政を確立。仏教受容に積極的で、百済の聖明王 <small>せいめいおう</small> が欽明天皇に献じた 仏像 <small>おほりだのいせ</small> を小墾田家 <small>おほりだのいせ</small> に安置するとともに、向原家 <small>むくほらのいせ</small> を喜捨して寺とした。	P66
うまこ 蘇我馬子	稲目の子で、嶋大臣とも。仏教の受容を進めて、排仏派の物部守屋 <small>ものべのもりや</small> を攻め 滅ぼした後、20年かけて飛鳥寺の伽藍を完成させた。また配下の東漢駒 <small>やまとのあやのこま</small> に 命じて崇峻天皇を殺害したあと推古天皇を擁立した。墓は石舞台古墳か。	P66

蘇我蝦夷 えみし	馬子の子で、豊浦大臣とも。人民を動員し、今来に自分と入鹿の寿墓（生前に造営する墓）として双墓を造り、自分の墓を大陵（小山田古墳か）、入鹿の墓を小陵（菖蒲池古墳か）と呼ばせた。甘樫丘に家を建てて上の宮門と称し、兵士に守らせたが、乙巳の変で入鹿が殺されると、蝦夷はこの家で自害。	P67
蘇我入鹿 いるか	蝦夷の子で、林臣、鞍作とも。僧旻の学堂で儒教を学んだ。 斑鳩宮の山背大兄王（聖徳太子の子）を襲い、殺害。乙巳の変で中大兄皇子・中臣鎌足らによって殺害された。	P67
蘇我倉山田石川麻呂 そがのくらやまのいしかわまる	蘇我倉麻呂の子で、蝦夷の甥、入鹿の従兄弟。娘の遠智娘を中大兄皇子の妃に入れて連携。乙巳の変後、右大臣に。しかし、蘇我日向の讒言により謀反の疑いをかけられて攻められ、妻子・一族とともに山田寺の仏殿前で自害。	P68
遠智娘（造媛、美濃津子娘） おちのいらつめ みやつこひめ みのつこのいらつめ	蘇我倉山田石川麻呂の娘。中大兄皇子（天智天皇）の妃となり、建王、大田皇女、鸕野讚良皇女（持統天皇）を生んだ。 父が謀反の容疑で殺害されたため、傷心のあまり死去。	P68
物部氏 ものべうじ	有力な連姓氏族で、本拠は石上神宮周辺だが、河内の渋川郡にも拠点。	P68
物部守屋 ものべのもりや	物部尾輿の子。敏達、用明天皇の時代に大連。仏教受容に反対し、蘇我馬子と対立、寺塔と仏像を焼いた。馬子に拠点（河内の渋川郡）を攻められて敗死。	P68
中臣氏 なかとみうじ	有力な連姓氏族で、古来、朝廷の祭祀を掌った。	P68
藤原氏 ふじわらうじ	天智天皇は病の床にある中臣鎌足を見舞い、その数日後、藤原姓を与えた。	P69
中臣（藤原）鎌足 なかとみ（ふじわら）かまたり	中臣御食子の子。南淵請安や僧旻に儒教を学んだ。大化元年に中大兄皇子らとともに入鹿・蝦夷を滅ぼした。死に臨んで大織冠の官位と藤原姓を賜った。	P69
藤原不比等 ふひと	鎌足の二男。田辺史大隅に養育された。文武天皇2年、不比等の子孫だけが藤原姓を名乗ることを許された。文武天皇の夫人に娘の宮子を入れ、首皇子（聖武天皇）が生まれると大納言、のち右大臣に。大宝律令の編纂や平城遷都を主導。4人の息子と娘の光明子は、奈良時代の政界で活躍。	P69
大伴氏 おおともうじ	有力な連姓氏族で、竹田（橿原市）、跡見（桜井市）が本拠。武人を率いて宮門を守った。天武天皇13年に宿禰の姓を与えられた。旅人・家持は万葉歌人。	P69



2. 歴史と古代の国際交流（2）

項目名	解 説	頁
とゆらのみや 豊浦宮	推古天皇は崇峻天皇5年、豊浦宮で即位、以後約1世紀、宮都が飛鳥に集中する端緒に。蘇我稲目が自らの向原家 ^{むくはらのいえ} を推古天皇の宮 ^{まくらいでら} （桜井寺）とし、さらに豊浦寺に発展したか。明日香村豊浦の向原寺 ^{こうげんじ} の発掘調査で、豊浦宮の遺構を発見。	P71
おほりだの 小墾田（小治田）宮	推古天皇の宮室。天皇は豊浦宮からここに移り、蘇我馬子、聖徳太子とともに冠位十二階の制定、十七条憲法の撰進などを行った。明日香村の雷丘 ^{いかづちのおか} 東方遺跡から、「小治田宮」と墨書した平安時代初期の土器が出土した。	P71
あすかのみや 飛鳥宮	舒明天皇は飛鳥岡本宮 ^{おかもとのみや} 、皇極天皇は飛鳥板蓋宮 ^{いたがきのみや} 、斉明天皇は後飛鳥岡本宮 ^{のちの} 、天武・持統天皇は飛鳥浄御原宮 ^{きよみはらのみや} にそれぞれ宮を営んだ。	P72
あすかのかわべのかりみや 飛鳥河辺行宮	中大兄皇子は皇極前天皇、皇后間人皇女 ^{はしひとのひめみこ} 、大海人皇子らを率いて、飛鳥河辺行宮に遷る。百官人も従った。その故地については諸説がある。	P72
2. 飛鳥時代の 国際交流 仏教伝来	仏教は中国から朝鮮半島を経て、日本に伝わった。百済から倭国へ仏教が公伝された時期は、538年または552年（ゴミは午後に）。百済の武寧王と聖明王の時代に、五経博士 ^{ごきょうのはかせ} 、医博士 ^い 、易博士 ^{やく} 、暦博士 ^{こよみ} などが倭国へ派遣された。百済・高句麗の滅亡、新羅による朝鮮半島統一、倭国への大量の亡命渡来人の発生は、飛鳥時代の東アジア史を象徴するできごと。	P73
さうぶつは はいぶつは 崇仏派と排仏派	百済の聖明王は、欽明天皇に仏像と經典を献上（仏教公伝）。天皇は蘇我稲目に仏像の安置と礼拝を許した。稲目は仏像を自らの小墾田家 ^{おほりだのいえ} に安置し、向原家を喜捨して仏堂とした（捨宅寺院）。敏達天皇13年、渡来人の司馬達等 ^{しばたつと} の娘が日本で初めて出家し、善信尼 ^{ぜんしんに} に。蘇我馬子（崇仏派）は大野丘の北に塔を建て、法会を行い、仏舍利を塔の柱頭に納めた。物部守屋（排仏派）は疫病の流行を仏教のせいとし、大野丘の塔や仏像・仏殿を焼き、焼け残った仏像も難波の堀江に廃棄。用明天皇2年、蘇我馬子は物部守屋を滅ぼし、飛鳥寺（法興寺、元興寺）の建立に着手。	P74
飛鳥寺の建立 （法興寺、元興寺）	飛鳥寺は、わが国最初の本格的な伽藍寺院。造営には、百済の造寺工 ^{てらつくるとくみ} や瓦博士 ^{かわらはかせ} などの技術者群が全面的に支援。これら技術者群は高市郡居住の百済系渡来人で、本国から派遣された技術者と協力して事業を推進。瓦葺屋根、礎石建ちの建物が初めて誕生。また新しい鑄造技術により、金銅仏 ^{こんどうぶつ} 、梵鐘 ^{ほんしょう} などが造られた。飛鳥大仏（丈六釈迦如来像 ^{じょうろくしゃかによらいぞう} ）を制作したのも、渡来系技術者である鞍作鳥（止利仏師）だった。	P75

全国的な技術革新の進展	6世紀末頃から、百済から倭国へ派遣された人々や、その指導を受けた在地の工匠、工人たちにより、大きな技術革新の波が起こる。飛鳥寺、法隆寺をはじめとする壮大な伽藍が造営。天武天皇時代の飛鳥（倭京）には、京内24寺と称される寺があり、400～500人ももの僧侶がいた。7世紀半ば以降になると、天皇家が官寺を建立。最初に舒明天皇が百済大寺→高市大寺（天武天皇が高市郡に移す）→大官大寺と改名。天武・持統天皇の時代に、三大官寺（大官大寺、川原寺、飛鳥寺）。地方豪族による寺院の造営が奨励され、全国で46（推古天皇36年）→545（持統天皇6年）に。瓦の需要が高まり、須恵器窯から瓦陶兼業窯への転用が各地へ拡散。高い技術力を持った渡来人集団は、段階的、飛び地的に畿内から地方に拡散、技術面・マンパワー面で国土開発を支えた。	P76
飛鳥時代の医術と薬	飛鳥寺は一種の医療センターとして機能（飛鳥池工房遺跡出土木簡などから）。飛鳥時代には、宮廷を挙げて薬猟、薬草栽培も（飛鳥京跡苑池出土木簡）。腹の冷えに効く薬用酒（鼓酒）を薦めた木簡や中風（脳血管疾患）で用いる薬の処方箋を記した木簡も見つかる。大宝律令下で、典薬寮（役人や貴族を治療）、内薬司（皇族を治療）が置かれた。	P77
仙薬（霊薬）の献上	日本書紀には、百済僧の法蔵が、天武天皇に白朮（キク科のオケラ）を煎じた胃薬を献上したという記録が2回載り、「天皇の為に招魂しき（靈魂に活力を与えた＝魂振り）」という記述もある。法蔵は医術や薬草学に長じていた。	P79
節日と朝廷行事	節日とは季節の変わり目などに祝いをする日のことで、中国に由来。養老令には、正月1日、7日、16日、3月3日、5月5日、7月7日、11月大嘗（新嘗）日を節日とし、正月中旬には大射（弓矢行事）をすることが定められていた。	P79
薬猟	推古天皇の時代には、正月7日の宴や5月5日の薬猟が挙行。推古天皇19年5月5日には、菟田野（宇陀市阿騎野か）で薬猟が行われた。翌年5月5日には羽田（高市郡高取町羽内あたり）で薬猟。7世紀初頭には、毎年5月5日に宮廷儀礼として行われた。近江遷都後の天智天皇7年には、蒲生野（滋賀県近江八幡市～東近江市）で薬猟。額田王が「あかねさす紫野行き…」と歌い、大海人皇子が「紫のにはほへる妹を…」と答えた万葉歌は、この時のものか。	P79
牛乳の摂取と加工	新撰姓氏録には、呉（中国南朝）の智聡（呉の国主・照淵の孫）が内典（仏典）、外典（仏典以外の書物）、薬書や鍼灸にかかわる明堂図（ツボの位置や気・血の通り道を示す図）、仏像、伎楽調度などを持って欽明朝の倭国に渡来。その息子の善那は孝徳天皇に牛乳を献上し、和薬使主の姓を賜った。また類聚三代格には、和薬使・福常（＝善那）が乳を搾る術を習い、初めて乳長上に任命され、その子孫が世襲した。和薬使主氏は、酪や蘇の製法を知っていたか。	P80

飛鳥時代の食事	米と副食という組み合わせで、回数は1日2回。副食などには、魚介類、野菜、海藻、 ^{ひしお} 醬（醤油のルーツ）、未醬、酢など。庶民の食事は、米、野菜、海藻類、塩、海藻（アラメ）汁。大宝令には、発酵食品名（醬、未醬、 ^{くき} 豉＝豆由来の食品）や主 ^{ひしおのつかさ} 醬という役職名が載る。主醬はのちに独立して ^{しょういん} 醬院に。	P81
肉食文化と仏教思想	天武天皇4年、初の肉食禁止令。禁止されたのは、牛、馬、犬、猿、鶏だけで、猪や鹿は除外。しかも禁止期間は、4～9月の稲作期間のみ。これは仏教ではなく、 ^{ものいみ} 齋戒（稲作推進のため、特定の動物の殺生と肉食を禁じた）。9世紀中頃までの殺生禁断令には、仏教の影響を過大視することはできない。	P82
仏教の伝来と僧尼の活躍	百済の ^{ぶねいおう} 武寧王、 ^{せいめいおう} 聖明王の時代、中国南朝の ^{りょう} 梁に遣使して南朝文化を総合的に摂取、仏教の受容も本格化。日本にも仏教が伝来したが、反発も強く、当初は朝鮮半島からの渡来人によって信仰された。その代表格が ^{しばたつと} 司馬達等とその一族。達等は蘇我馬子の命により、 ^{はりま} 播磨（兵庫県南西部）で ^{えべん} 恵便（高句麗の僧で、還俗していた）を探し出す。達等の娘の ^{しま} 嶋は恵便に師事して ^{ぜんしんに} 善信尼（日本最初の尼僧）となり、達等の子の ^{くらべの} 鞍部（ ^{くらつくりの} 鞍作） ^{たすな} 多須奈（那）は出家。多須奈の子は、仏師の ^{とり} 鞍作鳥（ ^{とりぶっし} 止利仏師）。	P82
^{ぜんしんに} 善信尼	司馬達等の娘で、俗名は嶋。恵便に師事して日本最初の尼僧に。物部守屋らに弾圧され、僧衣を奪われ、 ^{つばいち} 海石榴市の ^{うまや} 駅家に拘束された。のち百済に留学し、帰国後は ^{さくらいでら} 桜井寺（ ^{とゆらでら} 豊浦寺の前身）に居住し、尼僧の育成に努めた。	P83
^{えじ} 恵慈	高句麗の僧で、聖徳太子の仏法の師。百済僧の ^{えそう} 恵聡とともに法興寺（飛鳥寺）に住み、仏教を広めた。のち聖徳太子撰の ^{さんぎようぎしよ} 三経義疏を携えて高句麗に帰国。太子が没すると大いに悲しみ、翌年の太子の命日に死去。	P83
^{えそう} 恵聡	百済の僧で、聖徳太子の仏法の師。恵慈とともに、法興寺（飛鳥寺）に住み、仏教を広めた。	P83
^{かんろく} 観勒	百済の僧。暦本、天文地理、 ^{とんこうほうじゆつ} 遁甲方術（神仙の術、占星術）などの書を伝える。 ^{そうごう} 僧綱（僧尼を統制する官職）が設置されたとき、最初の僧正（僧綱のトップ）に任命された。飛鳥池工房遺跡から「観勒」と書かれた木簡が出土、飛鳥寺に居住していた可能性が高い。	P83
^{くすしえにち} 薬師恵日	留学生として隋に入り、唐成立後に帰国。舒明天皇2年、 ^{いぬがみのみたすき} 犬上御田鍬とともに最初の遣唐使となり、 ^{はくち} 白雉5年には遣唐副使として渡唐。	P83
^{みなぶちのしょうあん} 南淵請安	南淵（明日香村稲刈）に居住した ^{やまとのあやうじ} 東漢氏（渡来人）の一族。推古天皇16年、小野妹子、高向玄理、僧旻らとともに遣隋学問僧として中国に渡った（32年後に帰国）。中大兄皇子と中臣鎌足は、請安のもとで周孔の教え（儒教）を学び、その行き帰りに蘇我入鹿を討つ計画を練った。墓は、明日香村稲刈の集落の南端、飛鳥川に面した尾根上にある。	P83 ～84

<p>そうみん 僧旻 (中国系渡来氏族)</p>	<p>推古天皇 16 年、小野妹子、高向玄理、南淵請安らとともに遣隋学問僧として中国に渡った。私堂で周易(易経)を講義。乙巳の変後は高向玄理とともにくにの博士として孝徳朝の政治改革に参画、八省百官の制(律令の官制)を定めた。</p>	<p>P84</p>
<p>どうしやう 道昭</p>	<p>渡来系の船氏出身、飛鳥寺で出家。遣唐学問僧として入唐、長安で玄奘に師事し、法相を学んだ。帰国後は飛鳥寺の東南に禅院を建てて住む。 遺言により、粟原(桜井市)で火葬された(わが国の火葬のはじまり)</p>	<p>P84</p>
<p>ぎえん 義淵</p>	<p>元興寺(飛鳥寺)の智鳳に師事して法相を学ぶ。天智天皇が草壁皇子と義淵をおかのみや岡宮で養育し、のちに岡宮を義淵に与えて岡寺(龍蓋寺)にしたとも。門下に、玄昉、行基、良弁など。</p>	<p>P85</p>
<p>行基</p>	<p>道昭に師事して法相を学び、法興寺(飛鳥寺)に住し、のち薬師寺に移る。畿内で社会事業に携わる。晩年は東大寺の大仏造立に協力し、大僧正に。</p>	<p>P85</p>
<p>空海</p>	<p>渡唐して長安・青龍寺の恵果に学び、本格的な真言密教を日本に伝える。高野山に金剛峯寺を開き、京都の東寺(教王護国寺)を整備。川原寺で伊予親王慰霊の法会が開かれたとき、空海が読経。その後、川原寺東南院は、高野山に通う際の宿所として与えられた。</p>	<p>P85</p>
<p>渡来人の居住地</p>	<p>応神朝に渡来した東漢氏の祖・阿智(知)使主は檜隈に居地を与えられ、仁徳朝にさらに同族が来ると、ここに今来郡が建てられた(のち高市郡に統合)。雄略朝には百済が献上した手末才伎(技芸の優れた人)を東漢氏に託し、飛鳥の上桃原、下桃原、真神原に住ませた。明日香村内や周辺にある細川谷古墳群、阿部山古墳群、真弓・与楽古墳群、南山古墳群(橿原市南山町)は、渡来系の人々が営んだ群集墳。大和国高市郡に置かれた屯倉(朝廷の直轄領)には、小墾田屯倉と桜井屯倉(明日香村豊浦=桜井に置かれた屯倉)。</p>	<p>P85</p>
<p>やまとのあや 東漢(倭漢)氏</p>	<p>応神朝に渡来した阿智(知)使主を祖とし、渡来系集団を組織。本拠地は檜隈。蘇我氏と密接につながり、文書記録、外交、財政などを担当。錦織、鞍作、金作などの諸氏を配下に置き、製鉄、武器生産、機織、須恵器生産なども。</p>	<p>P86</p>
<p>いまきのあやひと 今来漢人</p>	<p>多様な技術を持って政権に奉仕した渡来人。東漢氏や西文氏などの統率下に入る。飛鳥の地には僧旻などの今来漢人が多く住んだ。</p>	<p>P87</p>
<p>みまし 味摩之</p>	<p>百済人で、推古朝に来朝。呉(中国南朝)で学び伎楽舞に長じていた。飛鳥の桜井(豊浦)に住み、少年たちに伎楽を教習。味摩之がもたらした伎楽は、日本の演劇史のはじまり。</p>	<p>P87</p>

<p>ほうしやう 豊璋</p> <p>ぎやうき くげ (翹岐、糺解)</p>	<p>百済の義慈王の王子。人質として弟の善光とともに来朝。</p> <p>百済滅亡後、日本から「百済王」の称号を与えられた。</p> <p>祖国復興のため帰国するが、唐・新羅軍に包囲され、高句麗に逃亡。</p>	P87
<p>ぜんこう 善光</p> <p>ぜんこう さいじやう (禪広、塞上)</p>	<p>百済の義慈王の王子。人質として兄のと豊璋とともに来朝。白村江敗戦後、難波に居住。天武天皇に葉や珍宝を献上。持統天皇5年、百済王の姓を与えられ、百済王氏の祖となった。</p>	P87
<p>くだらのこにきしうじ 百済王氏</p>	<p>百済滅亡後、日本にとどまった百済王子・善光を祖として日本で成立した氏族。子孫は難波の百済郡、のちに河内国交野郡（大阪府枚方市）を本拠とし、律令官人として活躍。一族の敬福は東大寺大仏の造営時、陸奥の黄金を献上。</p>	P87
<p>けんぜいし けんとうし 遣隋使、遣唐使</p>	<p>推古朝に、中国への公式な国使として、遣隋使が派遣された。舒明朝以降は、遣唐使が派遣。白村江の敗戦後、一時的な中断があったが、大宝年間に復活。</p>	P88
<p>おののいもこ 小野妹子</p>	<p>推古天皇15年、遣隋使として中国に渡り、対等な関係での国交樹立に努めた。隋の煬帝に差し出した国書に「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きや」。翌年には高向玄理、僧旻、南淵請安らを伴い、再び入隋。</p>	P89
<p>あわたのまひと 粟田真人</p>	<p>遣唐使の執節使（長官）として入唐。経史（中国の経書と歴史書）に通じ、容姿温雅と讃えられ、則天武后は彼を大明宮の麟徳殿で饗応、倭国から日本国への国号の変更を正式に承認。大宝律令の選定にも関与した高官。</p>	P89
<p>るがくしやう るがくそう 留学生、留学僧</p>	<p>遣隋使や遣唐使に同行して、学問、技術、芸能を研究する学問生（留学生）と仏教を研究する学問僧（留学僧）が派遣された。初回は、推古天皇16年の第3次遣隋使のとき。来日していた隋使・裴世清の帰国に伴うもので、高向玄理以下8人の留学生・留学僧が同行（全員が渡来系氏族の出身）。</p>	P89
<p>たかむこのくるまる 高向玄理</p> <p>(げんり、黒麻呂)</p>	<p>小野妹子に従って中国に渡る。帰国後、改新政府に参画し、僧旻とともに国博士となり、律令官制を整備。大化2年、新羅に派遣され、翌年、人質の金春秋（新羅王）を伴い帰国。白雉5年、再び入唐し、唐で客死。</p>	P89
<p>3.律令国家形成 と飛鳥・藤原 乙巳の変</p>	<p>皇極天皇4年（645）、中大兄皇子らは蘇我倉山田石川麻呂を仲間に引き入れ、三韓の貢物を受納する儀式と称し、飛鳥板蓋宮に蘇我入鹿を誘い出し、斬殺。入鹿の死を知った蝦夷は、甘樫丘の自邸に火を放って自殺。蘇我本宗家が滅ぶ。これは、古人大兄皇子を推す蝦夷・入鹿と、軽皇子（孝徳天皇）や中大兄皇子らを支持する勢力との間に起こった皇位継承争い。</p>	P90
<p>なにわ 難波遷都と国際情勢</p>	<p>大化元年、孝徳天皇は飛鳥から難波へ遷都（激変する東アジア情勢に対処するため）。百済は大伽耶（新羅領）に侵攻し、百済・新羅の紛争が再燃。唐・新羅と高句麗・百済の本格的な抗争に発展。</p>	P90

<p>改新の詔 <small>みことりのり</small></p>	<p>乙巳の変の直後、孝徳天皇と中大兄皇子を中心とした新政権が樹立され、大化の改新（政治改革）が行われた。翌大化2年正月元日、改新の詔が發布。皇室・豪族の個別的支配権を否定し、中央集権的な支配体制をめざす。公地公民制、国・郡・里制、租庸調（税制）などの諸政策を表明。</p>	<p>P91</p>
<p>部局（豪族私有民）の廃止 <small>かきべ</small></p>	<p>改新の詔で廃止され、その代償として諸臣には食封（給与）を支給。のち大氏、小氏、伴造などの氏上（氏の首長）にそれぞれの民部（食封）を定めた。 <small>じきふ おおうじ かつく とものみやつこ うじのかみ かきべ</small></p>	<p>P91</p>
<p>大臣・大連から左大臣・右大臣へ <small>おおおみ おおむらじ</small></p>	<p>ヤマト政権における最高執政官は、大臣、大連。大臣には葛城、平群、巨勢、蘇我などの臣姓豪族が任命され、6世紀中頃以降は蘇我氏が独占。大連には連姓豪族の大伴、物部が任命されたが、6世紀末の物部守屋の滅亡により消滅。大化改新で大臣の制は廃止され、左右大臣制に。最初の左大臣は阿倍内麻呂、右大臣は蘇我倉山田石川麻呂。なお太政大臣は律令制の太政官の長官で、職掌のない則闕の官（ふさわしい人物がいなければ欠員にできる官職）なので、左大臣が行政府の最高責任者。 <small>へぐり こせ 蘇我 大連 大伴 物部 阿倍のうちまろ 蘇我倉山田石川麻呂 太政大臣 律令制 太政官 長官 職掌 則闕の官 欠員にできる官職</small></p>	<p>P92</p>
<p>白村江の戦いと近江遷都 <small>はくせんこう</small></p>	<p>660年、倭国と友好関係にあった百済が、唐・新羅の連合軍に滅ぼされると、斉明天皇は旧百済貴族の要請を受け、百済復興のための援軍派遣を決定。翌年正月、天皇は陣頭に立って筑紫（福岡県）向かったが、筑紫に着いてまもなく、朝倉宮で急死。662年、中大兄皇子は皇太子のまま、斉明天皇の後継者となる（称制）。倭国は、人質として来日していた豊璋に「百済王」の称号を与え、軍勢を授けて百済故地に送り出した。しかし663年、倭国・旧百済連合軍は、唐・新羅の連合軍に、白村江の戦いで大敗。撤退後の倭国では、唐、新羅の侵攻に備え、北部九州、瀬戸内海から大和に至るまで、山城（朝鮮式山城）などの防衛施設を設けた。664年には、対馬嶋、壱岐嶋（ともに長崎県）、筑紫に防人と烽（火を上げて急を知らせる施設）を置き、大宰府防御のため、水城、（大宰府防御のための土塁）、大野城、基肄城を築いた。天智天皇6年（667）、飛鳥から近江大津宮に遷都。同年、大和と河内の国境近くで、高安城を築いた。 <small>ほうしやう 豊璋 倭国 人質 来日 称号 百済王 軍勢 百済故地 送り出した 663年 倭国 旧百済連合軍 唐 新羅 連合軍 白村江の戦い 大敗 撤退 倭国 唐 新羅 侵攻 備え 北部九州 瀬戸内海 大和 山城 朝鮮式山城 防衛施設 設けた 664年 対馬嶋 壱岐嶋 長崎県 筑紫 防人 烽 火を上げて急を知らせる施設 置き 大宰府 防御 ため 水城 大宰府 防御 ため 土塁 大野城 基肄城 築いた 天智天皇 6年 667年 飛鳥 近江 大津宮 遷都 同年 大和 河内 国境 近く 高安城 築いた</small></p>	<p>P92</p>
<p>太政大臣と知太政官事 <small>だいじやう ちだいじやうかんじ</small></p>	<p>太政大臣は、唐の三師・三公を模して設けられた太政官の最高官で、則闕の官（ふさわしい人物がいなければ欠員にできる官職）。大友皇子、高市皇子が任命された（皇太子に准じる皇位継承者として）。大宝令制定後は、忍壁皇子、穗積皇子、舎人皇子、鈴鹿王など天武天皇の子や孫が知太政官事という官職（太政官政治を安定させるために皇親の長老を任命するもの）に就任。 <small>三師 三公 模して 設けられた 太政官 最高官 則闕の官 欠員にできる官職 大友皇子 高市皇子 任命 皇太子 准じる 皇位継承者 大宝令 制定 後は 忍壁皇子 穂積皇子 舎人皇子 鈴鹿王 天武天皇 子や孫 知太政官事 官職 太政官政治 安定 させる ため 皇親 長老 任命 する もの 就任</small></p>	



2. 歴史と古代の国際交流（3）

項目名	解 説	頁
官司制の整備、 六官制から二官 八省制へ	天武朝の六官とは、法官（のちの式部省）、理官（治部省）、大蔵（大蔵省）、 兵政官（兵部省）、刑官（刑部省）、民官（民部省）。飛鳥浄御原令下で、太政官、 神祇官、八官の官制が整えられ、大宝令下の二官八省制とほぼ同じ官制に。	P93
国・評・五十戸制 から国・郡・里制へ	大化改新からほどなくして、国・評・五十戸という地方行政区画が整備され、 国 宰、評 造、五十戸長が地方を支配。 のち五十戸は「里」に、評は「郡」と改められた。	P94
京の成立	条坊街区を備えた京城が成立するのは、藤原京から。藤原京の造営は、天武朝 から進められた。天武天皇 13 年、天皇は京師を巡行して宮室の地を定めた。 日本書紀天武天皇 14 年 3 月条に、京 職（京城を管轄する官司）大夫の語あり。	P95
畿内制	王城周辺を天子の直轄領として指定するもので、税制や民政上の優遇措置が 講じられた。大化の改新で導入され、改新の詔では、東は名墾の横河 （三重県名張市）、南は紀伊の兄山（和歌山県伊都郡かつらぎ町）、西は赤石の 櫛淵（兵庫県明石市）、北は近江の狭狭波の合坂山。難波長柄豊碕宮を中心に、 大倭、山背、津、河内の 4 国にわたる。	P95
壬申の乱	前年に出家して吉野に退去した大海人皇子（のちの天武天皇）と、近江朝廷の 大友皇子の間で引き起こされた皇位継承をめぐる争いで、古代史上最大規模の 内乱。中央豪族の勢力も 2 分され、大和、伊賀、伊勢、美濃、近江、山背、 摂津、河内など、畿内とその周辺を舞台に、戦いは約 1 ヶ月。 これに勝利した天武天皇により、政治の中心は飛鳥に戻された。	P96
吉野の盟約	天武天皇と鸕野讃良皇女（のちの持統天皇）は、壬申の乱の起点となった吉野 へ行幸し、同行した草壁、大津、高市、川島、忍壁、志貴の諸皇子と盟約を 結んだ。草壁皇子を筆頭とする序列決定への同意を求めたか。天皇は吉野から 戻ると、20 歳になった草壁を皇太子に任命、翌々年には 21 歳になった大津を 朝廷の会議に列席させた。	P96
皇親政治	天武・持統朝から文武朝の初期まで、臣下出身の議政官（のちの公卿）の数が 抑えられ、重要な政策の責任者に皇子（親王）や諸王が多く任命された。	P97
律令の制定	飛鳥時代には、冠位十二階、十三階、十九階、二十六階を経て、冠位四十八階 制が整えられた（天武天皇 14 年）。また近江令、飛鳥浄御原令を経て大宝律令 が制定された。律は刑法、令は行政法。飛鳥浄御原令は天武天皇が編纂を命じ、 持統天皇 3 年に完成、大宝令に近い内容。大宝律令（刑部親王、藤原不比等ら が撰定）で初めて律と令が揃った。養老律令が施行されるまで運用。	P97
歴史書の編纂	推古天皇 28 年、聖徳太子と蘇我馬子により、天皇記（すめらみことのふみ）、	P98

	<p>こつき 国記（くにつふみ）がまとめられた。乙巳の変で蘇我蝦夷の私邸にあった天皇記、国記も焼かれたが、国記は火中から取り出され、中大兄皇子（のちの天智天皇）に献上された。天武天皇は稗田阿礼に誦習を命じ、その後元明天皇がおおのやすまる太安万侶に筆録を命じ、古事記がまとめられた。日本書紀は、天武天皇の命により、川島皇子とおさかべのみこ忍壁皇子が総裁として編纂を開始、太安万侶も編纂に参加。養老4年、とねりのみこ舎人皇子からげんしょう元正天皇に奏上された。</p>	
<p>はんでんせい 班田制の施行と けいちよう 戸籍・計帳の作成</p>	<p>律令制の柱は、①官職と位階による官人制、②唐のきんでんせい均田制にならった班田制、③戸籍・計帳による公地公民制。班田収授は国家財政を安定させ、農地開発を進めるため、その基礎となる農地と農民を把握するため、戸籍と計帳が作られた。戸籍はこ戸を単位とする基本台帳。天智天皇の時のこうごねんじやく庚午年籍が全国的に作成された最初の戸籍。その後、持統天皇の時、飛鳥浄御原令に基づいてこういん庚寅年籍が作成された。庚寅年籍以降、戸籍は6年ごとに作成された。計帳は、庸、調、ぞうよう雑徭（労役）、兵役などを賦課する基本台帳として、毎年作られた。庸や調は男子個人に課せられ、年齢も関係した。</p>	P99
<p>藤原京遷都 (持統天皇8年 =694年)</p>	<p>きよみはらのみや 飛鳥浄御原宮から ふじわらのみや 藤原宮に遷都。藤原宮は大和三山のほぼ中央にあり、宮域は約1km四方。だいり内裏、だいくでん大極殿、ちようどういん朝堂院が設けられ、きゆうじよう宮城12門の内側に、中央官庁のかんが官衙（役所）が多数配置。藤原京は中国にならった初の本格的都城で、あらましのみやこ新益京と呼ばれた。京城は東西10坊、藤原宮を中心に大和三山が入る約5km四方。人口は3~5万人。持統、文武、元明の三代の天皇・16年間の都。</p>	P99
<p>藤原京と万葉集</p>	<p>ふじわらのみや 「藤原宮の御井の歌」(巻①52)によると、藤原宮が栄えるよう、大和三山に守られた土地が選ばれた。近江のたなかみやまつくりどころ田上山作所で採取した木材は、だいでど大戸川から宇治川へ下り、木津川を遡り、いずみのつ泉津（木津）で陸揚げされ、平城山を越えて藤原京へ運ばれた。「藤原京の役民（夫役の人）の作る歌」(巻①50)がある。</p>	P100
<p>シルクロードと 飛鳥・藤原</p>	<p>シルクロードは、ユーラシア大陸の東西南北を貫く長距離交易路。中国からは絹、紙、しつっき漆器、ローマ・ペルシャからは金銀器、ガラス器、薬品、じゅうたん絨毯などがここを通過して運ばれ、仏教も伝播。近年はソグド商人（拠点＝中央アジア）や、ソグド商人と連携したトハリスタン（バクトリア）商人の活動も知られる。正倉院宝物のしろるりわん白瑠璃碗、白瑠璃瓶などのガラス器、むしよくし無食子（止血薬）、みつだそう密陀僧（紫鉱＝薬・染料）などの薬物はペルシャ産。日本に漂着した吐火羅人（トハリスタン人）、舎衛人（インド人）が、直接持ち込んだ可能性もある。</p>	P101
<p>平城京遷都</p>	<p>和銅元年、げんめい元明天皇は藤原京から平城京へ遷都するみことのり詔を発し（平城遷都を言明）、和銅3年に遷都。藤原京は、わずか16年で廃絶された。</p>	P102

	<p>平城遷都を主導したのは、藤原不比等。遷都に際しては、藤原京の建造物は可能な限り解体され、移築・再利用。</p> <p>平城宮朱雀門は、建物ごと解体・移築か。平城宮第一次大極殿院から出土した木樋は、藤原宮の掘立柱か（平城宮跡いざない館で展示中）。</p>	
<p>奈良・平安時代の 飛鳥・藤原</p>	<p>平城遷都により皇族や貴族は平城京に移ったが、飛鳥との関係が途絶えたわけではない。奈良時代にも、飛鳥の<small>おほりだのみや</small>小治田宮（小墾田宮）や<small>しまのみや</small>嶋宮があった。</p> <p><small>じゆんにん</small>淳仁天皇は、<small>おほりだのみや</small>小治田宮（小治田岡本宮）に行幸して5ヵ月間滞在、「新京」と称して諸国の<small>ほしいい</small>糲（乾燥米飯）や調、庸を納めさせた。<small>いかづちのおか</small>雷丘東方遺跡の平安時代初期の井戸から、「小治田宮」と書かれた土器が出土したことから、奈良時代の小治田宮の位置が確定。8世紀には、香具山の西北麓に、<small>かぐやましやうそう</small>香山正倉（大和国の正税などを収納・管理）が置かれた。</p> <p>8世紀末、長岡京・平安京遷都が行われた。貴族たちも大和を離れ、平安京の都市住民化し、旧来の本拠地との関係は疎遠に。</p> <p>9世紀から10世紀にかけて、社会は大きく変貌。中央では、藤原氏と源氏以外の伝統的氏族（紀氏、大伴氏など）は没落し、氏族的な体制が崩れていく。</p>	P103
<p>飛鳥時代に渡来した 動物</p>	<p>1. <small>くじゃく おうむ</small>孔雀、鸚鵡＝新羅から送られることが多かった。小墾田宮や飛鳥宮近くの苑地で飼育されたか。2. <small>かきさぎ</small>鶺鴒＝新羅から鶺鴒、百済から<small>はくち</small>白雉（白いキジ）が献上された。<small>なにはのながらのとよさきのみや</small>難波長柄豊碕宮近くの苑地で、飼育されたか。3. <small>らくだ</small>駱駝、<small>うさぎうま</small>驢（ロバ）、<small>ら</small>騾（ラバ）＝各地から中国に運ばれた動物を、朝鮮半島経由で運ばれたか。</p>	P104
<p>4. 中世の飛鳥・藤原 中世における 飛鳥・藤原の寺院</p>	<p>寺院は落雷や災害、戦乱などで何度も焼失・倒壊し、その度に再建された。藤原道長は高野参詣の往路、飛鳥に立ち寄り、山田寺、本元興寺（飛鳥寺）、橘寺の伽藍と宝物を見た。</p> <p>飛鳥寺は建久7年（1196）に落雷で全焼し、本尊釈迦如来坐像（飛鳥大仏）の頭部と手だけが残された。</p> <p><small>かわらでら</small>川原寺は9世紀に空海との関係ができて以来、真言宗寺院として存続。11世紀には京都の東寺が支配を強化、川原寺を東寺の末寺と位置づけた。</p> <p>平安後期、観音霊場三十三所巡礼が流行すると、岡寺（<small>りゅうがいじ</small>龍蓋寺）の巨大な如意輪観音菩薩坐像（<small>そぶつ</small>塑像）に対する信仰が高まる。岡寺は興福寺の末寺となっていたため。鎌倉時代には興福寺と多武峰の争いに巻き込まれ、しばしば堂塔を焼失した。</p> <p>橘寺は11世紀には法隆寺、ついで興福寺の末寺に。12世紀に塔が焼失すると、西大寺との関係が強まる。のち聖徳太子の誕生地であると喧伝され、再建伽藍には善光寺式阿弥陀如来像を安置する阿弥陀堂（如来堂）、太子誕生地とされる往生院などが新たに加えられ、篤い信仰を受ける。</p> <p>山田寺は道長が参観して間もなく、土砂流入によって回廊が倒壊した。</p> <p>興福寺は治承4年の平重衡の焼き討ちで焼亡、のち伽藍は再建されるが、本尊復興が進まず、東金堂衆が山田寺に押し寄せ、丈六薬師如来像と脇侍の日光・月光菩薩像を強奪。この薬師三尊像は、興福寺東金堂の本尊とされる。のち火災で丈六薬師如来像は焼け落ち、仏頭（銅造仏頭）と日光・月光菩薩が残る。</p>	P105

<p>飛鳥・藤原地域の 荘園</p>	<p>班田収受制が崩壊すると、口分田、墾田は公田と呼ばれ、地域の有力者が耕作・納税を請け負う。やがて有力者は公田の私領化を進め、荘園に発展。飛鳥・藤原地域では、川原寺の寺辺所領が東寺領荘園となり、その西隣に春日社領大嶋荘、東大寺領万弓荘。大規模な私領としては、源頼親の所領に起源する東大寺御油免田（灯油を調達するためのもの）。こうして高殿荘、東喜殿荘、西喜殿荘、城戸荘、波多荘などが生まれた</p>	<p>P107</p>
<p>興福寺の大和国支配</p>	<p>12世紀、大和国では興福寺の支配体制が強くなり、国司の支配は有名無実化。鎌倉幕府も大和には守護を置かず、興福寺の支配力を容認したため、興福寺は大和一国の支配権を掌握。興福寺には多くの子院（院家）があったが、中から一乗院と大乘院が摂関家から院主を迎える門跡へと発展、膨大な荘園を集積。</p>	<p>P107</p>
<p>興福寺と多武峰の 抗争</p>	<p>中世の興福寺は主として寺僧と国民（俗人領主で多くは春日社の神人＝下級神職）から構成。寺僧の下級の者は衆徒。衆徒は北大和、国民は南大和に多い。これに対抗したのが多武峰。多武峰には、中臣鎌足の墓所があり、9世紀半ばに寺院が形成され、10世紀には比叡山延暦寺の末寺に。 多武峰寺（妙楽寺、談山神社）の僧侶は、興福寺の衆徒・国民としばしば衝突し、多武峰の堂舎が焼き払われたことも。抗争は続き、正和3年（1314）までに14回の相論（紛争）・武力衝突が記録されている。</p>	<p>P108</p>
<p>越智氏と多武峰</p>	<p>南北朝時代、飛鳥周辺（南大和）で越智氏の勢力が伸長。観応の擾乱（1350年）で足利尊氏と対立した弟の足利直義は、南朝と提携するため大和に入り、越智伊賀守を頼って落ちのびる。興福寺では大乘院は北朝、一乗院は南朝と関係が深く、両門跡が戦う（越智氏は一乗院側）。南北朝の内乱は三代将軍足利義満の時代に集結するが、永享元年（1429）、幕府が吉野に残った南朝勢力を追討する中、南大和の越智氏と北大和の筒井氏が両陣営に分かれて争う大和永享の乱が始まる。南朝側の越智氏と多武峰は、幕府勢力に攻められ、永享10年に多武峰は焼亡、越智氏も一旦没落。やがて越智氏は、越智家栄を当主として復活。応仁の乱では筒井方は東軍、越智方は西軍に立つ。</p>	<p>P108</p>
<p>越智谷と越智郷</p>	<p>越智氏の本拠地は、越智谷（高取町越智～明日香村真弓までの東西の谷）。居館の越智城は、谷口の越智字オヤシキ。越智谷の北側には貝吹山城、高取山の山頂には南大和屈指の高取城が築かれた。越智氏の勢力は、高市郡全域と、葛上・忍海両郡に及び、応仁の乱の頃から越智郷と呼ばれた。</p>	<p>P109</p>
<p>飛鳥・藤原地域の 城跡</p>	<p>飛鳥・藤原地域には、戦国期の城跡が多い。飛鳥城、雷城、雷ギヲ山城、奥山城、岡城、小山城（越智氏に従った小山氏の居城）、野口植山城、野口吹山城、多武峰城塞群（御破裂山を本丸としこれを守る諸郭を尾根道沿いに配置）など。 小山城、多武峰城塞群以外の城はみな小さく、丘陵上に小規模な郭を築いたものがほとんど。</p>	<p>P110</p>

<p>越智氏の滅亡と 大和平定</p>	<p>中世後期の飛鳥では、越智氏など西の国人（生え抜きの武士）勢力と東の多武峰との間にあって、独自の在地勢力はほとんど育っていなかった。</p> <p>めいおう かんれい ほそかわまさもと あかざわともつね たくぞうけん 明応8年（1499）、管領（将軍の補佐）細川政元の家臣・赤沢朝経（沢藏軒 そうえき 宗益）が大和国に侵攻し、越智氏や筒井氏は和睦してこれに対抗。</p> <p>えいしょう 永正3年（1506）、朝経は再び大和を攻め、多武峰を陥落。この戦いで、多武 峰の僧徒（僧衆）は橘寺に放火。えいろく まつながひさひで 永禄2年（1559）、松永久秀が信貴山城 （生駒郡平群町）に入り、大和平定を進めるが、南大和では、越智氏と結んで いた多武峰の衆徒と抗争を繰り返す。永禄11年、織田信長は、筒井順慶に 大和支配を命じた。本能寺の変後、順慶は越智家秀を謀殺し、越智氏は滅亡。 織田・豊臣政権のもとで、順慶、ついで柴田勝家、羽柴（豊臣）秀長らが 大和支配を進めた。</p>	<p>P110</p>
<p>りょうじよほっしんのう 良助法親王（龜山 天皇の第8皇子）と 冬野墓</p>	<p>晩年、多武峰の清浄院に住み、仏教書を著わした。のち還俗して、冬野村 （明日香村冬野）に隠棲し、自ら多武峰優婆塞（男性の在家仏教信者）と 称した。この地で亡くなり、里人は優婆塞墓と呼んだ。現在、明日香村冬野に、 宮内庁が治定する冬野墓がある。</p> <p>じじょう 墓域には、南北朝末期に造られた五輪塔が残る。</p>	<p>P111</p>



3. 飛鳥・藤原地域の文化財（1）

項目名	解説	頁
<p>1.さまざまな遺跡</p> <p>宮殿遺跡、庭園遺跡</p>	<p>飛鳥における天皇の宮殿は掘立柱建物で、屋根は檜皮葺や板葺。礎石建ちの瓦葺建物は寺院だけだったが、藤原宮からは宮殿にも採用（中国大陸風建築への大転換）。飛鳥・藤原とその周辺には、道路や運河が設けられた。</p> <p>飛鳥板蓋宮の造営には、遠江（静岡県西部）～安芸（広島県西部）の人々を徴発。宮殿や邸宅には庭園がつくことがあり、島庄遺跡の大型方形池や後飛鳥岡本宮、飛鳥浄御原宮の飛鳥京跡苑池など。</p> <p>庭園の初見は、百済人が築いた呉橋や須弥山（小墾田宮の南庭）。</p>	P114
<p>宮殿遺跡</p>	<p>推古天皇が豊浦宮に即位して以降、飛鳥の地に天皇の宮が、約100年にわたり営まれた。現在の耕作地の地下に、掘立柱建物、石敷、石組溝などが良好な状態で残る。持統天皇8年、都が藤原に遷都。藤原宮では、大極殿、朝堂院、内裏、官衙が正方形の宮域内に規則的に配置され、礎石建ち瓦葺き建物が採用。</p>	P115
<p>豊浦宮跡</p>	<p>崇峻天皇暗殺後、推古天皇（母は蘇我氏）は豊浦宮で即位。この地は、蘇我稲目の向原家があった場所。豊浦寺跡の下層遺構では、6世紀後半の石組溝や7世紀初めに廃絶した掘立柱建物・石敷などを検出。</p>	P115
<p>小墾田（小治田）宮跡 （雷丘東方遺跡）</p>	<p>推古天皇は、豊浦から小墾田へ宮を遷した。小墾田宮は南門を入ると朝庭があり、そこには「庁」があった（大臣や大夫の座がある）。大門（閤門）の奥には、天皇が起居した大殿があった。淳仁天皇はここに行幸して5ヵ月ほど滞在、次の称徳天皇も紀伊へ行幸する途中に立ち寄った。雷丘東方遺跡の井戸跡から、「小治田宮」と書かれた墨書土器が出土。</p>	P115
<p>飛鳥宮跡 （史跡・飛鳥川右岸）</p>	<p>舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮など、宮号に「飛鳥」を冠するものの総称。大きくⅠからⅢ期。Ⅰ期遺構は、自然地形に向きを合わせた建物。一部に火災痕跡。舒明天皇の飛鳥岡本宮に該当。Ⅱ期遺構は、正方位にあわせて造営。東西193m、南北198m以上の方形の範囲を柱列や石組溝で囲む。皇極天皇の飛鳥板蓋宮か。Ⅲ期遺構は、Ⅱ期と一部重複しながら、やや西側に造営。内郭とそれを囲む外郭。内郭は東西152～158m、南北197m。周囲を屋根付きの掘立柱塀で囲む。内郭の南辺中央に南門、北側には3棟の大型建物が南北に並ぶ。北側の2棟は同規格の大型建物で、周囲は人頭大の石敷で舗装（内裏正殿か）。南側の1棟は四面廂付きの大型建物（政治・儀式のための正殿か）で、周囲は砂利舗装。これらは斉明天皇の後飛鳥岡本宮か。内郭の北西方に飛鳥京跡苑池が付属。天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮の遺構は、Ⅲ期遺構の内郭をそのまま継承するが、内郭の東南にエビノコ郭（東南郭）が付加。</p>	P116

<p>(エビノコ郭^{かく})</p>	<p>エビノコ郭は東西 94m、南北 55m の範囲を掘立柱塀で囲み、西に門。区画中央には、南面の 3 ヲ所に階段を備えた四面廂つきの大型掘立柱建物（大極殿、朝堂、殯宮か）、周囲は砂利敷き舗装。外郭には官衙などが配置されたか。</p>	<p>P117</p>
<p>藤原宮跡 (特別史跡)</p>	<p>藤原宮は、日本最初の本格的都城の中核部分。東西・南北とも約 1km。中央に朝堂院^{ちやうどういん}、大極殿^{だいごくでん}、内裏^{だいり}を南北に配置し、その東西に諸官衙^{しよくわんが}を整然と配置。朝堂院と大極殿は礎石建ち瓦葺き。内裏や官衙は掘立柱建物。大極殿跡は今も土壇として残り、土壇上には鴨公神社^{かみきみ}。藤原宮の計画は天武天皇 5 年開始、同 13 年には宮室の地が決定。藤原宮への遷都は持統天皇 8 年。</p>	<p>P117</p>
<p>藤原京と元日朝賀^{ちやうが}</p>	<p>藤原京（新益京^{あらましのみやこ}）は、藤原宮^{ふじわらのみや}を中心として周囲に条坊道路と街区を設定した都城。藤原宮を中心に、横大路、下ツ道、中ツ道を基準として約 530m 四方の条坊を設定。西京極^{にしきやうごく}（榎原市土橋町）と東京極（桜井市上之庄）が検出されていることから、十条十坊か。『周礼』に見える王宮を中心にして、四方に街区を配置したか。</p> <p>大宝元年正月元日、藤原宮の大極殿に文武天皇^{しゆつぎよ}が出御、朝堂院の庭に並ぶ臣下から祝詞を受ける朝賀の儀式が行われた。大極殿院南門（正門）に鳥形^{からす}の幢^{どう}（鳥形幢^{うぎやうどう}）を立て、それを中心に左右に日・月の幡^{ばん}と四神^{しじん}の幡の計 7 本の旗（幢幡^{どうばん}）を立て、外国の使節が参列、こうして文物の儀が備わった。</p>	<p>P118</p>
<p>田中宮跡^{たなかのみやあと} (榎原市田中町か)</p>	<p>舒明天皇 8 年、飛鳥岡本宮が火災に遭い、天皇は田中に宮を遷した。田中は蘇我氏の枝族である田中臣^{おみ}の本拠地で、田中廢寺で知られる。</p>	<p>P120</p>
<p>厩坂宮跡^{うまやさかのみやあと} (榎原市石川町、大軽町か)</p>	<p>舒明天皇 12 年、天皇は田中宮を離れ、伊予湯^{いよのゆ}に行幸、そのあと厩坂宮へ。</p>	<p>P120</p>
<p>百濟大宮跡^{くだらのおみやあと} (桜井市吉備周辺)</p>	<p>舒明天皇 11 年、天皇は百濟川のほとりに百濟大寺、百濟大宮を造営し、翌年、大宮に遷り住む（百濟大寺＝吉備池廢寺）。天皇は同 13 年、百濟大宮で崩御し、宮の北に殯宮^{もがりのみや}を営んだ（百濟の大殯^{おおもがり}）。</p>	<p>P120</p>
<p>飛鳥川原宮跡^{あすかかわはらのみやあと} (明日香村川原)</p>	<p>重祚した齊明天皇は飛鳥板蓋宮に入るが、火災に遭い、飛鳥川原宮に遷り住む。川原寺^{かわらでら}の下層遺構がこれに該当するとされ、整地跡や石組暗渠が発見。翌年、飛鳥岡に後飛鳥岡本宮を造営。</p>	<p>P120</p>
<p>嶋宮跡^{しまのみやあと} (明日香村島庄)</p>	<p>草壁皇子の宮。天武天皇も壬申の乱後、一時この宮に入った（東宮的な性格の宮か）。推定地は旧高市小学校跡一帯。16 棟以上の掘立柱建物が検出。付近には石組方形池や石組小池、人工流路も。</p>	<p>P120</p>
<p>飛鳥稻淵宮殿跡^{あすかいなぶちのみやあと} (史跡。明日香村稻渕、祝戸)</p>	<p>石舞台から飛鳥川を遡った坂田寺跡の対岸で発見された遺跡。整然と配置された 4 棟以上の掘立柱建物と、建物に囲まれた石敷広場。7 世紀半ばに造営され、7 世紀末に廢絶か。皇子宮の可能性もある。</p>	<p>P120</p>
<p>庭園遺跡</p>	<p>日本書紀によると推古天皇 20 年、百濟人の路子工^{みちこのたくみ}が小墾田宮の南庭^{しゆみせん}に須弥山、呉橋^{くれはし}を造った。須弥山は日本書紀の齊明紀に 3 度登場。</p>	<p>P121</p>

	<p>天武天皇 10 年、飛鳥寺の西の河辺で多禰嶋（種子島とその周辺）の人を饗宴し、種々の楽を奏したとある。公的な御苑としては、天武天皇 14 年、天皇が白錦後苑（公的な御苑）に行幸。持統天皇 5 年には、天皇が御苑（＝白錦後苑）で公私の馬を覧じた。邸宅内の庭園としては、蘇我馬子（嶋大臣）の嶋宅の池。乙巳の変のあと、この邸宅は皇室の宮となり、天武天皇 10 年、この池（＝勾の池）に、周防（山口県南東部）から献上された赤亀を放つ。</p>	
発掘調査により確認された庭園遺構	<p>飛鳥・藤原地域では発掘調査で多数の庭園遺構が確認されている。島庄遺跡では、1 辺約 42m の大型方形石組池や石組小池、石積みの人工流路。飛鳥池工房遺跡の北地区では、一辺約 8m の石組方形池。坂田寺跡では、中枢伽藍の北側で 7 世紀前半の方形池の護岸。雷丘東方遺跡（奈良時代～平安時代の小治田宮跡）では 7 世紀前半の石積護岸（南北長 15m 以上）が発見された。</p>	P121
飛鳥京跡苑池（史跡・名勝）	<p>飛鳥宮跡に付属する南北 280m、東西 100m の庭園、南池と北池、石組大溝などで構成。南池は直線的で、垂直に近い急な石組護岸に特徴。南池の南端では、石造物が出土し、大正時代に発見された出水（京都市左京区）の酒船石と接続することが判明。池内には積み石による浮き島状遺構や、石組護岸を持つ中島が配され、池底は石敷。北池は急な石積護岸や階段状の石積護岸で囲まれ、中央には楕円形の深い部分がある。池の北東隅には石敷平坦面があり、東岸から西へ湧水を流す流水施設が発見。北池の北辺中央には石組水路があり、水路は北流して途中で屈曲して西に向かい、飛鳥川に流入。苑池の堆積土内からは、種子や果実が出土（桃、梨、梅、柿、松類）。飛鳥宮跡内部にも庭園。</p>	P123
その他の庭園遺構	<p>飛鳥寺西方遺跡（飛鳥寺の西の広場）北側の石神遺跡（多数の大型掘立柱建物が立ち並び、石敷広場を備えた斉明朝の服属・饗宴施設）では、須弥山石と石人像が出土。一辺約 6m の石組方形池が発見。</p> <p>ふるみや古宮遺跡（明日香村豊浦～橿原市和田町）は宮殿または有力豪族の邸宅。掘立柱建物、石組池と石組小溝、周囲の石敷で構成される 7 世紀前半の庭園が発見。</p> <p>ごくすい えん曲水の宴を催す庭園とすると、最古の事例となる。</p> <p>平田キタガワ遺跡（欽明天皇陵の南約 160m）から、東西方向の直線護岸（高さ約 1.6m、長さ 12m 以上）と底石、石敷広場が発見。猿石はここにあったか。</p> <p>うえのみや 上之宮遺跡（聖徳太子の上宮伝承地）からは石組池、石組溝、木簡片が出土。</p> <p>観覚寺遺跡では 6 世紀末～7 世紀の大型建物跡、オンドル施設、石組方形池。清水谷遺跡からは、5 世紀半ばの石組方形池が出土。</p>	P123
皇子の宮	<p>飛鳥・藤原地域には、天皇の宮以外に皇子宮があった。天武天皇には 17 人の皇子・皇女がおり、皇子はそれぞれ皇子宮を営んだ。藤原遷都後も、皇子宮は移転せずそのまま存続。草壁皇子は嶋宮（島庄遺跡＝旧高市小学校跡）に住んだ。発掘調査では 16 棟以上の掘立柱建物を検出。高市皇子の香来山宮は香具山の西北麓にあり、近くに埴安池。大津皇子の訳語田舎は、磐余池の北。</p>	P124

	<p>忍壁皇子の雷山宮は雷丘の近く、雷丘北方遺跡（天武朝末～藤原宮期の整然とした掘立柱建物群）か。新田部皇子の宮は八釣の地、舎人皇子の宮は細川谷、弓削皇子の宮は南淵山の麓か。</p>	
豪族の居宅	<p>蘇我氏の邸宅は、飛鳥周辺。蘇我稲目は輕曲殿（橿原市大軽町）、向原家（明日香村豊浦）、小墾田家（明日香村雷）。稲目の子・馬子は、石川（橿原市石川町）、嶋（明日香村島庄）。豊浦寺（向原寺）下層で6世紀後半の石組溝や7世紀初めに廃絶した石敷がめぐる掘立柱建物が発見。古宮遺跡では7世紀初頭に造営され、7世紀中頃に廃絶した掘立柱建物、石組大溝、石組池、石組溝小溝、石敷などが発見された、蘇我蝦夷の邸宅か。蝦夷・入鹿の邸宅は、甘檜丘家や畝傍山東の家。甘檜丘東麓遺跡では、7世紀中頃の土器や焼けた建築部材を大量に含んだ焼土層が見つかる（蝦夷・入鹿親子の上の宮門、谷の宮門の邸宅に関係する遺跡か）。蘇我倉山田石川麻呂（蘇我氏の傍系）は飛鳥に近い山田（桜井市山田）に邸宅（山田寺跡下層遺構）があり、邸宅近くに山田寺を造営した。藤原氏の大原の邸宅は明日香村小原にあったとされ、同地区の大原神社付近が中臣（藤原）鎌足生誕の地とされる。</p>	P125
古代飛鳥の道路	<p>日本書紀推古天皇21年の記事に「難波より京に至るまでに大道を置く」とあり、7世紀初め頃に飛鳥と難波を結ぶ道や、奈良盆地内を東西に貫く横大路、南北に貫く下ツ道、中ツ道、上ツ道の道路網が整備された。</p>	P126
藤原京朱雀大路（史跡）	<p>藤原京跡中央部で南北の大溝2条（道路側溝）が検出、藤原京の中央南北道路（朱雀大路）の存在が確認された。朱雀大路（下ツ道と中ツ道の中間）は、朱雀門と羅城門を結ぶ幅24mの大路。藤原宮跡の南の日高山を削って道をつた。現在、藤原宮の南から日高山までの範囲で朱雀大路が復元。「藤原京跡朱雀大路跡 左京7条1・2坊跡右京7条1坊跡」として史跡指定されている。</p>	P127
横大路	<p>奈良盆地「南部」を東西に貫く。東は初瀬を経て伊勢、伊賀へ。西は竹内峠、穴虫峠を経て河内に通じる。大和と難波を結ぶ幹線道路。南北両側溝の調査で、道路幅が26mだったことが判明。現在は近鉄大阪線が並行して走る。</p>	P127
下ツ道	<p>奈良盆地「中央」を南北に貫く。五条野丸山古墳前方部を起点として、南北24km。平城京朱雀大路と重なり、北は平城山を「越えて山背へ通じる。道路幅は約24m。奈良盆地の条里制施行の基準であり、近鉄橿原線が並行して走る。</p>	P127
上ツ道	<p>奈良盆地「東部」を南北に通る幹線道路。桜井市から天理市を経由して奈良市へ。箸墓では後円部墳丘を避けて東側に迂回し、天理市以北では地形に沿う。</p>	P127
中ツ道	<p>下ツ道と上ツ道の中間を南北に貫く。天理市喜殿町では幅約23m、藤原京城では、東四坊大路と重なる幅16m（中ツ道か）と27.5m（東四坊大路か）の2つの道路が検出。なお中ツ道は横大路以南にはなかったとする説も。</p>	P128

<p>あべやまだみち 阿倍山田道</p>	<p>上ツ道から南へ延びて丘陵地を斜めに走り、飛鳥で西へ向きを変え、雷丘付近を經由して下ツ道と交差する道路。日本霊異記により、古くから存在した道であることで知られる。道路幅は約 21m (雷丘の東方)。石神遺跡の北の調査では、沼沢地に敷葉工法 (木の葉や枝、樹皮などを何層にもわたって敷き並べながら土を盛る工法) で道路を敷設。山田寺付近では寺を南東に迂回。</p>	<p>P128</p>
<p>たいしのみち 太子道 (すじかいのみち 筋違道)</p>	<p>飛鳥と斑鳩 (斑鳩宮) を最短距離で結ぶ道 (斜め方向の直線道路)。保津宮古遺跡 (田原本町) では、太子道や太子道と交差する保津阪手道の側溝を検出。太子道や保津阪手道は、竜田道を経由して難波津や住吉津へとつながる。</p>	<p>P128</p>
<p>きじ 紀路</p>	<p>飛鳥から宇智 (五條市) を経て紀伊と結ぶ古道。万葉集により高取川沿いを南下、高取町から巨勢谷を經由して重阪峠を越え、五條市から真土峠を越えて紀伊に入るルートが復元。続日本紀によると、称徳天皇はこの道を使い紀伊・和泉に行幸、途中で草壁皇子の墓 (束明神古墳) を拝した。</p>	<p>P128</p>
<p>古代の市</p>	<p>市は官営で、大宝律令の関市令に規定がある。交易のほか、刑罰や祭祀の場としても利用された。藤原宮と横大路の間に市が想定される。</p>	<p>P129</p>
<p>かるのいち 軽市 (橿原市大軽町、 石川町付近)</p>	<p>下ツ道と阿倍山田道の交点。万葉集の人麿の歌にも登場。政治的な儀式の場としても用いられる。日本書紀によると、推古天皇が母を改葬するにあたり、ここで盛大な儀式を行った。また天武天皇が広瀬野 (河合町) に行幸するにあたり、ここで飾馬を揃え、大路を南から北に進んでいる。</p>	<p>P129</p>
<p>つばいち 海石榴市 (桜井市金屋付近)</p>	<p>歌垣 (男女が集い歌や飲食を楽しむ) の場としても有名。日本書紀によると、隋使の裴世清の来朝時、ここで飾馬 75 頭を揃えて出迎えた。推定地は三輪山西南麓の初瀬川沿い。磯城嶋金刺宮 (欽明天皇) や海石榴市宮 (額田部皇女=推古天皇) も付近に所在。長谷寺参りの宿場町で今も海石榴市観音堂がある。</p>	<p>P129</p>
<p>ひがしいち 藤原京の東市 (左京)、西市 (右京)</p>	<p>養老令の職員令に市司の官制、関市令に市の運営に関する規定がある。藤原京の市は宮の北側に想定されるが、考古学的には未解明。</p>	<p>P130</p>
<p>古代の運河と水運</p>	<p>奈良盆地では、河川を利用した水運が盛ん。隋から裴世清が来日したときは、大和川から初瀬川を遡り、海石榴市 (桜井市金屋) で上陸し阿倍山田道を経由して小墾田宮に至った。 齊明天皇は興事を好み、香具山の西から石上山まで溝を掘らせ、舟 200 隻で石上山の石を運び、宮の東の山に積んで石垣とした。時の人はこれを狂心の渠と揶揄した。 酒船石遺跡の石垣の石材は、天理市豊田山で産出する砂岩 (天理砂岩) の切石。天理から飛鳥まで水運で運ばれた。香具山西麓で幅約 25m の河道跡、飛鳥東垣内遺跡 (飛鳥坐神社西南) で幅約 10m、深さ 1.3m の南北方向の運河跡。</p>	

	<p>このあたりから香具山にかけて、現在も中の川という小河川が北に向かって流れ、横大路付近で米川と合流し、耳成山の北を迂回して下ツ道の西沿いを北上して寺川と合流。さらに大和川に流れ込み、その支流の布留川を遡ると、天理市の石材産出地付近に到達。</p> <p>藤原宮造営でも、水運を盛んに用いた。万葉歌によれば、田上山（琵琶湖南岸・大津市）で伐採された檜は、宇治川、木津川で運び、泉木津（木津川市）で陸揚げし、佐保川、米川などを使い、藤原宮建設地へ運ばれた。</p> <p>藤原宮所用瓦は、讃岐、淡路、近江などでも生産され、瀬戸内海や大和川などの水運で運ばれた。</p> <p>藤原宮北門や大極殿周辺での発掘調査では、藤原宮のほぼ中心を南北に貫流する資材運搬用の運河跡（深さ約2m、幅は広いところで約12m）が発見。堆積土からは、建築部材、加工木片、天武朝の木簡が出土。</p>	P131
--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------



3. 飛鳥・藤原地域の文化財（2）

項目名	解説	頁
古代の建築・ 土木技術	<p>飛鳥の宮殿は、掘立柱建物（地中に柱を埋め立てる、耐久性に難）、檜皮葺、板葺。藤原宮以降は、礎石建ち瓦葺建物が導入（大極殿、朝堂院など）。6世紀末の仏寺造営の技術として入ってきたもの。寺院堂舎の基壇には、版築技法（質の異なる土を何層にも突き固める）が用いられ、終末期古墳の墳丘や築地塀などにも応用。敷葉工法（水はけの悪い土地造成に際し、木の葉や枝を敷き詰めながら土を積み上げる）は、阿倍山田道、大阪狭山池、平城京の秋篠川旧流路の埋め立てなどでも確認されている。</p>	P132
造営を担った工人と 技術集団	<p>飛鳥寺造営の際、造営事業の技術者は百濟から献上された。</p> <p>舒明天皇の百濟大寺・百濟大宮造営に際しては書直県（劉邦の末裔、百濟人・王仁の子孫）が大匠に任命された。</p> <p>孝徳朝の難波宮造営では渡来系の倭漢直荒田井比羅夫が将作大匠に任命。</p> <p>飛驒匠も活躍、藤原宮跡南西には、今も「飛驒」の地名が残る。</p> <p>飛鳥池工房遺跡は、金工に関する官営工房。南郷遺跡（御所市南郷）も、古墳時代から続く金属工人の拠点。忍海首・朝妻首は、飛鳥寺の作金人として塔露盤（仏塔の相輪の基盤）を制作。</p> <p>仏師としては鞍作鳥（＝止利仏師、司馬達等の孫で、坂田寺を建立した鞍作多須奈の子）。代表作は飛鳥大仏（釈迦如来坐像）、法隆寺金堂の釈迦三尊像。止利様式と呼ばれるアルカイック・スマイルが特徴。</p> <p>山口大口費（東漢氏出身の仏師）は、法隆寺金堂広目天像の制作者。</p>	P133
古建築の様式・ 建築部材	<p>古代の建物は、①掘立柱建物（＝日本古来。地面に穴を掘り直接柱を埋め込む）と②基壇建物（＝大陸伝来。大極殿や朝堂など）。基壇には、壇正積基壇、乱石積基壇、瓦積基壇、塼積基壇など。</p> <p>寺院建築には、和様（飛鳥時代に大陸から伝わり日本で発展）、中世に伝わった大仏様（天竺様）と禅宗様（唐様）、中世以降の折衷様がある。</p> <p>斗拱（組物。軒などの上部構造を支える）という木組みも伝わる。</p>	P134

	斗は四角い枅のような形で、巻斗、方斗、三方斗、大斗（最大の斗）など。 枅（肘木）は、斗や桁などを載せる木材。	
山田寺回廊 (国重文 桜井市)	蘇我倉山田石川麻呂が創建。舒明天皇13年に整地を開始、皇極天皇2年に金堂を建立、大化4年から僧侶が住む（回廊、僧坊も備わっていたか）。天武朝には塔と講堂が完成。治安3年には、藤原道長も参拝。のち東側から土砂が流入し、回廊が倒壊。しかし発掘調査により、東回廊が埋没当時の状態で見つかる。この東回廊は保存処理を施し、奈良文化財研究所飛鳥資料館で展示。山田寺跡は国の特別史跡、回廊を含む出土品は国の重要文化財。山田寺仏頭は国宝。	P134
坂田寺回廊 (明日香村坂田)	坂田寺は鞍作氏が造営。発掘調査で、8世紀後半の仏堂・回廊が10世紀後半に土砂崩れで倒壊した状態で発見。檜皮葺の単廊か。	P135
奈良元興寺伝来の 飛鳥寺斗材	奈良の元興寺は飛鳥寺から遷されたが、中心伽藍は飛鳥に残った。奈良の元興寺極楽坊には、飛鳥時代の瓦や建築部材が伝来。部材は6世紀末に伐採されたもの（創建期の部材）、7世紀後半～末に伐採されたもの（白鳳時代に改修）、平安・鎌倉時代に伐採されたもの（中世に修理されたもの）に分けられる。	P135
2.飛鳥・藤原 地域の寺院 飛鳥時代の寺院 (石川精舎、 大野丘北塔)	仏教伝来当時、受容には賛否があり、当初は賛成派の蘇我氏が本拠とする飛鳥が仏教の中心地に。百濟から伝来した仏像は、蘇我稲目の小墾田家や向原家に安置された。しかし疫病の流行により、寺や仏像は破却。 敏達天皇13年、百濟から弥勒石像が伝来。同年、蘇我馬子は司馬達等の女嶋（善信尼）たち3人の女性を出家させた。馬子は石川の自宅に仏殿を作る（石川精舎）。翌年、馬子は大野丘の北に塔を建て（大野丘北塔）、司馬達等から譲り受けた仏舎利を納めた（なお石川精舎、大野丘北塔の場所は未確定）。	P137
飛鳥の寺々	史料によると、飛鳥周辺には、飛鳥寺、豊浦寺、坂田寺、橋寺、小墾田寺、山田寺、川原寺、高市大寺、薬師寺、大官大寺、大窪寺（橿原市大久保町）、檜隈寺、軽寺、紀寺、岡寺などがあった。 日本書紀の天武天皇9年の記事によると、飛鳥・藤原周辺には、24ヵ所の寺があった。これらは蘇我氏などの貴族や豪族、東漢氏などの渡来系氏族、天皇家や国家が建立した寺院。 中でも天皇家や国家が建立した川原寺、高市大寺（のち大官大寺）、薬師寺、また古くからの由緒を持つ飛鳥寺は大寺として、国家仏教の中心的な役割を担う。	P137
飛鳥の四大寺 (飛鳥寺、大官大寺、 薬師寺、川原寺)	仏教伝来後ほぼ半世紀の間、仏教活動は蘇我氏の邸宅を中心に営まれた。飛鳥寺は蘇我馬子が、大陸風建築による本格的な寺として建立。 乙巳の変で蘇我本宗家が滅んだあとも、飛鳥寺は大官大寺、薬師寺、川原寺とともに、国家が直接経営に関わる大寺。 大官大寺は百濟大寺（吉備池廃寺）が起源で、高市大寺の後身。 川原寺は、天智天皇が母・斉明天皇の菩提を弔うために建立。 薬師寺は、天武天皇が皇后（のちの持統天皇）の病氣平癒のために発願。	P138
飛鳥寺（法興寺、 元興寺）跡 (国史跡)	後身は安居院（真言宗豊山派）。蘇我・物部戦争のときに馬子が発願・建立。 安居院本尊の飛鳥大仏（＝飛鳥寺中金堂の本尊・国の重要文化財）は、鞍作鳥（止利仏師）が造った丈六（一丈六尺、坐像はその半分）の銅像。 伽藍は塔を中心に北と東西に三金堂（高句麗式＝飛鳥寺式伽藍配置）。	P139

<p>くだらのおおでら 百濟大寺跡 (吉備池 廃寺 国史跡)</p>	<p>舒明天皇が発願（天皇が建立した最初の寺院）。その後、高市大寺、大官大寺と移り、平城京の大安寺となる。日本書紀によると、百濟大寺は百濟川の畔に百濟大宮とともに建立（西の民が宮、東の民が寺を造った）。塔は九重塔。桜井市吉備のため池（吉備池）で九重塔と見られる大規模な塔跡、金堂跡をもつ吉備池廃寺が発見され、所在がほぼ確定。</p>	<p>P139</p>
<p>たけちのおおでらあと 高市大寺跡</p>	<p>天武天皇2年、百濟大寺は高市の地（比定地未詳）に移建され、高市大寺に。天武天皇6年、大官大寺に改称。</p>	<p>P140</p>
<p>かわらでらあと 川原寺跡 (国の史跡)</p>	<p>後身は仏陀山東南院弘福寺（真言宗豊山派）。弘福寺本堂は川原寺の中金堂跡にあり、瑠璃石（白大理石）の礎石が残る。川原宮跡も。 天智朝に、斉明天皇の飛鳥川原宮の跡地に建立されたという説が有力。 伽藍配置は、南大門から中門を入ると右手に五重塔、左手に西金堂、そしてその向こう正面に中金堂がある「1塔2金堂」の配置（川原寺式伽藍配置）。木造仏の持国天・多聞天立像は、国の重要文化財。</p>	<p>P140</p>
<p>飛鳥・藤原地域の 古代寺院</p>	<p>上記のほか飛鳥地域には、豊浦宮の地に建立された豊浦寺跡、山田寺跡、 檜隈寺跡、坂田寺跡、定林寺跡（明日香村立部）、呉原寺跡（同栗原）、軽寺跡（後身は法輪寺、橿原市大軽町）、奥山廃寺（明日香村奥山）など。 藤原京周辺には、和田廃寺、大窪寺跡（後身は国源寺、橿原市大久保町）、安倍寺跡（桜井市安倍木材団地）、木之本廃寺（橿原市木之本町、畝尾都多本神社の辺り）、小山廃寺（明日香村小山）など。</p>	<p>P141</p>
<p>とゆらでらあと 豊浦寺跡</p>	<p>蘇我氏の向原家、向原殿、桜井道場、桜井寺の系譜につながる尼寺。豊浦宮の地に建立。後身は向原寺（浄土真宗）で、境内には豊浦寺に関連する礎石。向原寺の発掘調査により、講堂、金堂、中世の再建塔を確認。寺院遺構の下層からは掘立柱建物や石敷も発見され、これらは豊浦宮跡の遺構。</p>	<p>P141</p>
<p>山田寺跡 (国の特別史跡)</p>	<p>蘇我倉山田石川麻呂が舒明天皇13年に創建。2年後に金堂を建立、大化4年から僧侶が住む。塔と金堂を回廊が囲む（山田寺式伽藍配置）。東側から土砂が流入し、回廊が倒壊したが発掘調査により、東回廊が埋没当時の状態で見つかる。法隆寺を遡る寺院建築。出土品は国の重要文化財。</p>	<p>P141</p>
<p>ひのくまでらあと 檜隈寺跡 (国の史跡)</p>	<p>渡来系氏族・東漢氏が建立。寺院跡は於美阿志神社周辺。調査で塔、金堂、講堂、回廊の様子が明らかに。飛鳥寺式軒丸瓦が出土、7世紀初頭に建立か。</p>	<p>P142</p>
<p>坂田寺跡 (金剛寺)</p>	<p>鞍作鳥（止利仏師）は天皇から水田を賜わり、金剛寺を建立。出土瓦から建立は7世紀前半か。発掘調査で、奈良時代の金堂などが見つかる。</p>	<p>P142</p>
<p>じょうりんじあと 定林寺跡 (国の史跡)</p>	<p>立部寺とも。聖徳太子の建立と伝わる（建立者は渡来系氏族の平田忌寸とも）。 飛鳥時代の塔と回廊が検出。飛鳥寺式軒丸瓦が出土、7世紀前半の建立か。</p>	<p>P142</p>
<p>くれはらでらあと 呉原寺跡</p>	<p>栗原寺、竹林寺とも。東漢氏の建立か。出土瓦に山田寺式軒丸瓦（火炎状の飾り）が出土、建立は7世紀中頃か。</p>	<p>P142</p>
<p>かるでらあと 軽寺跡</p>	<p>法輪寺（橿原市大軽町）周辺にあった。飛鳥池工房遺跡から、寺名を記した天武朝の木簡が出土。藤原道長が宿泊。出土瓦は7世紀中頃。 建立者は軽部臣、軽忌寸、高向玄理と見る説がある。</p>	<p>P142</p>

<p>おくやまはいじ 奥山麿寺</p>	<p>奥山<small>くめでら</small>久米寺周辺にあった。塔の北に金堂・講堂（四天王寺式伽藍配置）。出土した墨書土器から「小墾田寺」の寺名が判明。建立者は小墾田臣<small>さかいへのおみ まり</small>、境部臣<small>さかいへのおみ まり</small>摩理勢（蘇我稲目の子、馬子の弟）とみる説、小墾田宮付属の尼寺とする説も。</p>	<p>P143</p>
<p>おおくぼであと 大窪寺跡</p>	<p>橿原市大久保町の国源寺<small>こくげんじ</small>の南に、巨大な塔心礎<small>とうしんそ</small>。出土瓦から、7世紀中頃～後半の造営か。建立者は渡来系氏族の大窪史<small>おおくぼのふひと</small>か。</p>	<p>P143</p>
<p>あべであと 安倍寺跡 (崇敬寺、国史跡)</p>	<p>建立者は、安倍倉橋大臣（安倍倉梯麻呂、阿倍内麻呂<small>あべのうちまる</small>）か。金堂、塔、回廊が検出され、法隆寺式伽藍配置か。出土瓦は山田寺式の単弁蓮華文軒丸瓦<small>たんべんれんげもんのかままる</small>なので、7世紀中頃の建立か。文暦元年頃、桜井市阿部に移した（=安倍文殊院<small>あべもんじゅいん</small>）。</p>	<p>P143</p>
<p>きのもと 木之本麿寺</p>	<p>橿原市木之本町～下八釣町<small>しもやつりちょう</small>周辺。百濟大寺を高市の地に移して建立した高市大寺<small>たけちのおおでら</small>とする説がある。</p>	<p>P143</p>
<p>こやまはいじ きであと 小山麿寺（紀寺跡）</p>	<p>藤原京左京八条二坊、伽藍も条坊計画<small>じょうぼう</small>に一致。7世紀後半の瓦が出土。</p>	<p>P144</p>
<p>わだはいじ 和田麿寺</p>	<p>寺名は葛城寺<small>かつらぎであと</small>（葛木尼寺）か。葛城臣烏那羅<small>かつらぎのおみおなら</small>の建立とみる説、蘇我馬子が建てた大野丘北塔にあてる説もある。</p>	<p>P144</p>
<p>古代寺院の 伽藍配置 (図はテキストを参照してください)</p>	<p>① 飛鳥寺式 塔の北と東西に金堂を置く1塔3金堂（塔を3金堂が囲む） ② 四天王寺式 中門、塔、金堂、講堂が南北に一直線に並ぶ 奥山麿寺、橘寺、山田寺など ③ 法隆寺式 中門と講堂をつなぐ回廊内の東に金堂、西に塔 百濟大寺など ④ 川原寺式 中門と中金堂をつなぐ回廊内の東に塔、西に西金堂 ⑤ 薬師寺式 中門と講堂をつなぐ回廊内の中央に金堂、南に2つの塔 ⑥ 大官大寺式 中門と金堂をつなぐ回廊内の東寄りに1つの塔</p>	<p>P144</p>
<p>藤原京の2大官寺 (大官大寺と 薬師寺)</p>	<p>持統天皇8年（694年＝向くよウグイス）、天皇は夫（天武天皇）の時代から造営が進められていた藤原京に遷都。藤原京の中心には藤原宮。京には貴族の邸宅や庶民の家があり、市が設けられた。 京内には寺院も多く造営され、その代表格が大官大寺と薬師寺。 大官大寺は百濟大寺、高市大寺につながる国家筆頭の官寺。大宝2年には、薬師寺、飛鳥寺、川原寺とともに齋会<small>さいえ</small>（僧尼に齋食を施す法会）が行われた。 文武天皇時代の大官大寺跡は広大で、巨大な金堂と講堂が南北に並び、金堂の南東に九重塔を置く大官大寺式伽藍配置。金堂は間口九間の横長建物で、藤原宮大極殿と並ぶ当代最大の建物。未完成の状態です。平城遷都を迎え直後に焼失。 薬師寺は、天武天皇が皇后の病氣平癒のために発願。持統天皇2年には無遮大会<small>むしゃ</small>（差別なく全ての者が参加し供養を受ける法会）が行われた。 伽藍配置は薬師寺式で、金堂の南面に東西2つの塔を配置。</p>	<p>P146</p>
<p>大官大寺跡 (国の史跡)</p>	<p>最初は百濟大寺、のち高市<small>たけち</small>に移り（高市大寺）、大官大寺と改称。 天武朝末年には完成したが、文武天皇が九重塔と金堂を建立。南から中門、金堂、講堂が並び、金堂の南東に塔を配する大官大寺式伽藍配置。</p>	<p>P146</p>

もとやくしじ 本薬師寺(薬師寺)跡 (国の特別史跡)	平城遷都後、奈良の薬師寺に対して「本薬師寺」と呼ばれた。文武天皇2年にほぼ完成し僧を住ませた。東西両塔を持つ薬師寺式伽藍配置。本薬師寺からは奈良時代の瓦が出土し、奈良時代にも同塔が存在、東塔は平安期まで存続。	P147
著名な寺院	推古天皇13年には、寺院は46カ所(多くは飛鳥)。持統天皇6年に寺院は545カ所(多くは飛鳥・藤原地域)。平城遷都により、薬師寺や大官大寺は、平城京に新たな伽藍を造営し、廃絶する寺院も。一方岡寺や橘寺は、千年以上存続。	P147
岡寺 (国の史跡)	正式名は、東光山真珠院龍蓋寺(真言宗豊山派)。 本尊は巨大な如意輪観音菩薩坐像(日本最大の塑像、国重文)。 草壁皇子の死後、義淵は草壁の岡宮を賜わり、寺とした。義淵の肖像とされる坐像は、国宝(木心乾漆造、奈良国立博物館に寄託)。	P148
橘寺 (国の史跡)	正式名は、仏頭山宮皇院菩提寺(天台宗)。推古天皇14年、聖徳太子が『勝鬘経』を3日間講じたとき、蓮の花が高く積もり、天皇がその地に寺を建立することを発願したとされる。聖徳太子が建立した7寺に数えられる。発掘調査では東面する四天王寺式伽藍配置(中門、塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ)。飛鳥時代の瓦が出土し、建立が飛鳥時代前半に始まることが分かった。	P148
くめでら 久米寺	正式名は、霊前山東塔院(真言宗御室派)。推古天皇の勅願によって来目皇子(聖徳太子の弟)が建立したとも、久米仙人が建立したとも。境内には飛鳥時代の巨大な塔跡。久米寺式の瓦が奈良の興福寺からも出土することから、厩坂寺(興福寺の前身寺院)とみる説もある。	P149
つばさかでら 壺阪寺 みなみほっけじ (南法華寺)	正式名は、壺阪山平等王院南法華寺(真言宗豊山派)。大宝3年、弁基大徳(飛鳥寺の僧)が建立か。元正天皇の時に御願寺(ご祈願寺)となった。 香高山山中(奥の院)には、五百羅漢の石仏群。	P149
あべもんじゆいん 安倍文殊院	正式名は、安倍山崇敬文殊院(華嚴宗)。本尊の文殊菩薩は日本三文殊の1つ(他の2つは、京都府宮津市の切戸文殊、山形県高島町の亀岡文殊)。阿倍氏の建立か。西南約300mの旧寺地(安倍寺跡)から移されたか。境内の文殊院西古墳は、国の特別史跡。	P149
平城遷都後の 寺院の変遷	都が平城京に移ると、薬師寺や大官大寺などは平城京に新たな伽藍を造営。しかし飛鳥・藤原に残り、活発な宗教活動を展開した寺院も。	P150
飛鳥寺の変遷	飛鳥寺は平城京に新伽藍(元興寺)を建立。旧寺(本元興寺)も栄えていた。	P150
川原寺の変遷	川原寺は飛鳥に残り、天皇家との関わりが続く(志貴皇子の忌斎=故人のための仏事が行われた)。	P150
山田寺の変遷	奈良時代には、蘇我系の石川氏の支援下。文治3年(1187)には、興福寺の僧兵により講堂本尊の如来像(旧山田寺仏頭)が持ち去られ、興福寺の末寺に。	P150
道教思想の受容	道教は中国古来の民間信仰で、儒教、仏教とともに三教とされた。基本要素は神仙思想(仙人をめざす)。仙人は東の海上にある蓬莱、方丈、瀛洲の三神山に住む。中国ではそれをかたどって、庭園の池の中に嶋を造り、不老不死の楽土を表現した。西王母(道教最高位の女神)は崑崙山に住む仙人で、不老不死の桃の実(3千年に一度しか実を結ばない)を漢の武帝に与えた。	P151

	<p>蘇我馬子の居宅とされる^{しまのしょう}島^{えんち}庄遺跡の苑池には、池の中に嶋を造り、周囲や中島に桃（不老長寿をもたらす）を植えるなど、神仙思想を表現。牧野古墳（舒明天皇の父の墓か）や纏向遺跡からも、桃の種が出土。</p> <p>飛鳥京跡苑池は、南北2つの池を持つ。場所は飛鳥宮跡北西側の宮殿隣接地（南池には中島が配置）。齊明天皇は多武峰の2本の^{けやき}槻の大木の^{どうかん}辺りに、道観（道教の寺院）を建て、^{ふたつきのみや}両槻宮（=^{あまつみや}天宮。道教の理想郷である天上の宮で、仙人が住む不老不死の世界）と称した。</p> <p>藤原京の井戸からは、^{じゅふもつかん}呪符木簡（道教の^{らえんきゅうせい}羅堰九星を記す）が出土。</p> <p>藤原宮が大和三山を東、西、北に配して造営されたのは、青龍、白虎、玄武に見立てたから（天武天皇が、道教思想を踏まえて決定した）。</p> <p>道教では、全宇宙を象徴するのが「八」の数字（東西南北とその中間方位）。八角墳も道教の影響。「天皇」号も、「天皇大帝」（道教の北辰信仰）から。</p> <p>天武天皇は、壬申の乱に際し、自ら^{おんみょうどう}陰陽道の道具を使って占った。天武天皇4年には、占星台（天文台）を初めて造った。^{おおほらえ}大祓（国家祭祀）でも、道教の神々の名が唱えられた。道教は仏教などを介して間接的にわが国に導入されたか。</p> <p>中国では、神仙思想の^{こんろんさん}崑崙山（世界の中心を象徴）は仏教世界の^{じゅみせん}須弥山（世界の中心を象徴）が同一視され、^{たまむしのずし}玉虫厨子（法隆寺・国宝）の須弥山にも、崑崙山のイメージが重なる。</p>	P151
<p>道教の^{らえんきゅうせい}羅堰九星を記した^{じゅふもつかん}呪符木簡</p>	<p>藤原宮跡の井戸から出土した呪符木簡は、洪水をせき止めて^{かんがい}灌漑用水とする意味とされ、井戸や水の祭祀に関わるものと推察される。</p>	P153



3. 飛鳥・藤原地域の文化財（3）

項目名	解説	頁
3.神社と祭祀 古代の祭祀	<p>朝廷の祭祀に関する諸制度（宮中祭祀など）の多くは、天武・持統天皇の時代に創設。各地の在来神の存在を認めながら、国家事業としての神祇祭祀の整備が進められた。祭祀遺跡での遺物としては、人形（人の形を模した木製の形代）、齋串（板状の串）、土馬（馬をかたどった土製品）、人面土器などが多く出土。</p> <p>国家儀式には、雅楽や伝統舞踊も（儒教の礼楽思想に基づく）。中国の礼記には、山林、川、谷、丘陵で、雲を出し風雨を起こして不思議な働きをするものを神とする。王は多くの神々（百神）を祀り、各地を治める諸侯はその地の神を祀る。中国の律令制下では、礼と法は、相互補完関係（礼楽刑政、其の極は一なり）。天武天皇は調和と秩序をもった中央集権国家を目標とした。</p>	P154
境界で行われる祭祀	<p>飛鳥宮跡は神奈備山（神が鎮座する山）のある丘陵と平野（盆地）の境界部近くにあり、裾野には飛鳥川が帯のように流れる。伏流水が地表に湧き出る裾野では水辺の祭祀が行われ、導水施設や木樋で槽に水を導き浄化していた。井泉や水のほとは、人間世界と神なる世界との接点、または異界との通路（境界的存在）。丘陵から平野へ移る場所も、自然と人間、聖界と俗界の境界。生活空間と外部を区切る境界的空間も、重要な意味。海石榴市（椿の木があった）や軽市（槻の木があった）がある衢（交通の結節点）も境界。巨樹は神の依代ともなったことから、天界と俗界の境界領域。宮都の四隅や宮城の四隅なども境界として祭祀が行われた。</p>	P154
飛鳥宮周辺の水辺祭祀	<p>飛鳥の小盆地では、伏流水が多く流れる。飛鳥宮跡近くの酒船石遺跡（亀形石造物）や飛鳥京跡苑池も湧水地で、水辺の祭祀が行われた。ともに山裾や川沿いの北向きの傾斜地で、湧水が豊富で、水が流下する方向に香具山が望まれる。飛鳥京跡苑池（国内初の本格的な宮廷庭園遺跡）では、南池は景観を重視して饗宴などに使われた一方、北池は祭祀に用いられた。</p>	P155
祈雨祭祀	<p>国家による祈雨祭祀が登場するのは、天武・持統天皇の時代。天皇が行った祈雨祭祀の起源は、皇極天皇が南淵の河上で跪き四方を拝み天に祈ると、雷が鳴り、大雨が5日間続けて降った。雷は神鳴り、天は雨の同義語。飛鳥川上流には龍（水を掌る水神で、雷＝龍とも）の名のつく寺がある。岡寺（龍蓋寺）は龍神をまつ。万葉集に登場する龍（龍神）は、罔象女神とともに、在来の代表的な水神。龍神は藤原氏が水神として祀る龍神とされ、龍神信仰の最古の事例。</p>	P156

藤原京の祭祀遺跡	<p>7世紀後半以降の遺跡では、人形（人間の身代わりとなり、穢れや災いから身を守る）、斎串（地上に挿し立て祭祀場の結界を示す）、土馬（祟り神の乗り物）、絵馬、墨書土器（疫病神の顔などを描く）が、流路などで出土。これらを流水の中などに投げ入れ、穢れを落とした。藤原京からは、宮城を取り囲む形で木製の人形が出土。今の雛祭りは、人形祭祀を引き継いだもの。</p> <p>藤原宮跡大極殿院南門近くの穴から、富本銭9枚と9個の水晶の入った平瓶が出土。地鎮祭の跡とみられ、宮殿の地鎮遺構としては最古。</p>	P157
じんぎれい 神祇令の国家祭祀	<p>大宝律令の神祇令には、神祇官が毎年定例的に行う朝廷の祭礼が、月ごとに定められていた。大きく3つの柱に区分できる。</p> <p>① 農作物の豊作を祈願し、収穫を感謝する。祈年祭、新嘗祭、大嘗祭</p> <p>② 天皇、国家、人々を活性化する祭礼。鎮魂祭など</p> <p>③ 安全を祈願し、穢れなどを払うための祭礼。鎮花祭、鎮火祭、道饗祭、大祓など</p>	P158
おおにえのみつり 大嘗祭	<p>国家祭祀群の頂点、戦乱記などを除き、古代から現在まで行われてきた皇位継承儀礼（ただし大宝律令の神祇令の段階では、即位時の大嘗祭と年中行事としての新嘗祭を、ともに大嘗と呼んでいた）。持統天皇の即位儀礼では、のちの神祇令に定められた天神寿詞が読まれており、その後半部に大嘗祭の記述。</p> <p>今上天皇即位に伴う大嘗祭では、大饗の儀において五節舞（大歌の奏唱にあわせて舞う＝元来は農耕儀礼の田舞）や久米舞などの歌舞が奏せられ、供饗の儀では、国栖の古風（古代の国栖人の歌謡）が奏された。</p>	P158
おおほらえ 大祓	<p>古代、天変地異や疫病は穢れに起因するとされ、6月と12月の大祓えや鎮花祭、鎮火祭、道饗祭などが国家祭祀として催された。祓は大和、山背など国々の国造が中心となって執行していた罪や穢れを払う祭祀だったが、天武天皇の詔により、全国一斉に行うこととされた。記録に残る全国的祭祀の最初が大祓。国家による大祓は、6月と12月の晦日（末日）に行われるのが定例の祭祀。定例の大祓のほか、天災や病気を鎮めるため、臨時の大祓も行われた。</p>	P159
飛鳥・藤原の神社	<p>神社の起源は、神聖な山、滝、岩、森、巨木などを祀る祭壇で、常設の建物はなかった。天武天皇は諸国に詔し、神宮を修理（新築）させているので、飛鳥時代には仏教寺院の影響で社殿が造られるようになった。</p> <p>大宝令で、神祇令が規定（中国の祠令に基づく）。国家による祭祀の対象として、神祇官の統制下に「式内社」（延喜式神名帳に記載された神社で、毎年の祈年祭に神祇官から幣帛を受ける「官幣社」と、国司から幣帛を受ける「国幣社」に分けられた）が置かれた。大和国には式内社が他国より圧倒的に多い。特に、高市郡が抜きん出ている。</p>	P159

	<p>現在の明日香村内には、14 の式内社があった（飛鳥坐神社、飛鳥山口坐神社、甘櫛坐神社、治田神社、飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社、加夜奈留美命神社、瀧本神社、氣都和既神社、波多神社、櫛玉命神社、吳津孫神社、於美阿志神社、許世都比古命神社、氣吹雷響雷吉野大国栖御魂神社）。</p> <p>広瀬大忌祭の祝詞（延喜式祝詞）には、甘き水を平野に送り出す神として、高市など大和の6つの御県（朝廷直轄の畑）の山口に坐す神幣帛を奉るとする。</p> <p>祈年祭・月次祭の祝詞には、朝廷用の木材の供給と諸国の安定を祈願する神として、6つの山口神社（飛鳥、石村、忍坂、長谷、畝火、耳無）を祀る旨が書かれている。延喜式臨時祭の祈雨神祭にも、各山口神社の名がある。山口とは山と平野の移行地点であり、山口神社は水や木材の供給を司る神・祈雨神として奉祀の対象。</p> <p>古代の神社は、湧水池など水利上の要所や水陸交通の要所に多く立地。延喜式神名帳には、大和の山口神社10社と、山口坐神社4社の名があり、いずれも式内大社で、祈年、月次、新嘗の官幣にあずかった。</p> <p>延喜式祝詞で讃えられた飛鳥、岩村（石寸）、畝火、忍坂、長谷、耳成の6社と、それと別に8社があり、六所山口神社、十四所山口神社などと言われる。延喜式四時祭（四季の祭）には甘櫛の名があるので、甘櫛にも山口神社があったか。</p>	P160
<p>橿原神宮</p>	<p>神武天皇が橿原宮で即位したという日本書紀の記述に基づき、明治23年創建。本殿は京都御所の賢所を移築。神域は約50ha。神武天皇が紀元前660年に即位したという日本書紀の解釈をもとに、昭和15年、紀元2600年を記念して大拡張。本殿と文華殿（旧織田屋形）は国の重要文化財。</p>	P161
<p>畝火山口神社</p>	<p>畝傍山の西斜面、俗にお峯山。延喜式神名帳の畝火山口坐神社に比定。かつては畝傍山西麓にあり、山頂に移されたが、橿原神宮拡張工事の際、橿原神宮や神武天皇陵を見下ろす場所にあることから、現在地に遷座。畝傍山山頂には、畝火山口神社社殿跡の石柱が立つ。</p>	P161
<p>耳成山口神社</p>	<p>耳成山の8合目。明治以前は、天神社。山之坊村民が神木を伐り荒らした事件を発端に入会をめぐる争論が続き、元禄15年、耳無山天神（天神社）は式内之社耳無山口神社とされ、山之坊村民は山之坊山口神社に分霊。享保年間の境界争いで、耳成山は木原村（現在の木原町）領とされたため、山之坊の宮司が神霊を奉じて下山し、現在の山之坊山口神社に祀った。</p> <p>木原村から松明をかざしながら村民が参詣祈願したことから「火振り坂」（登山口の1つ）の名がついた。</p>	P161
<p>国常立神社</p>	<p>香具山山頂に鎮座。祭神は国常立命（国土形成の神＝向かって左の祠）。右の祠には高龍神（雨の竜王＝竜王神）が祀られ、壺が埋められる。</p>	P162

	干ばつときは高 <small>たか</small> 竈 <small>おかみのかみ</small> 神に雨乞いをして壺の水を代えたが、降雨のないときは祠の灯明の火で松明を作り、村中を火振りして歩いた。	
あまのかぐやま 天香山神社	香具山の北麓。祭神は櫛 <small>くし</small> 眞知命 <small>まのみこと</small> （神意をうかがう占いの神）。国家の大事を判断する <small>きぼく</small> 龜卜 <small>おおにえのまつり</small> や、大嘗祭 <small>ほくじょう</small> の神饌 <small>あまのかぐやまにいます</small> 田下定 <small>あまのかぐやまにいます</small> に関わる神。延喜式神名帳の天香山坐櫛眞命神社（または国常立神社）。 天香山坐櫛眞命神社、畝尾都多本神社、坂門神社（天岩戸神社）、畝尾坐 <small>たけはにやす</small> 健士安神社は、天香山坐四處（処）神社と総称。	P162
うねおにいますたけはにやす 畝尾坐健士安神社	香具山の北西麓、下八釣集落に鎮座する式内社。神武東征に関わる香具山の土は靈力を持つものとされ、その土の神を祀る。大和志では天照大神社。	P162
うねおつたもと 畝尾都多本神社	香具山の西麓、哭澤 <small>なきさわ</small> の神社とも。玉垣で囲まれた <small>からいど</small> 空井戸 <small>かみ</small> がご神体。かつては湧き水を溜めた幅約1間の堀で囲われていた。祭神の哭澤女神 <small>なきさわめのかみ</small> （啼沢女命）は、古事記の国生み・神生み神話で、伊邪那美命 <small>いざなみのみこと</small> が火の神を生んで亡くなったのを伊邪那岐命 <small>いざなぎのみこと</small> が悲しんで流した涙から生まれた女神。	P162
あまのいわとじんじや 天岩戸神社	香具山南麓の森の中にあり、天照大神を祀る。神殿はなく、岩戸隠れをしたと伝わる岩穴や巨石をご神体とする。玉垣内には7本竹（真竹）が自生し、毎年、7本ずつ生えかわると伝わる。この竹にさわると、腹痛になるとも。	P163
あすかいます 飛鳥坐神社	甘南備山飛鳥社 <small>かんなびやますかのやしろ</small> （高市郡賀美郷）が、神の託宣により現在地 <small>とりがたやま</small> （鳥形山）に遷った。境内には、陰陽石など多種多様な奇石。毎年2月のおんだ祭は奇祭。	P163
あすかやまぐちにいます 飛鳥山口坐神社	飛鳥坐神社の境内末社。式内大社で、延喜式祝詞では祈雨の神。「山の口から落ちる水が豊かで、悪風や荒雨の恐れがないように」との祈願のために造営。	P163
あまかしにいます 甘櫛坐神社	豊浦・雷 <small>いかづち</small> の氏神。延喜式神名帳に、甘櫛坐神社四座と載る式内大社。 月次祭 <small>つきなみのまつり</small> 、相嘗祭 <small>あいなめ</small> 、新嘗祭 <small>にいなめ</small> の奉幣に与る。境内に立石（板石、謎の石造遺物）。 この地、で盟神探湯（古代の裁判）が行われた。	P163
大原神社 みとうじんさま （明神様）	藤原寺 <small>とうげんじ</small> （多武峰連峰の最高道場）の鎮守と伝わり、八幡大神 <small>はちまんだいじん</small> を祀っていたとも。 中臣氏の本拠地で、藤原池も近くにあったという説がある。境内に、は大織冠 <small>たいしよつかん</small> 誕生之旧跡の石碑と、万葉歌碑（天武天皇と藤原夫人の歌）。	P164
はるた 治田神社	岡寺の約100m西。式内社とされる。国史跡・岡寺跡。境内地から凝灰岩の基壇化粧石や礎石、瓦が出土、岡寺の創建伽藍の跡か。もと岡寺の鎮守八幡として境内に祀られ、明治時代に治田神社に。 本町通り（明日香村岡）と岡寺参道の交差点に、同社の鳥居が立つ。	P164
おみあし 於美阿志神社 （国史跡・檜隈寺跡）	飛鳥駅の南東約1km、檜隈寺跡にある。式内社でもとは西方にあったが、明治40年に檜隈寺跡に遷座。東漢氏（百済からの渡来人の末裔）が、始祖 <small>あちの</small> 阿智 <small>おみ</small> （知）使主を祀るために創建したか。	P165

	境内に檜隈寺の十三重石塔（国重文）。宣化天皇の檜隈廬入野宮跡の石碑。	
けつわき 気都和既神社	式内社（気都倭既神社）に比定。細川、上、尾曾の郷社。祭神の気津別命は物部系の真神田宿禰の祖神で、真神田曾弥連は飛鳥の豪族（本拠地=真神原）。	P165
あすかわかみにいますうす 飛鳥川上坐宇須 たきひめのみことじんじゃ 多岐比賣命神社	日本で最も長い名前の神社。本殿はなく、後背の宮山がご神体。拝殿には、男女各2体の神像（平安時代前期の作）。明治時代から、入谷、畑、稲渕、栢森の郷社。皇極天皇元年に天皇が行った祈雨祭祀の場所は、飛鳥川と神体山が近接したこの場所、または女淵・男淵。なお明治以前は「宇須多伎」と表記。	P165
かやなるみのみこと 加夜奈留美命神社 (滝本神社、 くずがみ 葛神さん)	祭神は加夜奈留美命で、出雲国造神賀詞という祝詞に登場。大穴持命（大己貴命、大国主神）が国土を天孫に譲って出雲へ去るとき、自らの和魂と子女の御魂を大和に留め、皇室の守護とした。平安時代の天長6年、飛鳥坐神社が鳥形山に遷されたとき、加夜奈留美神の本霊は旧地にとどまったが、その社地は行方不明に。現在の社は、明治時代に富岡鉄斎が栢森の葛（九頭）神社を、加夜奈留美神社の故地として復興したもの。	P166
おおにほ 大仁保神社	入谷集落の最高地点（奥飛鳥の最深部）に鎮座。入谷は丹生谷、仁保は丹生からの転訛か。仁徳天皇を祀るが、氏神は宇須多伎比売命。明治時代に飛鳥川上坐宇須多岐比賣命神社に合祀されたが、地元住民によりこの神社が継承された。本殿脇に通称・天空展望台。	P166
ひとまる 人麿神社	橿原市地黄町に鎮座、祭神は柿本人麻呂。南北朝時代の康永年間の建立。本殿（隅木入春日造・国重文）はこの時代の特徴をよく表す。石灯籠と狛犬は、明治時代の奉獻。毎年5月4日、無病息災や豊作を祈る野神祭「すすつけ祭」。地黄町の地名は、菓草の地黄を作っていたことに由来。	P167
いるか 入鹿神社	橿原市小綱町。素戔嗚尊と蘇我入鹿を合祀。入鹿を祭神とした神社は全国でも唯一。当地はもと蘇我氏の領地で、入鹿が幼少期を過ごしたとも。本殿には、木造の素戔嗚尊像と蘇我入鹿像が祀られる。	P167
むさにいます 牟佐坐神社	岡寺駅のすぐ西側。身狭（牟佐）は高市郡の地名で、東漢氏（阿智使主が率いて帰化）の本拠地。岡寺駅近くの踏切前には、孝元天皇軽境原宮跡の石碑。日本書紀によると、壬申の乱で、高市社（橿原市雲梯町の河俣神社）に居る事代主神（大国主の子）と、身狭社（牟佐坐神社または橿原市大久保町の生国魂神社）に居る生霊神が高市県主許梅に神がかりし、神武天皇陵に馬と兵器を奉れば、大海人皇子を守護するとのお告げがあった。	P167

	<p>かなづなのい 金綱井（榎原市今井町、小綱町）で両軍が戦い、大海人皇子が勝利し、天皇に即位後、身狭坐生<small>いくたまのかみ</small> 靈神に神位が授けられた。</p>	
<p>そがにますそがつひこ 宗我坐宗我都比古 神社（入鹿宮）</p>	<p>榎原市曾我町（蘇我氏の本拠地）に鎮座。武内宿禰の子が曾我（古名は蘇我）の大家を賜わり河内から移り住み、蘇我の姓を名乗った。馬子はこの地に社殿を造営し、始祖夫妻を祀った。地元では「曾我ンさん」と呼ばれ親しまれる。</p>	P168
<p>さぎす 鷺栖神社</p>	<p>式内大社。旧地は榎原市上飛驒町日高山（藤原宮跡南方）の八幡神社か。藤原宮の鎮守神。藤原京遷都の際、藤原不比等が日高山に遷したか。</p>	P168
<p>かもぎみ 鴨公神社と旧鴨公村</p>	<p>藤原宮大極殿跡の土壇上（榎原市高殿町）にある。社殿はなく、ご神体はクスノキの巨樹。国の特別史跡。式内社の高市御縣坐鴨事代主神社に比定。 出雲国造神賀詞という祝詞では、河俣神社に比定する説も。 明治22年の町村制施行により、鴨公村が誕生（高市郡高殿村、醍醐村、別所村、上飛驒村、飛驒村、縄手村、法花村が合併）。昭和31年には榎原市が誕生（磯城郡耳成村、高市郡畝傍町、鴨公村、八木町、今井町、眞菅村が合併）。土壇跡の北側にあった鴨公小学校は、昭和49年、榎原市縄手町に移転。</p>	P168
<p>たんざん 談山神社 （多武峰寺、妙楽寺）</p>	<p>祭神は藤原鎌足。寺伝によると、唐から帰国した鎌足の長男・定恵が鎌足の遺骨の一部を摂津国から多武峯山頂に改葬し、十三重塔を建立したのが始まり。のち講堂を造営して妙楽寺と称し、神殿を建てて鎌足の神像を祀った。 明治時代の神仏分離により、談山神社となった。和銅8年の銘のある粟原寺三重塔伏鉢は国宝。定恵は遣唐使とともに唐に渡り、百済經由で帰国したが、帰国した3ヵ月後に毒殺され、大原の第（邸宅）で亡くなった。</p>	P169
<p>わかざくら 若桜神社（桜井市谷）と稚桜神社（同市池之内）</p>	<p>桜井の地名の由来。履中天皇が皇妃と磐余市磯池で遊んだとき、時ならぬ桜の花びらが杯に散った。桜の木を探させたところ、掖上室山（御所市）で見つかった。献上されたその桜を清水が湧き出る泉の近くに植え、桜井とし、宮の名前も磐余稚桜宮とした。両神社はともにそれを由来として、延喜式神名帳の若桜神社の比定地に。若桜神社では、井戸が境内に復元された。</p>	P170
<p>いわれやまぐち 石寸山口神社（桜井市谷）と高田山口神社（同市高田）</p>	<p>ともに式内社・山口神社比定地の候補。石寸山口神社は双槻神社と呼ばれてきたことから、用明天皇の磐余池辺双槻宮の跡地とする説、また石寸山の水上にあったので、石寸水分神社とする説も。 高田山口神社は神殿がなく、神木をご神体としている。</p>	P170



3. 飛鳥・藤原地域の文化財 (4)

項目名	解説	頁
<p>4. 古墳</p> <p>古墳時代から 飛鳥時代へ</p>	<p>古墳時代は特殊に発達した墳丘墓（墳丘を持つ墳墓＝古墳）の造営によって特徴づけられる時代区分。古墳は 3～7 世紀の長期間にわたり東西南部から九州までの全国規模で活発に造られた。形態は、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳の 4 種類が代表的だが、最大の古墳である大山古墳（堺市）をはじめ、墳丘長が 200m を上回る巨大古墳約 40 基は、すべて前方後円墳。古墳は、前方後円墳を頂点とした序列（前方後円墳＞前方後方墳＞円墳＞方墳）と、墳丘規模の大小によって、階層性を視覚化していた。つまり古墳時代には、支配者層が階層性をもって古墳を共有し、その政治的連帯と秩序を視覚的に確認する社会システムが存在した。</p> <p>飛鳥時代は古墳が終焉した時代（終末期古墳）。飛鳥時代が始まる 6 世紀末前後を境に、前方後円墳はほとんど造られなくなり、有力古墳は大型の円墳や方墳に変化。飛鳥時代を通じて、古墳の規模は小さくなり、造営数も段階的に減少し、平城遷都の頃には全く造られなくなった。</p> <p>古墳時代の社会で重要な役割を果たした古墳の機能は、中央集権的な国家体制が整備される中で変質し、その意味を失った。</p>	P171
<p>古墳の小型化と 墳形の変化 (①～③の 3 段階)</p>	<p>① 6 世紀末前後の前方後円墳の消滅と、有力古墳の大型円墳（方墳）化。この時期を代表する古墳は、赤坂天王山古墳（45m の方墳。1 号墳は国の史跡で、崇峻天皇陵か）、植山古墳（30m×40m の長方形、推古天皇と竹田皇子親子を最初に葬った墳墓か）、石舞台古墳（50m の方墳、蘇我馬子の墓か）、与楽カンジョ古墳（36m の方墳、天井は石舞台より高い。与楽古墳群として国の史跡）、段ノ塚古墳（八角墳の初現、42m）、小山田古墳（80m 以上、飛鳥時代最大の方墳、舒明天皇の初葬地または蘇我蝦夷の大陵か）、菖蒲池古墳（30m の方墳）など。</p> <p>② さらに古墳の縮小化と築造数の減少（乙巳の変で蘇我本宗家が滅亡した 7 世紀半ば～第Ⅲ四半期）。代表的な古墳は岩屋山古墳（40m の方墳、切石積石室＝岩屋山式横穴式石室）、カナヅカ古墳（35m の方墳、欽明天皇の孫の吉備姫王の墓か）、小谷古墳（30m の方墳または円墳）、牽牛子塚古墳（22m の八角墳、斉明天皇と娘の間人皇女の墓か）、カヅマヤマ古墳（35m の方墳）、鬼の俎・雪隠古墳（東西約 40m の長方形墳。横口式石槨の蓋石＝雪隠と底石＝俎）など。大化 2 年の大化薄葬令の影響か。</p> <p>③ 古墳の終焉時期（壬申の乱を経て中央集権体制がほぼ確立した 7 世紀第Ⅳ四半期～8 世紀初頭）。代表的な古墳は、野口王墓古墳（37m の八角墳、天武・持統陵）、中尾山古墳（19.5m の八角墳、文武陵か）、マルコ山古墳</p>	P172

	<p>(24mの六角形墳、内部全面に漆喰が塗られていたが、壁画は描かれていなかった)、キトラ古墳(13.8mの円墳)、高松塚古墳(23mの円墳)。 八角墳は大王(天皇)陵またはそれに準じる一部の皇族墓として限定的に採用され差別化された。8世紀に入ると火葬が広まり、古墳は完全に終焉。</p>	P173
埋葬施設の変化	<p>古墳の埋葬施設には、①^{たてあな}竪穴系埋葬施設、②^{よこあな}横穴系埋葬施設。</p> <p>①は弥生時代以来の系譜を引く在来的な埋葬施設。竪穴式石室、粘土槨、木棺(石棺)、直葬など。②は古墳時代になってから、大陸の影響を受けて成立。横穴式石室、横口式石槨。飛鳥時代は②が基本で、①はまれ。</p> <p>7世紀前半までの大型方墳(円墳)は、巨石を使用した大型の横穴式石室。</p> <p>畿内の大型横穴式石室は、^{ひらばやし}平林式(平林古墳=葛城市兵家)→^{ひょうげ}天王山式(赤坂天王山古墳=桜井市倉橋)→石舞台式→^あ岩屋山式→^あ岩屋山垂式、の順に変化。</p> <p>7世紀前半の石舞台式石室は、巨石化と大型化のピーク。7世紀半ばには^{きりいしづみ}切石積で壁面構成の整った岩屋山式石室が有力古墳に採用。その後、急速に小型化して、7世紀第IV四半期には、横穴式石室はほぼなくなる。</p> <p>7世紀前半の^{てらさきしらかべづか}寺崎白壁塚古墳(高取町寺崎の方墳、与楽古墳群を構成)は、飛鳥・藤原地域で最も古い横口式石槨。7世紀半ばまでの横口式石槨は、石槨の全面に前室を設けるが、7世紀後半には前室のないものが登場。</p> <p>鬼の^{まないた}俎・^{せつちん}雪隠タイプの横口式石槨(石英閃緑岩など硬質の石材をくり抜く)や、高松塚古墳石槨などにつながる横口式石槨(軟質の^{ぎようかいがん}凝灰岩切石を組み合わせて構築)など。^{のぐちおうのはか}野口王墓古墳(天武・持統陵)の横口式石槨は、石室的要素の強い一定規模の墓室空間を持ち、7世紀第IV四半期としては突出した存在。</p>	P173
古墳の分布と主要な古墳	<p>飛鳥盆地内(宮都の主要施設が集中)には古墳の分布は見られず、その周辺部に古墳が集中。^{ひのくま}檜隈、^{まゆみ}真弓を中心とした丘陵地帯(飛鳥盆地南西)には、主要古墳が集中。古墳の築造数が激減した7世紀第IV四半期以降には、被葬者は天皇と近親者に限定され、そうした数少ない古墳が檜隈周辺に集中。</p> <p>飛鳥の聖なるライン(藤原宮・京の中軸線を南に延長したライン)上に野口王墓古墳、高松塚古墳、キトラ古墳などが並ぶ)として、意図的に配置か。</p>	P174
^{のぐちおうのはか} 野口王墓古墳 (天武・持統陵、 ^{ひのくまのおおうちみさきぎ} 檜隈大内陵)	<p>五段築成の八角墳。外表は^{はりいし}貼石、^{にじょうさんぎようかいがんきりいし}敷石(二上山凝灰岩切石を使用)、裾には外周石敷。^{あおきのさんりようき}阿不幾乃山陵記(盗掘に関わる実検記録)によると、横口式石槨には^{めのう}瑪瑙切石を使用。石室全長7.7m、玄室(内陣)の長さ4.2m、幅2.8m、高さ2.4m。^{せんどう}羨道(外陣)の長さ3.5m、高さ2.2m。玄室入口に両開きの金銅製扉。玄室には^{こうざま}格狭間(^{くりかた}刳形の装飾)のある金銅製の棺台、その上に朱塗りの^{きょうちよかん}夾紵棺(天武天皇の棺。棺内には人骨、紅色の衣服、^{せきたい}石帯=石などの飾りをつけた^{かわおび}革帯)。棺の隣には金銅製蔵骨器(桶、持統天皇の遺骨)。</p>	P175

平田梅山古墳 (欽明天皇陵)	全長 140m。東西に延びる丘陵と平行するように、主軸を東西に置く前方後円墳。良好な状態で葺石が遺存。墳丘南面では、後円部・前方部とも三段築成。 欽明天皇 <small>ひのくまきかあいのみささぎ</small> 檜隈坂合陵として、宮内庁が管理	P175
カナヅカ古墳	明治時代に破壊されたが、1辺 35mの 2 段築成の方墳に復元。墳丘前面には幅 60mのテラス面。全長 16mの岩屋山式の横穴式石室。 欽明天皇陵の陪塚 <small>はいちよう</small> (大きな墓の近くにある小さな墓) として宮内庁が管理。	P176
鬼の俎・雪隠古墳 <small>まないた せつちん</small>	横口式石槨の底石(俎)が原位置に露出し、石槨上部(蓋石=雪隠)がその下方に転がり落ちる。欽明天皇陵の陪塚 <small>はいちよう</small> として宮内庁が管理。	P176
中尾山古墳 (文武天皇陵か)	墳丘全面を石で覆う三段築成の八角墳。埋葬施設は花崗岩の底石と天井石、凝灰岩の奥石、側石を組み合わせた横口式石槨。内面は丁寧に磨かれ、水銀朱が付着。文武天皇の檜隈安古岡上陵 <small>ひのくまのあこおかのうえのみささぎ</small> の可能性がある。	P176
高松塚古墳 (国の特別史跡、 壁画は国宝)	7世紀末～8世紀初の築造。直径 23m、2 段築成の円墳。槨内壁には全面に漆喰を塗り、それを下地として極彩色の壁画を描く。北壁に玄武、東壁に青龍、西壁に白虎の四神図。ただし南壁の朱雀は盗掘により破壊。東南西北の順に、「青春(朱)の白黒(玄=黒)」と覚える。天井中央に星宿図(星座の絵)、東西壁中央上部に日月像。東西壁の北寄りには女子(各 4 体)、南寄りには男子(各 4 体)の計 16 体が描かれる。被葬者は高市皇子、弓削皇子、忍壁皇子など天武天皇諸子や、阿倍御主人、石上麻呂などの高位の貴族などの諸説がある。昭和 47 年に発見されて大きな話題となるが、30 年後に褪色が判明、修復のため石槨を解体、今は文化庁保存修理施設(国営飛鳥歴史公園事務所内)で保管。	P177
キトラ古墳 (国の特別史跡、 壁画は国宝)	7世紀末～8世紀初の築造。直径 13.8m、2 段築成の円墳。二上山凝灰岩の切石 18 石で構築。槨内壁は全面に漆喰を塗布し、それを下地として極彩色の壁画を描く。北壁には玄武、東に青龍、西に白虎、南に朱雀の四神図。天井中央には天文図、東西壁寄りに日月像。人物群像はないが、四壁の下部に各 3 体、獣面人身の 12 支像を描く。床面には棺台の設置痕跡。壁面の漆喰層が落下する危険性があることが判明し、壁画を剥ぎ取り、文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設(国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区内)で保管。	P178
牽牛子塚古墳 (アサガオ塚古墳)、 越塚御門古墳 (いずれも国史跡)	① 牽牛子塚古墳は八角墳。墳丘斜面は、二上山凝灰岩切石の貼石を施し、裾部には凝灰岩切石の犬走り状の石敷。外側は川原石敷。埋葬施設は、横口式石槨(二上山凝灰岩の巨石 1 石をくり抜いたもの)。中央の間仕切りで、2 室構造とする。開口部前面には、巨大な石英安山岩切石(外部閉塞石)。被葬者の 1 人は 30～40 歳代女性。被災者は斉明天皇と娘の間人皇女か。 ② 越塚御門古墳は、牽牛子塚古墳の南東。墳形は不詳。埋葬施設は、石英閃緑岩を使用した鬼の俎・雪隠古墳タイプの横口式石槨。被葬者は、持統天皇の姉・大田皇女か。	P178
岩屋山古墳	一辺 40m、2 段築成の方墳、上段は八角形か。全体は石英閃緑岩の切石積。築造時期は 7 世紀半ば。斉明天皇の初葬地か。	P179
マルコ山古墳	貝吹山から東西に伸びる丘陵の南斜面に造られた多角形墳(墳丘=二段築成)。墳丘の周囲にはバラス(碎石、砂利)が敷かれる。	P179

	埋葬施設は二上山凝灰岩を組み立てた横口式石槨。内部全面に漆喰が塗られているが、壁画はない。石槨の中から漆塗木棺の破片が出土。 ^{こんどうろつかがたかざりかなぐ} 金銅六花形飾金具も出土。7世紀末～8世紀初めの築造。	P180
カヅマヤマ古墳	丘陵の南斜面を大規模にカットして造られた1辺約24mの方墳（二段築成）。埋葬施設は両袖式の横穴式石室・結晶片岩板石を ^{せんづみ} 磚積（レンガ積）とし、壁面に漆喰。玄室床面は結晶片岩板石敷。地滑り（正平地震か）で大きく損壊。	P180
^{まゆみかんすづか} 真弓罐子塚古墳	貝吹山から南に延びる ^{おち} 越智丘陵の突端に造られた円墳（直径約23m、高さ約5m）。埋葬施設は横穴式石室で、羨道が玄室の北と南の2つ取り付く。土器類、 ^{ぞうがん} 銀象嵌刀装具、 ^{てつぞく} 鉄鍬などが出土。6世紀半ば～後半築造。被葬者は渡来人か。	P180
^{つかみしょうじん} 東明神古墳	^{おち} 越智丘陵の東端で南斜面を大きくカットして造られた八角形墳（直径38m）。周囲には石敷。埋葬施設は二上山の凝灰岩をブロック状に加工した石材を使用した横口式石槨。7世紀後半～末の築造。被葬者は ^{くさかべのみこ} 草壁皇子か（天武の皇子）。	P180
^{ごじょうのまるやま} 五条野丸山古墳 （見瀬丸山古墳、 畝傍陵墓参考地、 国の史跡）	前方後円墳。全長318m、古墳時代を通じても全国6番目（奈良県内では最大）。古墳時代後期に限れば、飛び抜けた規模。明治初年にW・ゴーランドが調査し、巨大な横穴式石室の存在を報告。後円部の一部が畝傍陵墓参考地として、宮内庁が管理。築造時期は6世紀後半。被葬者は、欽明天皇または蘇我稻目か。	P181
^{うねやま} 植山古墳 （国の史跡）	東西40m、南北約30mの長方形墳。 ^{ふんきゆう} 墳丘の東、北、西には大規模な掘り割りがコの字形に巡る。6世紀末に東石室が造られ、7世紀前半に西石室が追加。東石室は全長約13mの両袖式（羨道部から見て奥の玄室が左右に広がる）横穴式石室で、阿蘇ピンク石（阿蘇溶結凝灰岩、 ^{ようけつぎょうかいがん} 馬門石とも）製の刳抜式家形石棺を安置。西石室は、全長約13mの横穴式石室で、玄門部に扉を受ける凝灰岩（ ^{たつやまいし} 竜山石）製 ^{しみいし} 闕石（仕切石）。両石室とも閉塞土によって開口部が塞がれる。掘り割りの背後の丘陵上には、114mにわたる掘立柱塼が設置、藤原宮期まで存続。東石室の被葬者は竹田皇子、西石室の被葬者は推古天皇とし、 ^{しながのおおみさぎ} 科長大陵（大阪府太子町）に改葬される前の初葬地とする説が有力。	P181
^{しょうふいけ} 菖蒲池古墳 （国の史跡）	一辺30m、二段築成の方墳。7世紀中葉の築造。東側に特殊な堤状遺構（東辺外堤）。埋葬施設は南に開口する ^{りょうそでしき} 両袖式横穴式石室。 ^{せんどう} 羨道は天井石がなく、側壁も埋没。半加工の自然石を使い、大量の漆喰で表面仕上げ。 ^{たつやまいし} 竜山石（凝灰岩）製の家形石棺を縦一列に安置。7世紀後半以降掘り割りが埋められ、 ^{かんが} 官衙などとして利用された。石室主軸が北で西へ14度振れ小山田古墳と共通。被葬者は蘇我蝦夷・入鹿父子、または蘇我倉山田石川麻呂・ ^{ごごし} 興志父子か。	P182
^{こやまだ} 小山田古墳	2014年の発掘調査で発見。一辺80m以上の飛鳥時代最大の方墳で、最後の古墳。7世紀中葉の築造。墳丘は削平。墳丘北辺に底面幅約3.9mの掘り割り。墳丘側は結晶片岩板石を基礎として、 ^{はいげらいし} 榛原石（室生火山岩）板石を階段状に少しずつずらしながら積み上げ。	P182

	<p>造営直後に墳丘外表の石材が撤去され、官衙や墓地として利用。石室主軸が北で西へ14度振れ菖蒲池古墳と共通。</p> <p>被葬者は蘇我蝦夷の墓（大陵）または舒明天皇の初葬地か。</p>	
石舞台古墳 (国の特別史跡)	<p>一辺約50mの方墳で、空濠・外堤を含めた規模は一辺約80m。横穴式石室の天井石が露出。石室は両袖式で西南方向に開口。最大の天井石は77トン。</p> <p>蘇我馬子の桃原墓か。</p>	P182
ほそかわだに 細川谷古墳群	<p>6世紀後半から7世紀初頭の約200基の小古墳からなる群集墳。渡来的要素（右片袖式で高い天井の横穴式石室。ミニチュア炊飯具、釵子=かんざし、指輪などの副葬品）が認められることから、飛鳥に集住した渡来系氏族の墓域か。</p> <p>都塚古墳、打上古墳は、その盟主墳と見られる代表的な古墳。</p>	P183
みやこづか 都塚古墳 きんちょうづか (金鳥塚)	<p>一辺約40mの方墳。6世紀後半の築造。川原石積の段が6段以上ある多段築成。石室は石英閃緑岩の自然石積で、玄室は中央部が高い疑似アーチ状天井。玄室には、二上山凝灰岩製刳抜式家形石棺を安置。</p>	P183
だんのづか 段ノ塚古墳（舒明 天皇・押坂内陵 に治定）	<p>墳丘は二段築成の八角形（最初の八角墳）。下段の裾は、榛原石（室生火山岩）の板石を積み上げた外表施設で覆われる。最下段の裾にも自然石の貼石。埋葬施設は横穴式石室で、石棺2個が安置されていたか。</p>	P184
あかさかてんのうざん 赤坂天王山古墳 (国の史跡)	<p>一辺45mの方墳。6世紀末～7世紀初頭の築造。両袖式横穴式石室。玄室には二上山凝灰岩製刳抜式家形石棺。石棺の南小口面に、蓋から身にまたがる48cm四方の方形くり込みあり、内側が貫通。被葬者は崇峻天皇か。</p>	P184
もんじゅいんにし 文殊院西古墳 (安倍文殊院境内、 国の特別史跡)	<p>小規模な円墳、築造は7世紀後半。南に開口する花崗岩切石積の両袖式横穴式石室。玄室の奥壁、両側壁は、横長の長方形に整形した切石を、レンガを積むように5段に互目積（縦の線が半分ずつずれる）。羨道は両側壁とも切石4石1段、天井石は玄室1石、羨道3石の巨石を用いる。</p>	P184
こたに 小谷古墳	<p>一辺の長さが約30mの方墳（または円墳）。7世紀中葉の築造。南に開口する切石積の両袖式横穴式石室（岩屋山式石室）。龜山石（凝灰岩）製刳抜式家形石棺。県の史跡。</p>	P185
ぬまやま 沼山古墳	<p>白檀近隣公園内。直径18mの円墳。築造時期は6世紀後半。南に開口する横穴式石室。玄室の天井が高い右片袖式石室。ミニチュア炊飯具が出土、渡来系集団と関係か。</p>	P185
陵墓と陵墓の比定	<p>古代の陵墓は、中世以降、所在地が忘れ去られる。</p> <p>近世になると陵墓探索の気運が高まり、多数の考証が行われる（松下見林『前王廟陵記』、蒲生君平『山陵志』、谷森善臣『山陵考』など）。</p> <p>また幕府が荒廃した山陵を修繕する「修陵」がたびたび実施。</p> <p>野口王墓古墳（天武・持統天皇を合葬した「檜隈大内陵」に治定）は、「元禄の修陵」時には天武・持統陵とされた。しかし北浦定政『打墨繩』が</p>	P186

	<p>文武陵に比定し、「文久の修陵」でも文武陵に。その後、明治13年に京都高山寺<small>こうざんじ</small>で『阿不幾乃山陵記』<small>あおきのさんりょうき</small>が発見され、天武・持統陵であることが改めて確定。</p> <p>これを受け、これまで天武・持統陵に治定されていた五条野丸山古墳が陵墓参考地に治定替え。諸史料から野口王墓古墳は、被葬者の比定が最も確実な古墳の1つ。その一方で、歴史学・考古学研究の進展により、被葬者の比定が疑わしい陵墓は、少なくない(天皇、皇后、皇太后、太皇太后の墓所=陵。その他の皇族の墓所=墓。合わせて陵墓と呼ぶ)。なお鏡女王<small>かがみのおおきみ</small>(中臣鎌足の妻)<small>おしきかほ</small>押坂墓は民間所有であり、宮内庁所管の陵墓ではない。</p>	
<p>ようらく 与楽古墳群</p>	<p>貝吹山南麓の高取町与楽・寺崎を中心に、6世紀後半～7世紀前半に形成された約100基の群集墳。渡来的要素(高い天井の片袖式横穴式石室、ミニチュア炊飯具・釵子=かんざし・指輪の副葬など)が認められ、東漢<small>やまとのあやうじ</small>など、渡来系氏族の墓域か。与楽鐘子塚古墳<small>かんとすづか</small>、与楽カンジョ古墳、寺崎白壁塚古墳の3基は、継続的に築造された首長墳。</p>	P185
<p>ようらくかんとすづか 与楽鐘子塚古墳 (国の史跡)</p>	<p>与楽カンジョ古墳の北方約300mの南へ派生する丘陵上。直径28m、高さ7～9mの二段築成の円墳。6世紀後半の築造。木棺があり、2回の追葬。鉄製馬具、金銅製耳飾、ミニチュア炊飯具などが出土。</p>	P187
<p>与楽カンジョ古墳 (国の史跡)</p>	<p>一辺36mの二段築成の方墳。築造は6世紀末～7世紀前半。両袖式横穴式石室で、玄室の天井が極めて高い。玄室中央に漆喰<small>しつくい</small>の高まりがあり、棺台か。金銅製耳環<small>じかん</small>、銀製指輪<small>てつのみ</small>、鉄鑿<small>てつざく</small>、砥石<small>といし</small>などが出土。</p>	P187
<p>てらさきしらかべづか 寺崎白壁塚古墳 (国の史跡)</p>	<p>一辺約30mの方墳。7世紀前半の築造。南に開口する切石積の横口式石槨。石材の間には、漆喰が充填。土師器<small>はじき</small>、須恵器<small>すえき</small>、鉄釘<small>てつくぎ</small>などが出土。</p>	P187



3. 飛鳥・藤原地域の文化財 (5)

項目名	解説	頁
<p>5. その他の</p> <p>著名な遺跡</p> <p>さまざまな遺跡 (生産、祭祀、饗宴、生活施設、防衛通信施設遺跡など)</p>	<p>飛鳥地域で注目されるのは、宮殿に付属する官衙(役所)や邸宅。飛鳥の官衙は斉明朝からみられ、天武朝に充実。これらは宮殿の中や隣接地だけでなく、飛鳥寺北西の石神遺跡(迎賓館)や飛鳥水落遺跡(漏刻)にも。</p> <p>また飛鳥宮東方の酒船石遺跡(天皇祭祀)や天武朝には飛鳥池工房遺跡(富本銭を作る)も本格稼働。邸宅や公的施設は、飛鳥中心部から離れた山間部に造られた。蘇我氏の邸宅とされる島庄遺跡や甘檜丘東麓遺跡などは比較的近いが、五条野内垣内遺跡、五条野向イ遺跡は丘陵上に造られ、上の井手遺跡は丘陵の山麓に造られた。このほか、飛鳥を防衛する施設も。森カシ谷遺跡、佐田タカヤマ遺跡は烽(のろし、のろし台)か。飛鳥に散見するヒフリ(のろし、のろし台)という地名も同様か。八釣マキト遺跡には大規模な掘立柱塼。</p>	P188
<p>飛鳥池工房遺跡 (国の史跡、奈良県立万葉文化館内)</p>	<p>天武・持統朝を中心に操業された大規模な工房跡。飛鳥寺東南の谷の斜面に、多種多様な工房(金属加工、宝石の加工、漆、瓦、富本銭の鋳造など)。谷筋は堤で区切られ、段々畑のように廃棄物を沈殿させた(廃棄された炭層は土嚢袋10万袋以上)。朝廷と深く結びついた工房(古代の手工業生産技術を集積した総合工房)。北地区と南地区に分けられる。北地区には石敷井戸や掘立柱建物。8,000点にのぼる木簡は寺の資材管理に関わるものなど。南地区は工房で、谷の斜面をひな段状に造成。</p>	P189
<p>酒船石遺跡 (国の史跡)</p>	<p>飛鳥京跡の東にある丘陵とその北側の谷底にある祭祀遺跡。丘陵の上には謎の石造物、酒船石。丘陵中腹には、700mにおよぶ石垣がめぐる。石垣は飛鳥石(石英閃緑岩)の切石を一行に並べ、その上に天理砂岩(凝灰岩質細粒砂岩)の切石を積み上げる。この丘陵の西側(宮殿側)斜面には、砂岩の石垣より低い三重の石列・石垣が確認され、裾部には砂岩切石の石敷(宮殿=飛鳥宮から見ると、石の山に見えた)。これは日本書紀、斉明天皇2年の記述「宮の東の石垣」か。丘陵北側の谷底には、亀形石造物を含む導水施設。砂岩を積み上げた湧水施設(中央の塔)から流れ出た水を木樋で小判形の石造物に流し、その水槽で濾過させ、亀形石造物の背中の水槽に溜める。冷たく清らかな湧き水を濾過させ、神聖な亀の背中に溜めることで、水を「聖なる水」にしたか。全体として酒船石遺跡は、斉明朝の天皇祭祀に関わる遺跡か。</p>	P189
<p>石神遺跡</p>	<p>古代の大規模な宮殿関連遺跡。飛鳥寺の北西、飛鳥水落遺跡の北に隣接。明治35~36年、須弥山石(内部をくりぬいた噴水石、須弥山は仏教世界の中心)と石人像(噴水石)が掘り出された。7世紀代を通じ、何度も整備が繰り返された。新羅や蝦夷に対する服属儀礼と、それに伴う饗宴儀礼の施設か。東北地方の土師器も出土したが、これらの多くは天武朝頃の遺物か(天武朝頃に全面的な改修が行われた)。</p>	P190

	武器類が多数出土したことから、武器庫の存在が推定される。藤原宮期に建物群は大きく改変され、 ^{かんが} 官衙（役所）的な施設になったか。溝の埋土からは大量の木簡が出土し、なかでも ^{ぐちゅうれき} 具注曆木簡は、曆の実物としては最古の例。	
飛鳥水落遺跡 (国の史跡)	飛鳥寺の北西、石神遺跡の南に隣接する ^{ろうこくだい} 漏刻台の遺跡。漏刻のある頑丈な楼閣建物の周囲には石貼の溝をめぐらし、その外側を廊状の建物が囲む。周辺はバラス（砂利、碎石）敷きの広場。楼閣建物は、①7世紀中頃の造営で、②建物内で水を巧みに利用、③須弥山を建てた石神遺跡に隣接することから、日本書紀斉明天皇6年の記事にあるわが国初の漏刻台の遺跡と判明。 大石の上の小型水槽は受水槽（時刻目盛りを刻んだ ^{せん} 箭＝矢を浮かべた）で、楼閣の2階には、時を知らせる鐘や鼓を設置していたか。	P191
飛鳥寺西方遺跡	飛鳥寺旧境内地の西方に広がる遺跡で、蘇我入鹿の首塚（鎌倉時代後期～南北朝）がある。遺跡は7世紀前半と後半（全域が石敷・バラス敷の広場）の2時期。この地域は乙巳の変（大化改新）の発端となった中大兄皇子と中臣鎌足の出会いの場であり、孝徳天皇即位に伴って ^{つきのき} 槻樹（ケヤキ）の下で群臣たちが誓いをした場、斉明・天武朝には ^{ねみし はやと} 蝦夷や隼人に対する服属儀礼の場。 槻樹の場所は、首塚の場所、または首塚西隣接地か。	P192
甘樫丘東麓遺跡	蘇我氏の邸宅に関連する遺跡。7世紀～8世紀初頭にかけて、谷を大幅に造成。7世紀前半、中央にある谷の東側に石垣を設け、谷の西と東に平坦面を造成、そこに総柱建物（倉庫か）を配置。谷の入口には被熱面（焼かれた跡）や建物、溝、工房。焼土層からは、7世紀中頃の土器、焼けた壁土、炭化材が出土。北側の尾根には柵。しかし、蘇我氏邸宅の中心部ではない。7世紀後半には谷を埋め立てて整地し掘立柱塀で囲まれた官衙風の建物を造営。7世紀末にも再び整地し、建物や炉を設ける。北側の尾根をはさんだ北方の谷でも、7世紀前半に大規模に整地し、建物を建てた。	P193
川原寺裏山遺跡	川原寺の北西、 ^{いたぶき} 板蓋神社のある丘陵の南斜面裾の埋納遺構（土坑）。火災にあった ^{せんぶつ} 三尊塼仏（浮彫タイル状の仏像）、塑像片、 ^{りやくゆうせん} 緑釉塼などが大量に出土。 古銭の ^{ふじゆしんぼう} 富寿神宝、 ^{じょうわしやうほう} 承和昌宝が出土。 川原寺は平安時代前半に被災、そのときに焼失した仏像・仏具を埋納したか。	P193
川原下ノ茶屋遺跡	小山田遺跡の南。東西道路（川原寺南大門と橋寺北門の間を通過）の延長部で、南北道路（小山田遺跡の進入路）との交差点。 飛鳥宮～川原寺・橋寺～下ツ道を直線で施工されたか。	P193
五条野内垣内遺跡	7世紀後半の邸宅・ ^{かんが} 官衙。甘樫丘から西方にのびる植山古墳と同じ丘陵にあり、春日神社を隔てた東側。丘陵上を ^{さくへい} 削平して建物群。 配置は、正殿（ ^{しめんびさし} 四面廂）、前殿、前々殿を配し、脇殿は対象の位置にはない（地形の関係）。これら建物を掘立柱塀が囲み、入口は南東。	P194
五条野向イ遺跡	7世紀後半～末の邸宅・ ^{かんが} 官衙遺跡。甘樫丘から西方にのびる尾根上を削平して建物。正殿、後殿、東脇殿。西脇殿も想定され、コの字形に配置か。これらを掘立柱塀が囲み、南面中軸線上に南門。	P194

<p>あすか^{あすか}でらがよう 飛鳥寺瓦窯</p>	<p>飛鳥寺旧境内の南東にある丘陵の西斜面に作られた瓦窯で、飛鳥寺用の瓦を焼いていた。丘陵の東の谷には飛鳥池工房遺跡。花崗岩風化土の岩盤をくり抜いた登窯^{のぼりがま}で、全長約10m。隣接して瓦窯も。飛鳥寺創建時の丸・平瓦が出土。</p>	<p>P194</p>
<p>かみい 上の井手遺跡</p>	<p>飛鳥資料館建設に伴って確認された飛鳥時代の邸宅跡。南には山田道。7世紀後半の石組暗渠(70m超)、掘立柱建物、古墳時代前期の溝・井戸、8世紀末の火葬骨壺など。皇子宮や、有力豪族の邸宅の可能性が高い。</p>	<p>P195</p>
<p>ふるみや 古宮遺跡</p>	<p>水田の中に古宮土壇^{どだん}。榎実木(榎)^{よみのき えのき}が生える。明治時代に金銅製四環壺(4つの環=取っ手のついた壺)が出土したことから、長らく推古天皇の^{おほりだのみや}小墾田宮推定地とされてきたが、今では蘇我氏の邸宅に関わる遺跡か、と。石組大溝、玉石組の小池、S字形に屈曲する石組溝、石敷の庭園、掘立柱建物などが出土。</p>	<p>P195</p>
<p>いかづちのおかほつぼう 雷丘北方遺跡</p>	<p>雷丘北方の平地にある邸宅または官衙の遺跡。7世紀後半には、四面廂の正殿、その東西に脇殿、長大な東西棟^{むね}の建物。南の脇殿は、長大な建物(桁行17間)で、東西に廂。建物群は藤原京の条坊区画に沿うので、少なくとも南北2町。</p>	<p>P195</p>
<p>ひらた 平田キタガワ遺跡</p>	<p>欽明天皇陵(平田梅山古墳)南の庭園遺跡。東西方向に高さ1.6mの直線の石垣、底にも石(池の護岸と池底か)。北側の平坦面も石敷か。猿石とも関係か。</p>	<p>P195</p>
<p>しまのしょう 島庄遺跡</p>	<p>石舞台を含めた西側に広がる苑地、邸宅、宮殿の遺跡。蘇我馬子の嶋家か(飛鳥川の川辺にあり、庭園を持つ邸宅)。嶋皇祖母命(糠手姫皇女と吉備姫王)が居宅を営み、壬申の乱の前には大海人皇子が嶋宮に宿泊。草壁皇子も嶋宮に居住。その後、嶋宮は奈良時代まで存続。この遺跡の7世紀代には4つの時期。7世紀第I四半期は、方形池(1辺42m)が築造され、9世紀まで存続。第II四半期には、方形池の北東に石積溝。その南に建物と小池。第III四半期には、石積溝は埋められ、方形池の南側に小規模な建物。第IV四半期には、正方位に合わせた建物群が方形池の南北に展開。</p>	<p>P196</p>
<p>さだ 佐田遺跡群 (古墳時代～近世)</p>	<p>高取国際高校建設で確認。小谷、北ノ尾、横ヶ峯遺跡で構成。紀路に面した西側の丘陵上。6世紀後半～7世紀中頃の古墳が複数存在。これに後続する7世紀中頃～後半にかけての掘立柱建物、竪穴建物、塀が確認。北ノ尾・横ヶ峯遺跡は、丘陵を平坦に造成し、縁に塀をめぐらせ、その中に建物群。紀路に面した尾根上には、土塁状施設があり、瓦、磚(焼き物で作ったブロック)、硯^{すずり}などが出土。一般集落ではなく公的施設(飛鳥を守る外域的施設)か。紀路をはさんだ東側の^{ひのくまうえやま}檜前上山遺跡も、類似的な性格か。</p>	<p>P196</p>
<p>もり 森カシ谷遺跡 (烽火台の遺跡= 古代の烽火遺構)</p>	<p>紀路に面したすぐ西側の尾根上。尾根の先端には、直径220m程度の地山整形(盛り上がっている地表を削って整地)した高まりと頂上に大型土坑、南西面に通路。高まりの周辺には逆茂木(先端をとがらせた木の枝を外に向けて並べる)状の柵。北東側には掘立柱施設。高まりの各方面には橋脚状遺構(監視用のテラス状施設か)。尾根のつけ根側の平坦面には、掘立柱建物(檜風の建物を含む)、竪穴建物、大壁建物。この遺跡は森カシ谷塚古墳によって壊される(→藤原京期以前の遺跡のため)。高まりと大型土坑が炬火(たいまつ)施設、檜風建物とテラス状施設が監視施設、掘立、竪穴、大壁建物は兵士の駐留・炬火材の保管施設。</p>	<p>P197</p>

<p>さだ 佐田タカヤマ遺跡</p> <p>のろしだい (烽火台の遺跡)</p>	<p>マルコ山古墳南西の尾根上。尾根の先端には地山を整形した高まりがあり、その頂部に大型土坑（細長い通路がつき、埋土に炭や灰が混じり壁面が煤けていたことから、何かを燃焼していたか）。尾根のつけ根側は平らに削平され、大壁建物、掘立柱建物、塀があった。これら遺構と重複して7世紀中頃の古墳があることから、一連の遺構は7世紀中頃以降のものか。</p> <p>森カシ谷遺跡とは600mの距離で、目視できる。</p>	<p>P197</p>
<p>やつり 八釣マキト遺跡</p> <p>(掘立柱塀跡)</p>	<p>飛鳥東方の尾根上。細い尾根の稜線上に、1～1.7m間隔に15基の柱穴。7世紀中頃の古墳よりも新しい。尾根そのものを基壇に見立て、掘立柱塀が尾根線状に並んでいることから、飛鳥中心部を守る施設か。</p> <p>類似の遺構が、酒船石遺跡向イ山地区にもある。</p>	<p>P198</p>
<p>明神山烽火MAP プロジェクト</p>	<p>のろし 烽火は、古代の高速情報通信網。高取町の複数の遺跡で烽火台がみついているほか、「ヒフリ（火振り）」など烽火との関連のある地名が残る。王寺町の明神山は、高安城と飛鳥を結ぶ烽火網の中継地。令和4～5年度、明神山の山頂で烽火を上げ、伝達ルートや見え方を推定・検証する同プロジェクトが行われた。烽火の見え方は天候などに大きく左右されることから、明神山から飛鳥をさらに中継する複数のルートが整備されていたか。</p>	<p>P198</p>
<p>6. 瓦、土器、 木簡 その他 出土品、埋納品</p> <p>埋蔵文化財の宝庫</p>	<p>未発掘の遺跡や知られていない遺跡など、数多い遺跡が地下に眠る。遺跡は「遺構」と「遺物」（＝屋根瓦、柱など建物や工作物の一部。土器、木製品、金属器、石器、玉類などの道具類。文字や絵が描かれた木簡、金属板、石板類。人間や動物の骨、歯。貝殻。植物の実や種子など）。</p> <p>遺構・遺物は、社会のあり方や生活そのものの痕跡。土の中に残された遺構、遺物を通して、当時の人々の日常生活が復元でき、精神世界をも垣間見ることができる。</p>	<p>P199</p>
<p>飛鳥・藤原地域から 出土した瓦と塀</p>	<p>日本の瓦づくりは飛鳥に始まる。飛鳥寺の建立に際し、百濟から瓦博士（瓦づくりの技術者）が渡来し、飛鳥寺の瓦を製作した。</p> <p>持統天皇8年に藤原宮で初めて宮殿に瓦が使用されるまで、ほぼ1世紀の間、瓦は寺院建築の独占物。瓦と同じく、粘土を焼成して作る塀（タイル、レンガ）も瓦とともに伝来し、寺院空間を飾った。</p>	<p>P199</p>
<p>飛鳥寺の瓦</p>	<p>飛鳥寺の創建瓦は、百濟系の瓦。軒平瓦は使用されなかった。軒丸瓦の文様は、「素弁（花卉に小さな花びらを表さない）蓮華文」。飛鳥寺の素弁には「花組」（花卉先端に三角状の切り込みをもつ）と「星組」（半球状のふくらみをもつ）の2種類。花組・星組の瓦は、飛鳥寺創建期の6世紀末～7世紀前半に流行し、飛鳥や近畿中枢部の寺院跡で出土。創建期の瓦窯は、寺域東南方の丘陵裾。</p>	<p>P200</p>
<p>くだらのおおでら 百濟大寺（吉備池 廃寺）の瓦</p>	<p>舒明天皇11年の百濟大寺（吉備池廃寺）の造営を機に、新たな文様として「単弁（花卉に1枚の小さな花卉）蓮華文」が登場、軒平瓦も採用。創建時の軒平瓦の文様は、忍冬唐草文のスタンプ（もとは法隆寺で使用）を型押しした忍冬唐草文平瓦と、三重弧文をひいた上に忍冬唐草文のスタンプを押した忍冬唐草文軒平瓦の2種類。山田寺の瓦は、百濟大寺に近い単弁形式の瓦（山田寺式）。</p>	<p>P200</p>
<p>かわらでら 川原寺の瓦</p>	<p>軒丸瓦（川原寺式）は、花卉に2枚の子葉（小さな花びら）を持つ「複弁蓮華文」の祖型。蓮華文の外区（周囲）には面違い鋸歯文（互い違いの鋸歯のようなギザギザの縁の文様）。瓦は境内の川原寺瓦窯や荒坂瓦窯（五條市）で製造。</p>	<p>P200</p>
<p>だい官だいじ 大官大寺の瓦</p>	<p>大ぶりの「複弁蓮華文軒丸瓦」と「均整唐草文軒平瓦」が出土（大官大寺式）。</p>	<p>P201</p>

	蓮華文の周囲には、大粒の連珠文（数珠のようにつながった玉の環の中に意匠を施す）。連珠文の外側は無文。遣唐使などを通じた唐直伝の文様。大官大寺の均整唐草文は、平城宮の軒平瓦（奈良時代の軒平瓦の基本）へと受け継がれる。	
ふじわらのみや 藤原宮の瓦 (瓦を初めて採用した宮殿)	「複弁蓮華文軒丸瓦」と「偏行（一方向に反転する）唐草文軒平瓦」（藤原宮式）が出土。本薬師寺からも出土（薬師寺がやや先行）。藤原宮の瓦は、奈良県内では日高山瓦窯（橿原市）、久米瓦窯（同左）、高台・峰寺瓦窯（高取町）、西田中・内山瓦窯（大和郡山市）、安養寺瓦窯（平群町）。県外では宗吉瓦窯（香川県）、土生寺瓦窯（淡路島）、石山国分寺遺跡瓦窯（滋賀県）、和泉、阿波などで製造。	P201
せん 文様磚	磚の多くは無文だが、一部に文様を施した磚が出土。岡寺では、天人文（国重文）、鳳凰文を表した特殊な文様磚（一辺約40cm、厚さ8cm）が伝わる。川原寺裏山遺跡からは緑釉水波文磚が出土。波や渦を表し、白色粘土で焼き上げ、緑釉を施したもので、日本最古の緑釉の焼き物。仏像を安置した須弥壇の上面に敷き詰められ、蓮池を表現。	P202
土器	土師器、須恵器など。古墳時代から古代への変換点を示すもので、大きな画期。土師器は精製された緻密な土を使い、内面に暗文（模様）、外面にミガキ・削り調整。須恵器は古墳時代からの杯身と蓋が逆転、高台がつき、蓋につまみ（仏具など金属器の影響か）。同一器種に大中小、杯、椀、皿。高杯などの器種構成が多様化（＝律令的土器様式）。飛鳥ⅠからⅤの五段階。舶来の土器（新羅土器の壺や硯）も出土、東アジアとの交流の証し。	P202
いかずちのおかとうほう 雷丘東方遺跡 から出土した井戸枠	雷丘東方遺跡の井戸跡から、「小治田宮」と書かれた墨書土器（8世紀末）が出土。井戸枠も出土（木材は758年頃に伐採）しており、奈良時代の小治田宮は、この時期に造営されたか。	P203
木簡	推古天皇18年、高句麗の僧・曇徴が紙と墨の製作技法を伝えた。文書や荷札には、紙ほか木簡が使われた。木簡の使用は遅くとも6世紀後半には開始され、王都とその周辺部、屯倉（朝廷の直轄地）を中心とした地方拠点で限定的に使用。7世紀中頃でもこの傾向は変わらず、飛鳥、難波といった王都とその周辺部にとどまる。天武朝には木簡の出土点数が飛躍的に増大し、地方への広がりも顕著となる（この時期までの木簡には、朝鮮半島の影響が濃い）。百濟滅亡による遺民の大量の移入（7世紀後半～8世紀前半）や、唐との国交断絶期（668～701年）における新羅との交流により、日本語（倭国の固有語）の中に漢字を体系化する試みが認められる。木簡文化の発展の背景には、律令国家の形成に伴う地方支配と文書行政の進展、仏教の地方への浸透があった。木簡には人名、冠位、職名、地名、物品名（米、鯛、鮎など）が書かれていた。「天皇」の称号や「乙丑（きのとうし）年」の年紀を記した荷札木簡も。	P203
こよみもつかん 暦木簡	石神遺跡（飛鳥水落遺跡の北に隣接）から出土した具注暦（吉凶などが書かれた暦）木簡。長方形の板に書かれていたが、円盤形の木製品に再利用。木簡の表裏には十二直（暦注に使われる語句）や月の満ち欠けなどが記載。	P204

	<p>持統天皇3年3～4月の元嘉曆^{げんかれき}を記した暦木簡で、現存する日本最古の暦。</p> <p>元嘉曆の実物が世界で初めて発見された事例。</p>	
石神遺跡の荷札木簡 (地名+五十戸)	<p>年次の記された紀年木簡。全国初の戸籍とされる庚午年籍より前の665年に</p> <p>「五十戸」制が施行されていた。「評」の下に置かれた五十戸はのち「里」に。</p>	P204
「評」と書かれた 藤原京の荷札木簡	<p>藤原宮跡から、大宝元年頃の「阿波評」と記された木簡が出土。大宝律令（大宝元年）までは「評」、施行後は「郡」と表記。阿波は、のちの安房国安房郡^{あわのくに}（千葉県南部）。大宝律令の国、郡、里制以前に、国、評、五十戸制が整備。</p>	P205
「天皇」木簡（天皇と 書いた最古の木簡）	<p>飛鳥池工房遺跡から出土。一緒に出土した木簡は天武朝のもので、天武朝の頃に、天皇という称号が使われていることが確認された。</p>	P205
「大嘗祭」の木簡 ^{おおにえのみつり}	<p>飛鳥池工房遺跡から出土。天武天皇6年、三野国刀支評、加爾評^{かこのこおり}（美濃国土岐郡、可児郡。現在の岐阜県）から大嘗祭で使う次^{すき}（主基）の米を納めた荷札。</p>	P205
高松塚古墳の出土品	<p>7世紀末～8世紀初めに作られた終末期古墳。もともと副葬品が少なく、また鎌倉時代に盗掘されているため、出土した遺物は多くない。</p> <p>石室^{せつかく}（石槨）からは、漆塗木棺（杉板に布をかぶせて黒漆塗り。内面は鉛白＝白色顔料と朱）の残欠と銅釘、棺の飾金具類、海獣葡萄鏡1面（同じ鑄型で作られた銅鏡が複数あり）、大刀の金具類、ガラス玉（青色の小玉が約1200点、やや大ぶりの丸玉が8点）、琥珀玉など。主なものは国重文に指定され、飛鳥資料館で収蔵・展示。一部の遺物は、奈良県立橿原考古学研究所。壮年男性1体の人骨、土師器、須恵器の破片も。</p>	P206
キトラ古墳の出土品	<p>7世紀末～8世紀初めに作られた終末期古墳。もともと副葬品が少なく、また鎌倉時代に盗掘されているため、出土した遺物は多くない。</p> <p>石室からは、木棺（漆塗り）の残欠や飾金具、副葬品の刀の金具類や玉類、中世の土器などが出土。主な出土品は国重文。</p> <p>石室内から、被葬者（50～60歳代男性）の人骨と歯。</p>	P206
飛鳥寺の塔心礎 埋納物	<p>発掘調査により、塔跡地下の巨大な心柱の礎石と、多数の遺物が見つかる。塔跡の中央の土坑から石櫃が見つかり、その中に鎌倉時代の舍利容器と木箱があり、そこに飛鳥時代の多数のガラス玉類。</p> <p>出土品には多数のガラス玉類、銀象嵌のあるガラス玉、トンボ玉、金銀の延板と粒、ヒスイやガラス製の勾玉など。</p> <p>ガラス玉類や金銀、真珠など仏教の七宝（7つの宝物）にあたるものだけでなく、武具や馬具のような古墳の副葬品も納められていることが特徴。</p>	P207
飛鳥池工房遺跡の 出土品	<p>国家的な工房で、出土品は当時の手工業生産の実態を知る貴重な資料。谷筋に堆積した廃棄物層を中心に、工房関連遺物が多数出土。金銀用のるつぼとともに、金33点、銀54点が出土。</p> <p>緑色の鉛ガラスの生産や、輸入ガラスを材料とした再加工も。</p> <p>銅や鉄関係の遺物も多数出土。富本銭（=和同開珎に先立つ最古の鑄造貨幣）の未成品、鑄型、鑄棹^{いざお}などが出土し、7世紀代に富本銭が鑄造されていたことが分かった。</p> <p>また北地区（飛鳥寺東南禅院に関連）からは、約8,000点もの木簡が出土、飛鳥時代の一大史料群となっている。</p>	P208

<p>山田寺跡の出土品 (山田寺跡は 国の特別史跡)</p>	<p>古代寺院の実態を示す多彩な遺物が出土。特筆すべきは、倒壊したまま見つかった東面回廊（法隆寺より古い建築物）の建築部材と、膨大な量の瓦類。東面回廊は、再現した展示が飛鳥資料館で公開されている。</p> <p>瓦には華麗な文様が採用されていて、<small>たんぺんはちようれんげもん</small>単弁八葉蓮華文の軒丸瓦と、<small>じゅうこもん</small>重弧文（カーブする線を何本も重ねた模様）の軒平瓦は、山田寺式。銅板五尊像は、中国製の精緻な半肉彫りの小型の尊像。押出仏（銅板を叩きのぼしたもの。堂内の装飾に用いた）や、焼き物の<small>せんぶつ</small>塀仏も多数出土。</p> <p>礎石は柱座（礎石の上面）に蓮弁を表す特徴的な造形。</p>	<p>P209</p>
<p>藤原京のトイレ からの出土遺物</p>	<p>藤原京では、水洗トイレ（道路の側溝の水を引き込み水流の上で用を足した）の遺構も。糞ベラ（<small>ちゅうぎ</small>籌木）は、木簡などを1枚ずつにほぐし、尻を拭いた。トイレ遺構からは、寄生虫の卵も多数発見された。</p>	<p>P210</p>



3. 飛鳥・藤原地域の文化財 (6)

項目名	解説	頁
<p>7. 仏像、古墳</p> <p>壁画、石造物</p> <p>飛鳥時代の彫刻、工芸品、絵画</p>	<p>飛鳥時代前半の彫刻は、アーモンド（杏仁）形の眼にアルカイック・スマイル（口元の微笑み）、左右対称性（正面観を重視）など。</p> <p>飛鳥時代後半（白鳳彫刻）になると、立体性を伴った写実的な作風に変化。面長の顔はふくよかな丸顔に、眼は杏仁形から半眼へと変化し、体軀にも抑揚。服装は両肩を覆う通肩のほか、左肩のみを覆った偏袒右肩が現われ、形体も、立像、坐像のほか倚像（椅子に腰掛ける）も。</p> <p>わが国では飛鳥時代に本格的に仏像が制作されるが、その源流はインドや中国。これらの国には今も多く石窟寺院があり、インドのアジャンター石窟寺院壁画の蓮華手菩薩は、法隆寺金堂壁画（勢至菩薩像）の源流。</p> <p>また蓮華手菩薩はトリバンガ（＝三曲法。頭・胴・脚を異なる方向に曲げる）という描写法で表現、こうした優美な動きは、薬師寺金堂薬師三尊像の脇侍（日光・月光菩薩）に認めることができる。</p> <p>山田寺や川原寺から出土した埴仏（粘土で型を抜き、焼いて作った板状の仏像）は、堂宇の壁などを装飾するために製作され、法隆寺の玉虫厨子の内部や中国の石窟寺院の千仏像のような世界を表現。</p> <p>須弥壇（須弥座）は、仏像を安置するために設けられた壇（台）で、仏教の須弥山（宇宙の中心の山で、頂上には帝釈天が住む）を模ったもの。</p> <p>岡寺では堂塔の須弥壇に天人埴、鳳凰埴の文様埴が使われていた。</p> <p>飛鳥時代の代表的な工芸品は、法隆寺の玉虫厨子、中宮寺の天寿国（曼荼羅）繡帳、法隆寺献納宝物の竜首水瓶（東京国立博物館蔵）で、いずれも国宝。</p> <p>玉虫厨子（推古天皇の念持仏）は、鋳葺（屋根面の途中に段のついたもの）の屋根の宮殿内に仏像が安置。厨子の須弥座背面には須弥山図、また左右の側面には捨身飼虎図（本生図＝釈迦の前世の物語。敦煌莫高窟の壁画にもある）。</p> <p>天寿国繡帳は銘文によれば、聖徳太子の死去を悼んで、妃の橘大郎女が作らせた（「天寿国」とは、阿彌陀仏が住む西方極楽浄土か）。</p> <p>竜首水瓶（＝胡瓶。ササン朝ペルシャに源流）は胴部に有翼の天馬（ペガサス）と竜が描かれる（日本製か）。高松塚古墳、キトラ古墳の壁画は、中国・朝鮮半島の古墳の壁画と共通性が見られる。中国の陰陽五行思想に基づき、石室を1つの宇宙に見立て、被葬者の魂を鎮めたか。</p>	<p>P211</p>

<p>釈迦如来坐像 (飛鳥大仏) 飛鳥寺(安居院)蔵</p>	<p>推古天皇13年、天皇が丈六(一丈六尺=480cm、坐像はその半分)像と繡仏(刺繍で作られた仏)の制作を鞍作鳥(止利仏師)に命じて作らせた。完成は推古天皇17年か(元興寺伽藍縁起)。当初は左右に脇侍をもつ三尊像か。面長な顔、杏仁形の眼、口角がやや上がったアルカイク・スマイル。鎌倉時代に火災。顔の大部分と右の掌の半分、頭髮の一部は当時のままか。</p>	<p>P213</p>
<p>銅造仏頭 (旧山田寺仏頭=興福寺東金堂の本尊) 興福寺蔵</p>	<p>天武天皇14年に開眼供養が行われた山田寺講堂の本尊で、当初は丈六の薬師如来坐像。平重衡の南都焼討で焼失した興福寺東金堂本尊に代わるものとして、山田寺より移座。のち東金堂は焼失するが、奇跡的に頭部のみが残る、本尊台座内に安置。昭和12年、興福寺東金堂の解体修理中に発見。国宝。</p>	<p>P214</p>
<p>騎獅文殊菩薩像 (渡海文殊) 安倍文殊院蔵</p>	<p>獅子に乗る文殊菩薩を中心に、向かって右に獅子の手綱を執る優填王と先導役の善財童子、向かって左の前後に仏陀波利三蔵(須菩提)と最勝老人(維摩居士=のちの補作)を配す。近年の修理の際、1203年の年紀と快慶作の墨書が見つかる。文殊菩薩像はヒノキの寄木造で彫眼(木から眼を彫り出したもの。玉眼の対義語)とし、肉身には粉溜(木地に膠を塗り表面に金泥を塗ったもの)、着衣には彩色、高い髻(頭頂に髪を結び上げたもの)や服制などには中国宋代の影響。円熟期の快慶の手腕が遺憾なく発揮された会心の作。国宝。</p>	<p>P215</p>
<p>日羅立像 橘寺蔵</p>	<p>円頂(坊主頭)で、左手に宝珠、右手は与願印(掌を外側に向けて下げ、指先を垂れる)の僧形像。寺伝では日羅(聖徳太子の師)の像。頭から蓮台まで、針葉樹の一木造(両手両足と持物は、後の時代の補作)。9世紀の制作。</p>	<p>P215</p>
<p>地藏菩薩立像 橘寺蔵</p>	<p>日羅立像とともに、聖倉殿に安置。右手に錫杖、左手に宝珠。一木造(両手足先と持物は後補)。制作は10世紀前半か。</p>	<p>P216</p>
<p>持国天、多聞天立像 川原寺(弘福寺)蔵</p>	<p>ともに針葉樹の一木造で、両肩から先は後補。当初は彩色像。10世紀初めの制作か。</p>	<p>P216</p>
<p>如意輪観音菩薩坐像 岡寺蔵</p>	<p>現存する塑像としては、最大。奈良時代後半の制作か。頭と胸の一部を除く大部分は、後補。</p>	<p>P217</p>
<p>義淵僧正坐像 岡寺蔵</p>	<p>奈良時代後半の制作。義淵僧正は、奈良時代前期の高僧。奈良時代後半に流行した木心乾漆造(大まかな木彫の原型を作り、そこに漆とペースト状の木屎漆を盛り上げて細部を整形して像を完成させる技法)で制作。国宝。</p>	<p>P218</p>
<p>十一面観音立像 聖林寺蔵 国宝</p>	<p>もとは大神神社の神宮寺・大三輪寺(大御輪寺)の本尊。明治時代の廃仏毀釈で聖林寺に移された。木心乾漆像の1つの到達点。国宝。</p>	<p>P218</p>
<p>伝薬師三尊像 石位寺蔵</p>	<p>7世紀後半の制作か。丸みのある三角形の岩の中央には椅子に腰掛けた如来像、左右には合掌して立つ菩薩像。保存も良好で、当初の像容を留めている。</p>	<p>P219</p>

<p>かなや 金屋二尊石仏</p> <p>金屋の収蔵庫に安置</p>	<p>2枚の岩に彫られた二尊（釈迦如来と弥勒如来）は量感豊かで安定感のある姿。作風から、平安時代後半から鎌倉時代の制作か。</p>	<p>P219</p>
<p>せんがつ 飛鳥地域の埴仏</p>	<p>埴仏は唐から伝来し、7世紀後半に飛鳥の寺院で流行するが、8世紀には少なくなる。飛鳥では山田寺の金堂跡や塔跡から多数の埴仏（上面に黒漆、その上に金箔）が出土。堂塔内の周囲の壁面に貼り詰められていたか。橘寺、川原寺裏山遺跡、南法華寺（壺坂寺）からも、如来倚像（椅子に腰掛ける）を中尊に、菩薩立像を両脇侍とした方形三尊埴仏が出土。</p>	<p>P220</p>
<p>仏像の種類</p> <p>によらい 如来</p>	<p>仏の最高位で、覚者（悟りをひらいた存在）とも。釈迦如来（仏教の開祖）、薬師如来（病気を治し寿命を伸ばす）、阿弥陀如来（極楽浄土に人々を導く）などは古くから日本で信仰される。如来の名前は、印相（手の形）で判断できる。釈迦如来は施無畏印、与願印。阿弥陀如来は来迎印、定印、說法印。</p> <p>如来（釈迦がモデル）は頭部に螺髪という粒状の髪型で、衲衣（全身を覆う1枚の布）をまとふ。如来のうち大日如来だけは例外的に、菩薩のように髻を結い、上半身には条帛（襷のような衣）を掛け、宝冠や装身具をつける。</p>	<p>P220</p>
<p>ぼさつ 菩薩</p>	<p>悟りをひらく修行をしつつ、衆生を救済する存在。出家前の釈迦がモデルで、王侯貴族の服装をもとにした宝冠や胸飾りなどを身につける。多くは髪を結い上げ、上半身は裸で、条帛を掛け、下半身は裙（裳＝巻きスカート）をはく。</p> <p>代表的な菩薩は観音菩薩（現世利益をもたらす）。衆生の願いに応じて姿を変える（11の頭を持つ十一面観音や、多くの手を持つ千手観音など）。</p>	<p>P221</p>
<p>みょうおう 明王</p>	<p>平安初期に中国から伝わった密教特有の仏で、仏教の教えに背く者を導く。</p> <p>多くは憤怒相で、多面・多臂（＝腕）。代表が不動明王で、右手に繯索（＝縄）、左手に剣を持ち、火焰後背を背負う。東寺で空海が作らせた像が最初。</p>	<p>P221</p>
<p>てん 天（天部）</p>	<p>仏教以外（バラモン教やヒンドゥー教など）の神々が、仏教の守護神となったもの。仏教や信徒を守護する護法神（四天王、十二神将など）と、福をもたらす福德神（大黒天、歓喜天）に大別。通常、仏に男女の別はないが、天では男女の違いがあり、四天王や大黒天は男、吉祥天や弁財天は女。</p>	<p>P221</p>
<p>仏像の製作技法</p> <p>金銅仏</p>	<p>日本の仏像には、金属、木、土（粘土）、漆、麻布、石などさまざまな素材。</p> <p>金属の仏像は、蠟型鑄造が一般的。粘土で大まかな形を作り、その上に蜜蠟（ミツバチの巣から得られる蠟）をかぶせて細部を作る。</p> <p>その後蜜蠟の上を土で覆った後、窯の中で熱すると蠟が溶けて、蜜蠟部分に空洞ができる。この空洞に金属を流し込む。内部が冷えて固まった後、ヤスリやタガネで細部を仕上げ、金メッキを施して完成。</p>	<p>P221</p>
<p>そぞう 塑像</p>	<p>土で作られた仏像。骨格となる心木を立て、荒縄を巻く。心木の上から荒土（藁の繊維などを混ぜた土）をつけて大まかな形を作り、その上から中土（紙の繊維を混ぜた土）をつけて形を整える。そして目の細かい仕上げ土で細部を整え、彩色や漆箔を施せば完成。耐久性は低いが、細かな造形が可能。</p>	<p>P222</p>

<p>せんぶつ 埴仏</p>	<p>塑像と同じく土が素材だが、仕上げに焼成する。まず型（雌型）を用意し、粘土を押し当て、型から粘土を取り出して焼き固めて黒漆を塗り、金箔や彩色を施す。単独で礼拝の対象とされたものと、堂内の装飾に使われたものがある。</p>	<p>P222</p>
<p>かんしつぞう だっかつ 乾漆像（脱活乾漆、 もくしん 木心乾漆）</p>	<p>漆と麻布で作る（古くは即、塞）。塑像と同じく、奈良時代に流行。①脱活乾漆と②木心乾漆の2種類。①脱活乾漆は、像の原形を土で作り、上に漆を塗った布を貼り重ねる。その後、背中を切り開いて中の土をかき出し、空洞になった内部に心木を入れて補強。仕上げに木粉や小麦粉を混ぜた漆で細部を作り、その上から金箔や彩色を施して完成。②木心乾漆は、土の原型が木になったもの。</p>	<p>P222</p>
<p>もくちようぞう 木彫像</p>	<p>木は日本の仏像の素材で最も多く、平安以降の仏像はほとんどが木で制作。 ①一木造（頭と体の中心部分を1本の木で作り、腕や足は別材で補う。干割れを防ぐため内部はくり抜く）②割矧造（＝一木割矧造。頭と体を1本の木で作るが、一旦木を割り話して内割りを施した後、再び組み合わせる）。 ③寄木造（複数の材から作る。部材ごとに内割りをするので干割れが入りにくい。軽量で、部分ごとに分業ができる。大きな仏像でも大木が必要ない）。</p>	<p>P222</p>
<p>せきぞう 石像</p>	<p>入手しやすく安価だが、重いので移動が難しく、屋外に安置されることが多いので、風雨にさらされて劣化が早い。丸彫のほか、崖に直接刻まれた磨崖仏などがあり、多くは加工しやすい花崗岩や凝灰岩が使われた。</p>	<p>P223</p>
<p>古墳壁画</p>	<p>中国や高句麗（朝鮮半島）では多彩な古墳壁画が知られており、四神や日月、星を描くことなど、わが国とつながる。古墳時代には装飾古墳（北部九州中心）が作られ、幾何学文や単純な図像を描いたり彫刻したりした。飛鳥時代には寺の堂内に壁画が描かれるようになり、飛鳥時代終わりには、初めて古墳に壁画が描かれる。古墳壁画としては、高松塚古墳（極彩色の大陸風壁画、記念切手も）とキトラ古墳の2例だけだが、どちらも凝灰岩の切石を組み合わせた狭い石室（石槨）の内面全体に漆喰を塗り、その上に壁画を描く。 近年のカビの被害で、高松塚は石室石材ごと、キトラは漆喰層を取りだし、保存管理施設で保存・公開。</p>	<p>P223</p>
<p>高松塚古墳の壁画</p>	<p>石室（石槨）内には、天井に星宿、壁に日月、四神、男女群像。国宝。 星宿は、中国式の星座。古代中国の主要な星座である28宿（天球を28のエリアに分割したもの）が東西南北の7宿ずつ方形に配置され、中央にある北極と4輔（＝補佐官）を取り囲む。星座は円形の金箔と赤い線で表現。東壁に日像（中央上部、金箔で表す）、西壁には月像（銀箔）があり、山岳と霞の上に浮かぶが、盗掘のため大きく損傷。 各壁面の中央には四神（東壁に青龍、西壁に白虎、北壁に玄武、南壁の朱雀は消失）。青龍と白虎は頭は南、尻尾が股をくぐり立ち上がる姿は、唐で8世紀に流行。東西壁の南側には男子群像、北側には女子群像（カラフルで襷のあるスカート。動きと奥行きのある絵）。色とりどり（赤、緑、黄、白）の衣服を身につけ、手には大刀袋、椅子、袋、蓋、如意（孫の手状のもの）など。 人物像には唐の絵画と共通する要素があるが、衣装は、中国式ではない（唐の画風を取り入れて描いた絵画か）。</p>	<p>P224</p>

キトラ古墳の壁画	<p>石室（石槨）内には、天井に天文画と日月、壁に四神と十二支。高松塚とともに、大陸風の極彩色の古墳壁画、国宝。天井の天文図（中国式の星座）は、高松塚とは異なり、350以上の星で72以上の星座を表し、全天を描く。中心は天の北極、赤い同心円で周極星（沈まない星）の範囲である内規（北天の周極星の範囲を示す）、天の赤道（地球の赤道面が天球と交わる交点）、外規（南天の観測限界を示す）を示し、見かけ上の太陽の通り道である黄道を偏心円で示す。科学的要素を持つ全天を表した本格的な天文図（星図）としては、世界最古の実例（ただし黄道の位置が間違っており、実用の天文図ではなく、絵画）。四神は高松塚とよく似ているが、大きさは一まわり小さい。十二支は獣の頭に人間の体。袖の長い服（長袍）を着て、右手に槍状の武器や盾を持つ。天文図、四神、十二支は季節や時間の順調な運行と、被葬者を邪悪なものから守る意図。</p>	P225
飛鳥・藤原の石造物	<p>猿石、亀石、二面石、須弥山石、石人像、酒船石、亀形石造物、出水の酒船石（明日香村出水）、ミロク石（明日香村岡）、豊浦の文様石など。花崗岩系の硬い飛鳥石（石英閃緑岩）を加工、彫刻。多くは斉明天皇の時代の制作。硬い花崗岩を彫刻する技術は当時の日本にはなく、朝鮮半島から渡来した石工が制作したか。益田岩船は古墳の石室の加工途中でヒビが入って放置されたもの。出水の酒船石は、飛鳥京跡苑地の導水施設（噴水用石造物と一体）。</p>	P227
益田岩船	<p>岩船山（貝吹山の東峰）頂上近くにある巨大な石英閃緑岩の石造物。加工が中断されていて、完成品ではない。牽牛子塚古墳の横口式石槨によく似ていることから、斉明天皇と間人皇女の合葬墓とするつもりが、亀裂が入ったために放棄されたか。東西面はほぼ垂直で南北面は緩やかに傾斜しているので、逆さになった石の船に見える。</p>	P227
猿石	<p>墓（吉備姫王墓の檜隈墓）の前に並んでいる滑稽な顔をした4体の石像。江戸時代に、欽明天皇陵（平田梅山古墳）南方の池田の水田から掘り出され、陵の前方部南側に設置されたか。明治初年、吉備姫王墓に移された。花崗岩製で、南北はぼ一列に並ぶ（北から、女、山王権現、僧、男）。平田梅山古墳の墓域を示す記念物的なもの、または辟邪（欽明天皇陵の邪気を払う）の目的か。また石像は伎楽などの仮面劇で用いられたもので、それぞれの石像が役を担ってドラマを演じているとも。橋寺の二面石、高取城跡の猿石、光永寺（高取町観覚寺）の人頭石は、猿石と同一場所で出土したか。</p>	P228
高取城跡の猿石	<p>高取山中（高取城二ノ門を出て城下町へ下る大手筋と、飛鳥方面へ下る岡口門への分岐点）。吉備姫王墓の4体の猿石と同類のもの。石垣用に運ばれてきた、または城郭の境目を示す結界石か。</p>	P228
人頭石（顔石） 光永寺＝高取町	<p>光永寺山門を入り、裏に回った前庭にある。高さ1mの花崗岩、顔の左側半面が彫られている（右側の裏面は、石の自然石のまま）。顔面の頭部上面は手水鉢。</p>	P229

<p>にめんせき 二面石 (橋寺)</p>	<p>橋寺境内の本堂脇。高さ 1mほどの花崗岩製、江戸時代に運び込まれた。寺伝によると、人の心の善悪二業一心を表す (1面は醜く、1面は優しい)。</p>	<p>P229</p>
<p>採石技術 ほりわり (掘割技法、 やあな 矢穴技法)</p>	<p>① 掘割技法とは、石材を溝状に掘り囲んだ後、岩盤につながる下面に掘込みを入れ、梃子棒で持ち上げて切り離す。直方体の切石を岩盤から切り出し。 ② 矢穴技法とは、岩盤に矢穴を列状に掘り、矢 (クサビ状の鉄製道具) を矢穴に差し込み、鉄の槌で叩き、石の割れ目を徐々に広げて採石。 飛鳥時代、日本では軟質の凝灰岩を中心に掘割技法で採掘したが、朝鮮半島では矢穴技法で硬質石材を採石。 高取城跡の石垣には、矢穴のある石造物が見つかり、飛鳥から運ばれたか。また飛鳥の酒船石などには、その矢穴と同年代 (16世紀末) の矢穴が残る。</p>	<p>P230</p>
<p>石材運搬技術</p>	<p>巨石の運搬には修羅 (木製の轆)、ころ (修羅の下に入れる丸太)、ろくろ (綱で引っ張るための滑車)、梃子棒などが使われた。</p>	<p>P230</p>
<p>石材加工技術</p>	<p>石棺など埋葬施設の一部を加工。凝灰岩製石棺の成形、仕上げが、削り技法で行われた。6世紀末には朝鮮半島から硬質石材を加工する技術 (寺院造営技術の一環) が伝来。ノミによる敲打 (凸部を打って平面を整える) など。 須弥山石 (飛鳥時代中頃) などの石造物は、硬い飛鳥石を彫り込んで作られたが、そのような技術は当時の日本にはなく、朝鮮半島から来た石工が作ったか。飛鳥時代の古墳 (終末期古墳) は、石材加工・利用の面で変遷。岩屋山古墳の石室 (岩屋山式石室=切石石室の壁面や目地に漆喰を使う) は、飛鳥石 (石英閃緑岩) の切石を用いた精美な横穴式石室。畿内の横穴式石室は、自然石の多段積→巨石の少段積 (石舞台など) →切石積、と変化。 飛鳥地域の古墳は、硬質の花崗岩 (6~7世紀中頃) から、軟質の二上山凝灰岩 (7世紀後半~) に変化。飛鳥時代後半には、切石への需要が拡大。採石、運搬、加工が容易な軟質石材を掘割技法により、大量に利用。 二上山麓の採石跡では、掘割技法の痕跡。 東明神古墳の大型石室は、ブロック状に切石加工した「二上山凝灰岩」を使う。高松塚・キトラ古墳では、「凝灰岩」切石を組み合わせて横口式石槨を築き、その表面に漆喰を塗り、壁画を描いている。国宝の壁画は、「二上山凝灰岩」と石材加工技術に支えられていた。 「二上山凝灰岩」は、牽牛子束古墳、野口王墓古墳の墳丘の貼石、藤原宮大極殿の切石積外装でも使用。複雑な仕口 (部材の接合) や規格性を備える。 律令国家の整備過程では、加工石材を使った宮殿、寺院、古墳などが造営。石工集団の専門化、石材加工技術の進展、凝灰岩切石の大量生産が行われた。</p>	<p>P230</p>



3. 飛鳥・藤原地域の文化財 (7)

項目名	解説	頁
しゆみせんせき 須弥山石	いしがみ 石神遺跡（水落遺跡の北）から、石人像とともに発見。3つの花崗岩製の石からなり、全体の形はだるま落とし形で総高2.3m。本来は4石（下から2石目が失われた）。内部は空洞で、水槽に水が入れば、外に流れ出る。	P229
せきじんぞう 石人像	しゆみせんせき 須弥山石とともに石神遺跡から出土。1つの花崗岩に、寄り添うように、男女が浮き彫り。高さ1.7m。男の体内には足元から細い ^{あな} 孔が空き、胸元でY字形にわかれて1本は男の杯、もう1本は女の口まで貫通（水をくみ上げ、杯や口から水を出す噴水）。須弥山石と石人像は、饗宴の場での水を使った舞台装置。飛鳥寺の西や石神遺跡は、ヤマト政権の支配下に入った ^{えみし} 蝦夷など辺境の民に対する服属儀礼や、それに伴う饗宴を行う場。現物とレプリカは、飛鳥資料館。	P231
さかふねいし 酒船石	まかみのほら 飛鳥宮跡のある真神原の東の丘陵線上にある花崗岩の巨石。長さ約5.5m、幅約2.3m、高さ約1m。水の流れを見て占うなど、儀礼に使った施設か。	P232
でみず 出水の酒船石 (京都市左京区の のむらへきうんそう 野村碧雲荘蔵)	おおあざ こあざ 明日香村大字岡小字出水で、大正5年に水田の排水路下から2つの石造物。平成になってまた2つの石造物が出土。これらは一連のもので、護岸に石積、底面に石敷を施した大規模な池を持つ遺跡（飛鳥京苑地）の遺物で、導水、噴水施設を構成。出水の酒船石は野村碧雲荘の庭石となり一般公開はされていないが、レプリカは飛鳥資料館に展示されている。	P233
かめいし 亀石	亀石交差点（明日香村川原）近くの周遊歩道沿いにある。長辺約5mの甲羅型の花崗岩の巨石に目と口。境界を表す石造物か。	P233
亀形石造物	酒船石遺跡のある丘陵の谷間の奥に、小半形石槽と亀形石造物が発見。亀形石造物は、丸く彫られた両目と、4本指の両足が特徴。小半形石槽の南側では、地下からの湧き水を地上に導水する施設が見つかっている。	P234
ミロク石（弥勒石）	木ノ葉堰付近（明日香村大字岡小字木ノ葉）、飛鳥川右岸。飛鳥川の川底から掘り出し、現在地に運び上げたと伝わり、もとは ^{いぜき} 井堰の基礎か。近在の人々の信仰を集め、「ミロクさん」と親しまれ、下半身の病にご利益があるとされ、祠にはたくさんの ^{わらじ} 草鞋が奉納されている。	P234
マラ石	いらいど 国営飛鳥歴史公園祝戸地区への入口園路付近。長さ約1m、男性性器を模して斜めに突き立つ（本来は直立か）。飛鳥川の対岸にはフグリ山と呼ばれる丘があり、1対のものか。子孫繁栄、農耕信仰の対象か、 ^{さかた} 坂田寺の境界か謎の石造物。	P235
たていし 立石 (明日香村内各所)	村内各所にある石造物。立地、大きさ、形状はさまざまで、目的や用途は不明だが、境界を示す標石か。豊浦、岡、上居、立部（＝乳母石、 ^{かわはら} 川原（＝現在は埋め戻されている）で確認。小原にもあるとされるが、所在は不明。	P235
とゆら もんよういし 豊浦の文様石	こうげんじ 向原寺境内、長さ約80cm。表面に火炎文のような文様を浮き彫り。1つの石造物の部分か。江戸時代中頃に築かれた用水用の石組みトンネル（豊浦集落南端の丘陵下）では、4個の文様石が確認。これらも、もとは豊浦にあったか。	P235

<p>りゅうふくじそうとう 竜福寺層塔</p> <p>(竹野王の石塔、 稲渕の竜福寺境内)</p>	<p>刻銘に、天平勝宝3年、朝風(明日香村稲渕と平田を結ぶ朝風峠周辺の飛鳥川左岸一帯)の南に葬られた人の供養のために、竹野王(長屋王の近親の女性)が造立したとあり「竹野王の石塔」と呼ばれる。在銘の石造層塔では日本最古。二上山凝灰岩製で現在の高さは1.8mだが、本来は5層(5重)の石塔。各層の屋根と軸部は別材で、現在は、3重目の屋根と4重の軸部までが残る。初重の4面に細字の銘文。東の面には、インドのアショカ王が世界中に立てたという石塔の伝説が記されている。石塔が、いつここに移されたかは不明。</p>	<p>P235</p>
<p>日本考古学の父、 ウィリアム・ ゴーランド (1872～88まで、 日本に滞在)</p>	<p>イギリス生まれのお雇い外国人。大阪造幣局の化学兼冶金技師。 登山家でもあり、日本アルプスの命名者。飛鳥には1882年、84年、88年の3回、古墳の調査で訪れた。五条野丸山古墳、欽明天皇陵、吉備姫王墓の猿石、野口王墓古墳、岩屋山古墳などを調査。岩屋山古墳の石室について、「舌を巻くほど見事な仕上げと、石を完璧に組み合わせてある点で、日本中のどれ1つとしておよばない」と絶賛。</p>	<p>P236</p>
<p>8. 中世の居館 と山城跡</p>	<p>中世の大和では守護は任命されず、宇智、吉野、宇陀の3郡以外は、興福寺(事実上の大和守護)の支配下に。興福寺では、一乗院と大乘院の両門跡が確執(両門体制)。興福寺衆徒の筒井氏と、同国民(春日社の神人)の越智氏が両門跡とつながり、勢力を二分。武力衝突(大和永享の乱など)が頻発。応仁の乱では、越智氏は西軍、筒井氏は東軍に加わった。 村の集落やその近くに、国人(土着の武士)の居館(平城)が築かれ、防衛上の要所に山城(詰め城)が築城された。飛鳥・藤原地域では、西部が越智氏、東部が多武峰の支配下にあり、居館跡として、越智城や小山城(明日香村小山。越智氏傘下の土豪・小山氏の城で、越智氏の出城)があった。 自然地形を生かした山城跡として 雷ギヲ山城、雷城、奥山城、飛鳥城、岡城、祝戸城、畑城、五条野城、平田城、野口吹山城、野口植山城、冬野城など。多武峰周辺の稜線上にも郭が築城され、防衛ライン(多武峰城塞群)に。 これらの山城は、①連郭タイプ(複数の平坦面の曲輪を階段状に重ねる=冬野城、小山城、奥山城、祝戸城、野口植山城、平田城)と、②単郭タイプ(1つの大きな主郭とそれを囲む空堀=雷ギヲ山城、雷城、野口吹山城、飛鳥城、畑城、岡城)に大別。多くは、多武峰方と松永久秀方の抗争下で築かれた対峙戦用。</p>	<p>P237</p>
<p>越智氏居館跡 (越智城跡)</p>	<p>標高約200mの馬蹄形の丘陵に、三方を囲まれる。丘陵上に郭跡があり、堀切(地面を掘って通した水路)や空堀跡が、よく残る。 越智氏が有した貝吹山城と高取城の両山城は、政庁的な機能を備えた居城に発展。16世紀半ばには家中が対立、両山城が惣領と庶流それぞれの拠点に。</p>	<p>P238</p>
<p>かいぶきやまじょうあと 貝吹山城跡</p>	<p>奈良盆地を北側に一望できる貝吹山(標高210m)上の城。築城は南北朝時代。越智氏の居館を守るための物見砦・詰め城だったが、のち中心的な軍事拠点として拡張、防備機能が強化。何度も戦場となり、筒井氏や松永氏が占拠。</p>	<p>P238</p>

<p>たかとりじょうあと 高取城跡</p> <p>国の史跡</p>	<p>高取山（標高 584m）山頂に築かれた山城。越智氏が芋峠（芋ヶ峠=奈良と吉野を結ぶ要衝）を監視し、南朝方の第一線を守るため、南北朝時代に築いた。もとは堀を掘った土で土塁を固めたカキアゲ城で、山の地形をならして築いた曲輪を幾段にも重ねて逆茂木（先をとがらせた木の枝を立てて並べたもの）や板塀で防御。貝吹山城とともに、越智氏の広域的な拠点。</p> <p>安土桃山時代、郡山城主となった豊臣秀長の重臣・本多氏によって、天守閣、石塁（石の砦）などを持つ城郭に改築。</p> <p>「巽（=東南の方角）高取雪かともれば雪でござらぬ土佐の城」と歌われた。</p> <p>本丸石垣の隅石（壁面の角の長方形の切石）などには飛鳥の古墳からの転用石。</p> <p>子嶋寺（高取町観覚寺）の山門は、高取城の二ノ門を移築したもの。</p> <p>高取城は徳川家光の時代から明治維新まで、高取藩植村氏の居城として存続したが、明治6年に廃城。麓からの高さは446m。美濃岩村城（岐阜県恵那市）、備中松山城（岡山県高梁市）とともに、日本三大山城。</p>	<p>P238</p>
<p>ふゆのじょうあと 冬野城跡</p>	<p>明日香村冬野。多武峰周辺に築かれた多武峰要塞群の中でも最大規模の山城で、多武峰の南を守る。南北朝～戦国時代まで、多武峰を舞台に3度の合戦があり、冬野城では激戦が繰り返された。</p> <p>承元2年（1208）には吉野金峯山と多武峰との争いがあり、金峯山の衆徒が多武峰に侵入し、多武峰を焼き払い、冬野城も陥落。大和永享の乱（1429～39）では、越智氏らが後南朝勢力をおしたてて多武峰を中心に幕府軍に抵抗。しかし多武峰は全山消滅し、越智氏も没落（のち復活）。永正3年（1506）、赤沢朝経の大和侵入があり、抵抗する越智氏などが多武峰に抛り冬野城を改修、利用。松永久秀の大和侵攻のときには、越智氏側の防戦拠点に。</p>	<p>P239</p>
<p>こやまじょうあと 小山城跡</p>	<p>明日香村小山にある小山氏（越智氏傘下、飛鳥の土豪）の居館跡。中ツ道に沿って北から敵が攻めてきたとき、防衛ラインとなる越智氏の出城。内郭（居館）と外郭の二重構造で、外郭の集落は環濠集落。巨大な横堀があり、内郭には複数の居館が並んだか。西山（集落西の丘陵）の稜線を超えて城郭の突出部があり、西側へ踏み込む構造。</p>	<p>P239</p>
<p>のぐちうなやまじょうあと 野口植山城跡 (野口植山古墳)</p>	<p>明日香小学校のすぐ西側の小さな丘。額田王の墓との伝説があり、歌碑の裏に由縁がある。それによると、持統天皇の崩御後に、葛野王（天武と額田の孫）が、額田王の墓をこの場所に移したとされる。</p> <p>すぐ西側に野口王墓古墳（天武・持統天皇陵）がある。葛野王は、この古墳の方向に向けて墓を移したか。</p>	<p>P240</p>
<p>越智氏の菩提寺、 こうらんじ 光雲寺（高取町越智）</p>	<p>高取藩ゆかりの禅寺で、境内には越智氏や藩士の墓、観世元雅の句碑（元雅をしのんで梅原猛が詠んだ俳句の碑）がある。</p> <p>南北朝時代初期に興雲寺として建立、室町時代初期に復興開基。天正年間には越智氏の没落で衰退したが、天和年間に鉄牛禅師（黄檗宗）が再興し、のち光雲寺に。山門前には厄除け杉（越智氏の家臣の息子が、信長の命を受けた筒井順慶の追手から逃れた）。</p>	<p>P240</p>

<p>9.文化的景観、古民家、伝統的町並みなど</p>	<p>文化的景観とは、「風土に根ざして営まれてきた人々の生活や生業のあり方を表す景観地」。飛鳥・藤原の地の棚田、石垣などの風景、大和棟の民家、歴史的な社寺、集落、邸宅、墓碑などに関連する場所などは、この地域特有の情緒やたたずまいを持った美しい景観を形成。</p> <p>奥飛鳥では、飛鳥川に沿った河岸段丘、山裾、山の緩斜面上に、集落が展開。棚田や家屋は、飛鳥川の川石や、山を切り開いたときに出土した石材を使った石積を伴う。集落の中には大和棟（急な茅葺の本屋根と、緩やかな瓦葺屋根＝落棟とを組み合わせる）の民家が点在し、石積とあわせて独特の集落景観。</p> <p>奥飛鳥の集落では、アライバ（飛鳥川に降りる階段を設え）が現在も機能。谷の斜面を開発した棚田では、飛鳥石（石英閃緑岩）による伝統的な石積が残り、井手（水路）が農業用水を供給。綱掛け神事（豊穰と子孫繁栄を祈願）が継承され、盆迎え、盆送りが飛鳥川沿いの集落で行われる。このような飛鳥川と結びついた生活と農業を中心とした伝統的な生業を伝える稲刈、栢森、入谷の全域と、祝戸、阪田の一部が、国の重要文化的景観に選定。</p> <p>飛鳥・藤原地域の近世の町場としては今井と八木が際立つ（ともに橿原市内にあり、その間は約900m）。八木は、越智氏による市の開設から出発し、下ツ道（中街道）と横大路という主街道の交差点として発展。今井は本願寺の保護のもとで寺内町として計画的に作られた。両者は商工業的な機能が異なるので、共存できた。明治中期以降、鉄道建設が進んだ中で、今井は駅の建設を回避。八木には畝傍駅ができたが、町の発展にはあまり結びつかず、高度成長期になり、八木の町並みの外で発展したことから、どちらも近世的景観が保たれた。</p>	<p>P241</p>
<p>大和棟の古民家</p>	<p>大和棟は、奈良盆地を中心に、河内、山城南部地方を中心に多く見られる切妻造民家の形式。主屋を急勾配の茅葺とし、両方の妻を漆喰で塗り込めて塀のように一段高くし、両端の数列を瓦葺とした「高塀」にするのが大和棟の基本型。大和棟は高塀造ともいわれ、両端の高塀の上に載せる飾り瓦は鳩の形が多く、「鳩衾」と呼ばれた。両側または片側の妻には、緩勾配の瓦葺の落棟をつけ、片方の妻に煙出しのヤグラを載せる。両端に瓦が並んだ茅葺の本屋根と、妻の落棟の瓦葺屋根という二重の構成が大和棟の特徴であり、日本の民家で最も美しい対照構成美を示すものと評価された。</p> <p>切妻の主屋の下は田の字をした四間取の居室が普通で、瓦葺の落棟の下は土間の「カマヤ」（竈屋＝かまどのある部屋）となった。瓦葺と茅葺の境に設けられた「煙返し」の大梁は、高塀を支えるとともに、竈の煙が居室に流れないようにその上を壁にした。大和棟の発生は、田畑輪換農法（稲作と畑作を交互に行う）による棉栽培や木綿業などの副業の活発化により、大和の農民が経済的に富んだ18世紀初め。庄屋や組頭などの家格の表現形式にも。</p> <p>明治以降、急勾配の大和棟の主屋は作られなくなる。最近では茅葺の部分がトタンで覆われたり、煙出しが取り払われたものも増えている。</p>	<p>P242</p>

<p>いむらけ おおじょうや 井村家 (大庄屋)</p> <p>明日香村八釣</p>	<p>江戸時代後半の飛鳥地方の大庄屋。古文書には、明日香村内だけでなく、吉野郡や奈良市の地名も。長く大庄屋だった井村家には、高取藩主がたびたび来て、堀の鯉を愛でたとも。今も美しい大和棟の家屋が残り、屋根の葺き替えのとき、屋根に飾られていた雌雄の河童の瓦が見つかる。</p>	<p>P243</p>
<p>もりむらけ おおじょうや 森村家 (大庄屋)</p> <p>橿原市新賀町</p>	<p>中世以来の旧家で、江戸時代には大庄屋。広い敷地に主屋、内蔵、別座敷、表門、米蔵、納屋。主屋は、茅葺 (今は鉄板葺) の切妻造、四方に本瓦葺の庇をつけた大和棟の最古例。規模は大きく、東半分を土間、釜屋部分とし、西半分の居室は、3室を3列に並べた整形9間取。主屋の上手に接続する別座敷は床、棚、書院を備えた座敷で、良質の材料を使い、上層の家の姿。表門は、表側道路に面して立つ長屋門で、規模が大きく家格の高さを表す。主屋、奥座敷などの主な建物は質が高く、保存状況も良好。江戸時代中頃に遡る大規模な大和棟の家屋として国重文、庭園は県の名勝。</p>	<p>P243</p>
<p>明日香村大字飛鳥と 大字岡の町並み</p>	<p>甘樫丘展望台から西側を見ると、市街地開発を行ってきた橿原市と、明日香村特別措置法などで開発を抑制してきた明日香村との違いがよく分かる。明日香村では、大字飛鳥 (飛鳥坐神社の門前町) と大字岡 (岡寺の門前町) に伝統的な町並みが残る。大字飛鳥、大字岡と、橿原市今井町、八木町では主屋に、二階部分の天井が低い「つし (厨子) 二階建て」が用いられる。</p>	<p>P244</p>
<p>きゅうおとりけ 旧大鳥家住宅</p> <p>明日香村飛鳥</p>	<p>飛鳥坐神社参道に北面して立つ町家、明治3年の建造。主屋と離れがあり、つし二階建て。主屋 (切妻造、棧瓦葺=波形で軽量の瓦を積む)。土間上に煙出しを設け、軒裏は漆喰で塗籠。内部は通り土間と床上を整形四間取。離れに納屋、座敷、厩舎、物入。主屋、離れとも、虫籠窓 (明かり取り、通風のため) で外観を飾る。</p>	<p>P244</p>
<p>もりけ 森家住宅</p> <p>明日香村飛鳥</p>	<p>飛鳥坐神社参道に南面して立つ町家、天保年間の建築 (今は簡易郵便局と酒店)。高取藩主が通るときの休憩所にも。上段の間の床の壁に貼られていた絹本の墨彩画、紙本の襖絵は近年、屏風に表装。</p>	<p>P244</p>
<p>岡本邸</p> <p>明日香村岡</p>	<p>明日香村大字岡の本町通りは、かつては商家や旅籠が軒を連ね、市場筋と呼ばれて定期市も。花井家には、高取藩主が休憩に立ち寄ったとされ、上段の間や玄関が、当時のまま残る。大字岡の南西側入口 (飛鳥川沿い) にある岡本邸は、古いたずまいの門構えを残す。ここでは大字岡側と飛鳥川の落差を利用し、大型水車で大量の米をついていた。高取藩主の御用米は、最も味の良い細川米で、御用米専用の水車で精米。今も県道から、水路と巨大な石垣が見える。</p>	<p>P244</p>
<p>今井町の町並みと 寺院建築 (飛鳥・ 藤原地域)</p>	<p>橿原市今井町は、称念寺を中心として中世末に形成された寺内町で、重要伝統的建造物群保存地区 (重伝建) に選定されている。周囲を環濠と土居 (土の垣) で囲んで防衛した現在の町割りが成立したのは、近世初頭。東西南北に何本も直交した街路の割り付けや、多数の伝統的な町家が継承されている。一向宗 (浄土真宗) の本山・石山本願寺 (大坂本願寺) が信長に攻撃されると、今井町の門徒衆は信長に敵対し、武装解除を条件に自治権を認めさせた。代々、今井町の惣年寄の筆頭をつとめた今西家の住宅 (重文) は、大棟の両端に段違いに小棟をつけ、入母屋造の破風 (=屋根の妻側部分。前後喰違いに見せる)。</p>	<p>P245</p>

	<p>外壁は白漆喰塗籠、本瓦葺の城郭風の建物（八つ棟造）。</p> <p>棟札、鬼瓦銘から、慶安3年（1650年）の建築か。今井では他に称念寺本堂、豊田家住宅など、全部で9件の建造物が国重文。</p> <p>飛鳥・藤原地域周辺の中・近世寺院建築では称念寺以外、瑞花院本堂、正蓮寺大日堂、久米寺多宝塔（以上橿原市）が国重文。長谷寺本堂（桜井市）が国宝。</p>	P245
<p>岡寺仁王門、書院 明日香村岡 国重文</p>	<p>仁王門は、入母屋造、本瓦葺の三間一戸（正面の柱間が3つあり、中央の1柱間が戸口）の楼門（やぐらのある二階造りの門）で、正面の両脇に金剛力士像（仁王像）を安置、四隅の上に阿吽の獅子と龍、虎を据えた珍しい形態。慶長17年の再建ながら、昭和の解体修理で、ほとんどの部材に古材が使われていたことが判明。文明4年（1472）の大風で転倒し、再建できなかった三重塔の部材を転用したとも（現在の三重塔は、昭和の再建）。</p> <p>書院は、切妻造、柿葺（＝木の薄板で葺く。一部は銅板葺）で東西両面に庇。</p> <p>主室に床、棚、書院（床の間の横の座敷飾り）を備え、鉤の手状（L字型）に四室を並べた本格的な構成（次の間、中の間、口の間と三室が直線に並び、書院が奥に配置されている）。建築年代は安土桃山～江戸時代初期か。</p>	P246
<p>称念寺本堂 橿原市今井町 国重文</p>	<p>大和五ヶ所御坊の1つ「今井御坊」と呼ばれた浄土真宗本願寺派の寺で、寺内町今井の形成・発展を支えた拠点寺院。本堂は大規模真宗寺院の標準的平面形態を有する。本堂建物は大きな入母屋造本瓦葺で、令和4年、屋根の修復保存工事が完成。工事で肘木（荷重を分散させるため柱の上に設置する横架材）の裏面から寛永18年（1641）の墨書（今井大工金兵衛＝今西家住宅の棟木と同じ人物）が見つかり、今西家住宅とほぼ同時期の建築と判明。江戸時代中期と末期に、改造、大規模修理、意匠変更が行われた。お寺には太鼓楼、庫裡、客殿、対面所などもある。</p> <p>寺に伝わる古文書群（国重文）は、桃山～昭和時代の1134点で、宗門（宗派）史料としても、地域史料としても高い価値。中心は真宗の宗門に関わるもので、中近世移行期の今井郷惣中（有力者）宛の織田信長朱印状・明智光秀書状のほか、本山や末寺などとの間で授受された史料、土地・水利に関わる史料が豊富に存在。代々住持（住職）を務めた今井氏に関わる史料、特に摂津の豊臣家直轄地に関する今井兵部宛の豊臣秀吉朱印状や、紀州徳川家との関わりを示す史料は、僧侶と武士の両様の性格を持つ（武積兼帯）今井氏の身分をよく示す。</p> <p>二代目住持の今井兵部は、西本願寺13世の良如から、本山同様の法事の執行を認められている。今井氏は代々兵部と名乗り、武士と僧侶を兼ねていたが、延宝7年（1679）に武士を返上して釈門（僧侶）に帰した。</p>	P246
<p>瑞花院本堂 国重文</p>	<p>橿原市飯高町。もとは吉楽寺。嘉吉3年（1443年）の棟木銘がある。</p>	P247
<p>正蓮寺大日堂 橿原 市小綱町 国重文 （もと普賢寺）</p>	<p>文明10年（1478）の上棟札があり、竣工は文明17年とされる。康正2年（1456）の墨書もあり、完成までに約30年かかったか（応仁の乱の影響か）。</p>	P247

<p>くめでらたほうとう 久米寺多宝塔</p> <p>橿原市久米町 国重文</p>	<p>久米寺境内。焼失した塔に代わり、京都の仁和寺から移築された。建立は江戸時代初期か。頭貫（柱の上部を連結する横木）、木鼻（貫の端が外側に突出した部分）、須弥壇など、細部に禅宗様が表われる。</p> <p>屋根は厚い板を用いたとち葺（桁の板で屋根を葺く）。</p>	<p>P247</p>
<p>長谷寺本堂</p> <p>桜井市初瀬 国宝</p>	<p>真言宗豊山派の総本山で、西国三十三所観音霊場の第8番札所。本堂は、江戸幕府による大規模な造営で、近世初期の代表的な寺院本堂。内部は、正堂、礼堂、相の間。正面には舞台を張り出し、礼堂とともに懸造（＝崖造、舞台造）。本堂は国宝で、同時期に建てられた繋廊、鐘楼などは国重文。</p>	<p>P247</p>
<p>文化財とは</p>	<p>文化財は、文化財保護法により、①有形文化財②無形文化財③民俗文化財④記念物⑤文化的景観⑥伝統的建造物群。</p> <p>①～④は、重要文化財や史跡、名勝として、国が指定して、法に基づく保護の対象に。</p> <p>特に価値の高いものや重要なものは、国宝（有形文化財）、重要無形文化財、重要有形民俗文化財、重要無形民俗文化財、特別史跡、特別名勝、特別天然記念物として国が指定し、重点的な保護対象に。</p> <p>①～④は、都道府県や市区町村においても、条例に基づく指定が行われる。国や地方自治体の指定を受けていない上記の文化財のうち、その価値に鑑み保存・活用のための措置を講じるため、国が登録を行うものが、登録文化財。同様に都道府県や市区町村においても、条例に基づく地方登録文化財がある。</p> <p>⑤文化的景観⑥伝統的建造物群（伝建）は、都道府県や市区町村（伝建は市町村のみ）がそれぞれに定めたものの中から、特に重要・価値が高いと判断されるものが国により選定され、重要文化的景観、重要伝統的建造物群となる。</p> <p>埋蔵文化財や、文化財の保存技術も、保護の対象。</p> <p>飛鳥・藤原地域では、史跡指定が卓越し、特別史跡は2市1村で7つもある（宮跡が1、寺院跡が2、古墳が4＝藤原宮跡、山田寺跡、本薬師寺跡、石舞台古墳、キトラ古墳、高松塚古墳、文殊院西古墳）。</p>	<p>P248</p>



	<p>公宴詩は、長屋王時代（710～720年代）に集中。長屋王邸で開かれた新羅の使節団をもてなす宴では、官人たちが彼らに贈った漢詩が多く載る。</p> <p>懐風藻の傾向は、中国の初唐の漢詩に似る。王羲之（東晋の政治家、書家）の蘭亭集序は、8世紀初頭に日本に伝わり、古代文学に影響を及ぼした。</p>	P256
<p>日本靈異記 （日本国現報 善悪靈異記）</p>	<p>薬師寺の僧・景戒が著した平安時代前期の仏教説話集（仏力による因果譚の説話を集成）。弘仁年間（810～824）の完成。</p> <p>日本の仏教説話集としては最も早い。</p> <p>雄略～嵯峨天皇までの説話116条を上、中、下の3巻に分け、年代順に漢文で記述。今昔物語集などの説話文学の源流ともなった。</p>	P256
<p>藤氏家伝（家伝）</p>	<p>天平宝字4年頃に成立。上巻（大織冠伝＝鎌足、定恵、不比等の伝記＝藤原仲麻呂撰）と下巻（武智麻呂伝＝藤原武智麻呂の伝記＝僧延慶撰）。正史にない記述が多く、史料的価値が高い。ただし上巻の不比等伝は現存せず。</p>	P257
<p>2.万葉集で詠まれた聖地、聖樹など 聖なる山、川、木</p>	<p>万葉集には、飛鳥の山、川などの地形や植物を詠んだ歌が多くあり、これらは聖なるものへの視座や心性を伝える。</p> <p>聖なる山（大和三山、三輪山、二上山、忍坂山など）、聖なる川（飛鳥川＝明日香川、泊瀬川＝初瀬川など）、聖なる淵・井泉、聖なる樹木などを歌に詠み、</p> <p>壽ぎ、神秘性を賞賛して生命力の活性化、繁栄、永遠性などを祈った。</p> <p>宮都の選地に際しては、聖なる山や川などとの位置関係が重視され、前後左右の景観的なバランスも考慮された。</p>	P258
<p>聖地 （山、丘、森、原） 香具山</p>	<p>「香具山（香久山）」は天（あめの）香具山（天香久山）とも。畝傍山、耳成山とあわせ、大和三山の1つで、唯一「天の」と冠される。天上世界の山が2つに分かれて地上に落ち、もう1つの山は伊予国の天山（愛媛県松山市）とされる（伊予国風土記、大和国風土記逸文）。万葉集で、舒明天皇は香具山に登り、国見をした（土地を治めている王が、春先に小高い山に登って国土を賛美）。</p> <p>大和には群山あれどとりよろふ天の香具山登り立ち国見をすれば国原は煙立ち立つ海原はかまめ立ち立つうまし国そあきづしま大和の国は（巻① ※P140）</p> <p>※末尾に補記したページは、当会著『奈良万葉の旅百首』（京阪奈情報教育出版）の該当ページです。持統天皇は次の歌で、衣替えの夏への季節の推移を実感。春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山（巻①28 P144）</p>	P259
<p>三輪山</p>	<p>「三輪山」は、秀麗な山容（整った円錐形）から、神の鎮座する神奈備山として信仰。額田王（豊かな才能を發揮した万葉初期の歌人）は、飛鳥から近江に遷都する際、三輪山に別れを告げる長歌（味酒三輪の山…）と反歌を詠んだ。</p> <p>三輪山を然も隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや（巻①18 P48）（雲だけでも心があってほしい、この気持ちを理解してほしい、隠してよいものか）</p> <p>大神大夫（大神氏の氏上＝氏の首長である大神高市麻呂）も、長門へ赴任する送別の宴（泊瀬川のほとり）で、三輪を詠んだ。「三諸の神の帯ばせる泊瀬川…」（巻⑨1770）。</p>	P260
		P261
		P262

	<p>かきのもとひとまる 柿本人麻呂は、亡き妻に対する挽歌で、三輪山と左右の龍王山と巻向山を「大鳥<small>おおとり</small></p>	P262
二上山	<p>の羽易<small>はがひ</small>の山（大鳥が羽を交わす山）」と詠んだ（飛鳥からは3つの山が重なり、空に飛び立ちそうな鳥の頭と両翼に見えた 巻②210）</p>	P263
<p>さいおう 齋王とは</p>	<p>「二上山（にじょうさん）」。<small>ふたがみやま</small>。大津皇子は謀反の嫌疑で処刑され、二上山に移葬された。二上山麓<small>とりたにくち</small>の鳥谷口古墳が、皇子の真の墓か。同母姉<small>おおくの</small>の大伯（大来） 皇女<small>ひめみこ</small>は、弟の死を哀傷した人々の心に響く歌を残した。 うつそみの人なる我<small>われ</small>や明日<small>あ</small>よりは二上山を弟<small>ふたがみやま</small>と我が見む（巻②165 P166） 齋王とは、天皇の御杖代<small>みつえしろ</small>（神や天皇の杖代わりとなって奉仕する者）として、 天照大神<small>あまてらすおおみかみ</small>に仕えるために選ばれた未婚の皇族。齋王は卜定<small>ぼくじょう</small>（亀の甲羅を使 った占い）で選ばれた。壬申の乱後、天武天皇が天照大神に感謝し、大伯<small>おおくの</small> （大来）皇女<small>ひめみこ</small>を伊勢に遣わしたのが最初。日本書紀によれば、崇神天皇は、天 照大神を王宮内に祀ってきた形を改め、皇女の豊鍬入姫命に命じ、大和の笠縫<small>かさぬい</small> 邑<small>むら</small>に祀らせた。垂仁天皇は、皇女の倭姫命<small>やまとひめのみこと</small>（伝説による初代齋王）に、大神 の祭祀を託した。倭姫は、大神を奉じて諸国を巡幸した末に、伊勢国にたどり 着いた。大神の託宣によって、大神を遷座したのが伊勢神宮のはじまり。 齋王は、飛鳥時代～鎌倉時代頃まで、約660年続いた。</p>	
甘樫丘	<p>万葉集に甘樫丘は出てこないが、丹比真人国人の歌の岡が推定地の1つ。 明日香川行き廻る岡の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ（巻⑧1557）</p>	P264
<p>いずものくにのみやつこの 出雲国造 かみよごと 神賀詞 えんぎしきのりと （延喜式祝詞）</p>	<p>神賀詞の中で、大穴持命<small>おおなもちのみこと</small>（大己貴命、大国主神）は、皇孫の大倭国の近き守り 神として、自らの和魂<small>にぎみたま</small>（柔和な徳を備えた神霊）を大御輪の神奈備<small>おおみわ</small>（大神神社） に、阿遲須伎高孫根命を葛木の鴨の神奈備<small>たかかも</small>（高鴨神社）に、事代主命<small>ことしろぬしのみこと</small>（事代 主神）を宇奈堤<small>うなて</small>（橿原市雲梯町）に、賀夜奈流美命を飛鳥の神奈備<small>かやなるみのみこと</small>（ミハ山 または岡寺山など）に鎮座させ、自らは杵築宮<small>きつきのみや</small>に籠もったとある。 フグリ山（明日香村祝戸）の尾根続きの山（祝戸公園東展望所付近、飛鳥宮跡 の真南）がミハ山。この山頂<small>いわくら</small>に磐座群があり、飛鳥の神奈備山か。フグリ山と その南東にあるマラ石は一对で、男性器を成す。 岡寺山（岡山）は岡寺の背後、飛鳥宮の真東にあり、飛鳥の神奈備山とする説 がある。岡寺はこの山の中腹で、龍蓋池の水源地。岡寺山の頂上～藤本山は、 中世の遺構（多武峰城塞跡岡道地区）が残る。 高さ約110m。柿本人麻呂の歌で知られる。天皇の威厳を最大限に強調。</p>	P265
<p>雷丘 みなぶちやま 南淵山</p>	<p>大君は神にしいませば天雲<small>あまくも</small>の雷<small>いかづち</small>の上に瘧<small>いほ</small>りせるかも（巻③235 P108） 明日香村稲渕の東方の山。明日香村祝戸（飛鳥川と冬野川が合流）は神仙境・吉野 への門戸にあたる禊の聖地であり、南淵山を飛鳥の神奈備山とする説がある。</p>	P266

<p>(明日香村稲渚・阪田)</p>	<p>(飛鳥川源流の畔^{ほとり}にある。) 柿本人麻呂の歌で知られる。「御食向かふ」は枕詞。</p> <p>御食向かふ南淵山の巖^{いはほ}には降りしはだれか消え残りたる (巻⑩1709 P124)</p>	<p>P267</p>
<p>忍坂山 (外鎌山)</p>	<p>三輪山と、初瀬 (泊瀬) 川を挟んで対峙。山の西南には、鏡女王^{かがみのおおきみ}の墓。</p> <p>秋山の木の下隠り行く水の我こそ益さめ思ほすよりは (巻②92 P26)</p> <p>上記は、中大兄皇子が贈った歌に、鏡女王^{かがみのおおきみ}が応じた歌。鏡女王は、舒明天皇^{じよめい}と血縁関係のある人物。中臣鎌足の正室で、山階寺^{やましなでら}を建立とも (興福寺縁起)。</p>	<p>P268</p>
<p>泣沢 (哭澤) の森 (畝尾都多本神社)</p>	<p>祭神は哭澤女神 (伊弉冉尊^{いざなみのみこと}が火の神を生み、火傷を負って亡くなったとき、夫の伊弉諾尊^{いざなみのみこと}の涙から生まれた神)。哭礼 (別れの言葉を大声で泣き叫ぶ葬送儀礼) の起源。本殿はなく、空井戸^{から}が御神体。水の神、延命の神として信仰を集める。境内は森で、北が一段低い。古代の埴安池^{はにやすのいけ}の一部または水源地か。万葉集に歌が載る。歌の作者は、柿本人麻呂または檜隈女王。</p> <p>泣沢の神社に神酒据ゑ祈れども我が大君は高日知らしぬ (巻②202 P152)</p>	<p>P269</p>
<p>真神原</p>	<p>真神とは、ニホンオオカミ。オオカミは聖獣として崇拝された。柿本人麻呂は「言はまくもあやに恐き明日香の真神の原に…」 (巻②199) と詠んだ。万葉集には「大口の真神の原」という用例で2首が載る (「大口の」は枕詞)。1つは長歌で「…大口の真神の原ゆ思ひつつ…」 (巻⑬3268 作者不詳)。もう1首は大口の真神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに (巻⑧1636 P110)</p> <p>上記は舍人娘子^{とねりのおとめ}による雪の歌。</p>	<p>P270</p>
<p>真弓の岡、 佐田の岡辺</p>	<p>草壁皇子 (日並皇子^{ひなめしのみこ}) は没後、真弓の岡に葬られた。万葉集には、人麻呂が草壁に捧げた挽歌と、皇子の舍人 (護衛を務める従者) の23首の挽歌群が載る。人麻呂の長歌は「…つれもなき真弓の岡に宮柱太敷きいまし…」 (巻②167)。</p> <p>舍人たちの哀傷歌では、真弓の岡 (皇子の墓。東明神古墳か) が2首、佐太 (佐田) の岡辺 (高取町佐田。舍人たちが奉仕するところ) が5首。</p> <p>朝日照る佐田の岡辺に群れ居つつ我が泣く涙やむ時もなし (巻②177 作者不詳)</p> <p>とぐら立て飼ひし雁の子巢立ちなば真弓の岡に飛び帰り来ね (巻②182 作者不詳)</p>	<p>P271</p>
<p>柿本人麻呂の挽歌</p>	<p>殯^{もがり}とは、人が死んでから埋葬まで、遺体を殯宮^{ひんきゆう} (あらかのみや、もがりのみや) や喪屋^{もや}に安置する期間のこと。人麻呂の殯宮挽歌は、特に有名。</p> <p>人麻呂の挽歌には、草壁皇子挽歌、高市皇子挽歌、明日香皇女挽歌、川島皇子挽歌、妻の死を悼んだ泣血^{きゆうけつ}哀働^{あいどう}歌、自らの死を詠んだ臨死^{りんし}自傷^{じじゆう}歌など。</p> <p>人麻呂 (日本で最初の職業的詩人) の歌人人生は、持統朝と重なる。宮廷に関わる長歌形式の儀礼歌が多い。万葉集で最長の長歌は人麻呂の高市皇子挽歌。人麻呂は文選^{もんぜん}などの漢詩文からも作歌の発想を得ている。人麻呂は、日本神話から続く歌謡の伝統と中国漢詩文の影響を統合した。</p>	<p>P272</p>

<p>やつりやま 矢釣山 (八釣山)</p> <p>いまきのたに 今城谷 (場所=不詳)</p>	<p>人麻呂が降る雪にこと寄せて、新田部皇子（邸宅は矢釣山の麓）を賛美した歌。 やすみししわが^{おおきみ}大君 高照らす日の皇子^{みこ}しきいます^{おおとの}大殿の上に ひさかたの あまつた 天伝ひ来る 雪じもの 行き通ひつ つ いや常世^{とこよ}まで (巻③261) 上記の反歌として人麻呂が詠んだ歌。矢釣山は、明日香村八釣の山のこと。 矢釣山 木立も見えず降りまがふ雪のさわける朝^{あしたの} 樂しも (巻③262)</p> <p>日本書紀によると、斉明天皇の孫の建^{たけるのみこ}王が亡くなったとき、今城谷の上に あらきのみや 殯宮^{をむね}を建てて、王を安置した。その時に斉明天皇が詠んだ歌。 いまき^{をむね} 今城^{うへ}なる小丘^{しる}が上に雲だにも著しく立たば何か歎かむ (日本書紀 116) (雲が立ってくれたら、それを王の霊だと眺めて心が慰められるのに。) 斉明天皇は、自分の死後は必ず建王と合葬するよう命じた(初葬は牽牛子塚古墳か)。</p>	<p>P273</p> <p>P274</p>
<p>聖地 (川、橋、池) 飛鳥川</p> <p>飛鳥川の いわし 石橋 (飛び石)、 うちし 打橋 (板橋)</p> <p>ふゆの ほんかわ 冬野川 (細川)</p> <p>ひのくまがわ 檜隈川 (高取川)</p> <p>はつせ 泊瀬川 (初瀬川)</p>	<p>万葉集では明日香川。この川を暮らしの一部としてとらえていた。 山部赤人の長歌と反歌 (巻③324~325) は、とりわけ名歌とされる。 明日香川^{かわよど} 淀^{よど}さらず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに (巻③325 P128) (霧のように消えてしまうような恋とは違うのだ。) 玉藻は、在来種のエビモ。 明日香川^{せせ} 瀬々に玉藻は生ひたれど しがらみ (堰) あれば なびきあはなくに (巻⑦1380 作者不詳) (堰があるので、なびき寄ることができずにいる。) あすかのひめみこ 明日香皇女 (天智天皇の皇女、^{おきかべのみこ}忍壁皇子の妃) の殯宮^{ひんきゆう}の時、柿本人麻呂が 長歌1首と反歌2首を作った。 飛ぶ鳥の明日香の川の上^{かみ}つ瀬に石橋^せ渡し下つ瀬に打橋^{うちし}渡す石橋に生ひなびける玉藻もぞ絶ゆれば生ふる打橋に生ひををれる川藻もぞ枯るれば生ゆる… (巻②196) (玉藻は切れればまた生えてくる、川藻も枯れればまた生えてくる。) 明日香川しがらみ^せ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし (巻②197) (堰を作って止めたら、流るる水も緩やかになるだろうに。) 明日香川明日も渡らむ石橋の遠き心は思ほえぬかも (巻⑩2701 作者不詳 P126) (飛び石が間を隔てるように、間遠な心を抱くことなどはない。) 稻刈に石橋があり傍らに歌碑。 傾斜が急な谷間を流れ、明日香村祝戸で飛鳥川に注ぐ。ふさ手折り多武の山霧 繁みかも細川の瀬に波の騒げる (巻⑨1704 柿本人麻呂歌集 P120) (細川の瀬に波音が激しく立っている。) 「ふさ手折り」は枕詞。多武の山は多武峰。 みなぶち ほんかわやま せせ 南淵の細川山に立つ檀^{まゆみ} 弓束^{ゆづか}巻くまで人に知らえじ (巻⑦1330 作者不詳) (マユミの木が成長するまで、この木を人に知られたくない。木=女性) 飛鳥駅前、国道169号沿いを北行する高取川の古称が檜隈川、または駅の北で 東から高取川に流れ込む川か。さ^{ひのくま}檜隈 檜隈川の瀬を早み 君が手取らば言寄せ むかも (巻⑦1109 作者不詳 P122) (君の手を取れば、噂になるだろうか。) 笠置山地に源を発し、三輪山の麓を巡って流れる川。三輪山の南麓では、三輪川とも。泊瀬川沿いの道は、豊泊瀬路 (伊勢への要路) と呼ばれた。泊瀬川 流るるみをの瀬を速み めで越す波の音の清^{きよ}けく (巻⑦1108 作者不詳) (水流が速いので、波の音が清らかに聞こえる。) みを (水脈) は深くなっているところ、めで (井堤) は水を引くために川の流れをせき止めたもの。</p>	<p>P274</p> <p>P275</p> <p>P276</p> <p>P277</p> <p>P278</p>

<p>いわれ 磐余池（東池尻・池之内遺跡か）</p> <p>しまのみや まがり 島宮の勾の池、</p> <p>かみ 上の池</p> <p>（明日香村 しまのしょう 島庄）</p> <p>はにやすのいけ 埴安池</p> <p>つるぎいけ 剣池（石川池）</p> <p>みみなしいけ 耳成池</p> <p>（耳成山の西側）</p>	<p>人言を繁み言痛み己が世に いまだ渡らぬ朝川渡る（巻②116 但馬皇女）（人の噂が煩わしいので、渡ったことのない冷たい朝の川を渡る。）但馬皇女（異母兄の高市皇子と同居）が、同じく異母兄の穂積皇子に恋心を抱いた。</p> <p>磐余池は、大津皇子の宮の付近にあったとされる池。自宅の詠語田宮で謹慎処分とされ、自死。天武天皇没後わずか1ヵ月。次の歌は死に臨んだ大津が磐余池の堤で涙を流して作ったという辞世歌（大津の死を悼んだ他者の作とも）。</p> <p>ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ（巻③416 P138）</p> <p>島宮は、もとは蘇我馬子の邸宅で、のち草壁皇子の宮殿となった。柿本人麻呂は、勾の池（護岸の湾曲した池）の放ち鳥（放し飼いされている鳥）を詠んだ。</p> <p>島の宮勾の池の放ち鳥 人目に恋ひて池に潜かず（巻②170 P118）</p> <p>（人恋しい様子で、池に潜ろうともしない。）草壁の舎人もこんな歌を詠んだ。</p> <p>島の宮 上の池なる放ち鳥 荒びな行きそ君いまさずとも（巻②172 作者不詳）</p> <p>（心を荒まさないでおくれ、皇子がおられなくなっても。）</p> <p>藤原宮と香具山の間にあったか。古事記では、香具山の埴土（粘土）を取って</p> <p>やそのひらか 八十平瓮（多くの平たい器）を作ったので、その場所を埴安と言うとある。</p> <p>軽の池は、剣池に近い軽の地（南側）にあった池か。紀皇女（天武天皇の娘、弓削皇子と恋愛関係にあったか）が独り寝の寂しさを詠んだ。</p> <p>軽の池の浦廻行き廻る鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに（巻③390 P158）</p> <p>耳成山にはクチナシの木が生い茂っていたので別名、梶子山。こんな悲恋伝説が残る。昔、鬘児という美しい娘がいて、3人の男性から求愛されたが心を決められず、耳成池に身を投げた。3人はそれぞれ歌を詠んだが、そのうちの1首。</p> <p>耳成の池し恨めし我妹子が 来つつ潜かば水は涸れなむ（巻⑩3788 作者不詳）</p> <p>（愛おしい娘が水に沈んだら、水が涸れてくれれば良かったのに。）</p>	<p>P279</p> <p>P280</p> <p>P281</p> <p>P282</p>
<p>清らかな水に棲む動物</p> <p>チドリ（千鳥）</p> <p>カジカガエル（河鹿）</p> <p>ホタル（蛍）</p>	<p>長屋王の歌にチドリが登場。藤原京への遷都に伴い、主をなくした飛鳥の邸宅は寂れ、チドリが再び立派な庭園になることを願い、鳴いている。</p> <p>わが背子が古家の里の明日香には千鳥鳴くなり妻待ち兼ねて（巻③268）</p> <p>カエル（蛙）は、万葉集では河津、河蝦。多くはカジカガエル。カジカガエルの雄の美しい鳴き声が鹿に似ていることから河鹿。今日もかも明日香の川の</p> <p>夕さらず河蝦鳴く瀬の清けかるらむ（巻③356 上古麿）</p> <p>次の歌は、厚見王が神奈備川（飛鳥川）を懐かしんで詠んだ歌。</p> <p>かはず鳴く神奈備川に影見えて今か咲くらむ山吹の花（巻⑧1435）</p> <p>ホタルは「飛鳥ホタル」として、村の天然記念物。次の長歌に、ほのかこの枕詞として登場。「…使の言へば蛍なすほのかに聞きて…」（巻⑬3344 作者不詳）</p> <p>（使者の知らせを、ホタルの光のようにぼんやりと聞いて。）</p> <p>なお万葉集では、肉、鹿猪、穴、鹿などはすべて「シシ」と読む。</p>	<p>P283</p> <p>P284</p> <p>P285</p> <p>P286</p>



4. 万葉集をはじめとする文学 (2)

項目名	解 説	頁
<p>聖なる木 (聖樹) ケヤキ</p> <p>(古称は「槻」 = 明日香村の木)</p>	<p>ケヤキは万葉集、古事記、日本書紀に多く登場。場所は王宮、寺院、衢 (巷) など。神聖な木は斎槻。用明天皇の宮は「磐余池辺双槻宮」、斉明天皇は多武峰に「両槻宮」を作った。双槻宮、両槻宮は、2本のケヤキの大木の下宮。</p> <p>飛鳥寺の西の一带は「飛鳥寺西の槻樹の広場」。乙巳の変のとき孝徳天皇、皇極前天皇、中大兄皇子らは、ここに群臣を集めて忠誠を誓わせた (樹下の誓約)。</p> <p>壬申の乱では、ここに留守司 (近江朝廷側の軍営) がおかれた。またここで、多禰 (種子島) 人、隼人、蝦夷らを饗応した。ケヤキは神が依りつく聖樹。</p>	<p>P286</p>
<p>ツバキ (椿)</p>	<p>天飛ぶや軽の社の斎ひ槻 幾代まであらむ隠り妻そも (巻②656 作者不詳)</p> <p>軽の社の神木であるケヤキによせて、人目を忍ぶ関係であることを歎く歌。ツバキは葉の常緑性と花の輝きにより、生命力のある呪的な植物と考えられ、その生命力を人間に取り込むため、魂振 (魂に活力を与える呪術) が行われた。</p>	<p>P287</p>
<p>アシビ、アセビ (馬酔木)</p>	<p>三諸は人の守る山 本辺にはあしび花咲き末辺には椿花咲く うらぐはし山そ泣く子守る山 (巻③3222) (麓にはアシビが咲き、頂上にはツバキが咲く。とても美しい山だ。泣く子どもをあやすように皆が大切にしている山だ。)</p> <p>ツバキを詠んだ歌には、「巨勢の春野」を詠んだ万葉歌が2首ある。持統太上天皇の「紀の牟婁の湯」 (南紀白浜温泉) への行幸にお供した者の歌。巨勢 (御所市古瀬) は紀路 (飛鳥～和歌山) の要所。土地の名を口にすることで土地の神を讃え、神の加護を得て旅の無事を祈った。古瀬には巨勢寺跡が残る、阿吽寺 (吉野口駅の近く。巨勢寺の末寺) には巻①54の歌碑。巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ偲はな巨勢の春野を (巻①54 坂門人足 P176) 河上のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は (巻①56 春日蔵首老)</p> <p>アシビは華やかな印象から、「栄ゆ」にかかる枕詞。ツバキ同様、呪的な植物。次の歌は、処刑された大津皇子が二上山に葬られたとき、大伯皇女が詠んだ歌。伊勢から飛鳥に帰るとき、この花を見て感傷哀咽して詠んだ歌か。早世した大津皇子への鎮魂の思いから、生命力豊かなアシビを手折ろうとしたとも。</p> <p>磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに (巻②166) (アシビを手折ろうとしても、それを見せるべき弟がいるわけではないのに。)</p>	<p>P288</p> <p>P289</p>

	<p>万葉びとは、アシビのほか、梅、萩、柳（青柳）、菖蒲（サトイモ科の多年草、古名は「あやめ草」）、桜、撫子^{なでしこ}、藤などをかざし（簪^{かんざし}）に用いた（風雅な振る舞いであり、また植物の生命力を取り入れようとする呪術的行為として）。アシビは、明治時代の万葉主義歌人たちの短歌雑誌の書名『馬酔木』にもなった。次の歌は、アシビの花を直接、袖に入れようと歌った。池水^{いけみづ}に影さへ</p> <p>見えて咲きにほふ 馬酔木の花を 袖に扱入れな（巻②5411 大伴家持）</p>	P290
モモ（桃、毛桃）	<p>モモの原産地は中国で、古い時代に日本に伝わった。中国ではモモが不老長寿をもたらす聖なる植物と見なされた。それは日本にも伝わり、邪気を払う呪的なモモの実や、瑞祥^{ずいしょう}（めでたいしるし）としてのモモが見える（古事記、日本書紀）。島庄遺跡（蘇我馬子の邸宅跡）の池や纏向遺跡から、大量のモモの種が出土（しかし万葉集ではモモを呪的なものとして詠んだ例はない）。次の歌は、モモの実がならいことを恋が成就しないことにたとえた。</p> <p>「愛^はしきやし」は、いとおいしい。はしきやし我家の毛桃^{わぎへ} 本繁^{ほんもも}み花のみ咲きて</p> <p>成らざらめやも（巻⑦1358 作者不詳）</p>	P291
カシ（榿、樞、白樺）	<p>万葉集の時代には、雄略天皇が天皇家の始祖と理解されていたため、雄略天皇の歌が万葉集の冒頭に載った。カシの木は、神が降臨する木として神聖視。古事記では天皇は、「御諸^{みもろ}の殿^{いづかし}白樺^{かし}がもと白樺がもと ゆゆしきかも白樺原^{かしはら}童女^{おとめ}」という歌を詠んだ（御諸の杜の神聖で近づきたいカシの木の下。そのカシの木の下が忌み憚られるように、近寄りがたいことだ。白樺原の乙女よ）。</p>	P292
ははか かにわぎくら 波波迦（朱 桜、ウワミズザクラ）	<p>波波迦は、古代の太占^{ふとまに}（鹿占）と呼ばれる占いに用いられた。雄鹿の肩甲骨を抜き取り、波波迦の木の皮を炭にしたもので焼き、ひび割れの形で吉兆を占った。波波迦の木は、天香山神社の境内にある。</p>	
タチバナ（橘＝明日香村の花）	<p>植物を詠んだ万葉歌では、萩、梅、松に次いで、4番目に多く橘が登場。田道間守^{たぢまもり}が持ち帰った不老不死の霊薬「非時香菓^{ときじくのかぐのこのみ}」が橘とされる。大伴家持は田道間守の伝説を歌い、橘の花と実を讃えた。橘寺（もと欽明天皇の別宮・橘の宮）は橘樹寺とも表記され、この地には橘が多く、林になっていたか。まっすぐに成長し、大木となるスギに、万葉びとは畏敬の念。万葉集には、特定の神社や神域で、神の依り代^{よししろ}（神が依りつく木）として詠まれる。</p> <p>神奈備^{みもろ}の三諸^{いほ}の山に斎ふ杉 思ひ過ぎめや苔むすまでに（巻⑬3228 作者不詳）</p> <p>婚礼の祝い歌。（神奈備の三諸の山に祀られた杉のように、あなたへの思いがなくなるなどあろうか。スギに苔が生えるほど長く経っても。）</p> <p>三輪山のスギは三輪^{かみすぎ}の神杉、三諸の神杉。大神神社境内には、巳の神杉（白蛇が棲むとされる）。蛇は大物主大神の化身とも。スギは桜井市の木にも制定。</p> <p>何時^{いつ}の間も神さびけるか香具山の梓杉^{ほこすぎ}が末に苔生すまでに（巻③259 鴨足人^{かものみきたるひと}）</p>	P293

<p>マツ (松)</p>	<p>いつのまにかこれほど神々しくなったことよ。香具山の榊を立てるように まっすぐそびえるスギの根元に、苔が生えるまでに。) P294</p> <p>神の依り代。繁栄や長寿を象徴 (=正月の門松)。有間皇子は蘇我赤兄 (娘は 中大兄皇子の妃) の謀略にはまり、斉明天皇がいる紀伊国牟婁の湯 (白浜温泉) に送られ、中大兄皇子に尋問され、藤白坂 (和歌山県海南市藤白) で絞首刑に。 途中の岩代 (和歌山県日高郡みなべ町) で、有間皇子が詠んだ歌。 岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらば またかへりみむ (巻②141) (岩代の松の枝を結んだ。幸い無事だったら、戻って来てこの松を見よう。) P295</p> <p>皇子の死後、長忌寸意吉麻呂、山上憶良が皇子への追悼歌を詠んだ。</p>
<p>3. 万葉集と飛鳥・藤原の宮都</p> <p>飛鳥宮と天武天皇 天武天皇を たたえる歌2首</p> <p>飛鳥宮に降る雪と 大原の里</p> <p>天武天皇への挽歌</p>	<p>壬申の乱で勝利した大海人皇子 (天武天皇) は、673年に飛鳥浄御原宮で即位。 同宮は藤原京に遷都するまでの21年間、天武・持統2代の宮となった。 P296</p> <p>天武天皇をたたえた歌2首。大君は神にしいませば赤駒の腹這ふ田居を都と 成しつ (巻⑩4260 大伴御行) (馬の脚が沈むような田んぼを都にされた。) P297</p> <p>大君は神にしいませば水鳥のすだく水沼を都と成しつ (巻⑩4261 作者不詳 P114) (水鳥が群がる沼を都にされた。) 歌が詠まれたのは、乱の80年後。</p> <p>天武天皇が藤原夫人 (鎌足の娘) に賜った歌 (天皇唯一の相聞歌) とその返 事。わが里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくはのち (巻②103 P112) P297</p> <p>(そなたの住む古びた里にはまだ雪が降らないだろう。) わが岡の霧に言ひて 降らしめし雪の摧けしそこに散りけむ (巻②104 同) (私が大原の里の岡の龍 神にお願いして降らせました。その雪のカケラがそちらに降ったのでしょうか。) P298</p> <p>天武天皇が崩御し、太后 (持統天皇) が詠んだ長歌2首。やすみしし我が大君 の夕されば見たまふらし… (巻②159) (わが大君が、夕方になるとご覧にな っているに違いない…。) 明日香の清御原の宮に天の下 知らしめししやすみし し我が大君… (巻②162) (飛鳥の浄御原の宮で天下をあまねくお治めになられ た我が大君…。) 「高照らす日の皇子」は天武・持統系の天皇・皇太子に使う。</p>
<p>ふるさと 古郷としての 飛鳥・藤原 (飛鳥=故郷)</p>	<p>律令国家発祥の地である飛鳥・藤原は、万葉集で常に回顧され讃えられるべき 特別の地。飛鳥から藤原京に遷都した後、志貴皇子が古京・飛鳥を詠んだ。 P299</p> <p>采女の袖吹きかへす明日香風 京を遠みいたづらに吹く (巻①51 P146) P300</p> <p>山部赤人は長歌「神岳の歌」で、自然の活力が満ちた飛鳥古京を讃えた。 …明日香の古き都は山高み川とほろし… (巻③324) (…飛鳥の旧都は、山が 高くそして川が雄大である…。) 個人的な懐旧の念ではなく、集団的感情を詠ん だ。聖武天皇即位後、奈良から吉野への行幸の途中で詠まれたか。</p> <p>次の歌は、元明天皇の御製。飛鳥と平城の中間の長屋原 (天理市) で詠んだ。 P301</p> <p>飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ (巻①78 P130) (あなたのいる辺りは、もう見えなくなってしまうのではないか。)</p> <p>次は大伴坂上郎女の歌。奈良の飛鳥 (元興寺一带) を見るのも良いとする。</p>

<p>藤原宮を詠んだ 万葉歌 役民（新都造宮の 作業員）の作れる歌</p>	<p>^{ふるさと}故郷の明日香はあれどあをによし奈良の明日香を見らくししも（巻⑥992）</p> <p>次は大伴旅人の望郷歌。平城京の病床にいて、飛鳥を詠んだ。しましくも行き て見てしか^{神奈備}の淵は浅せにて瀬にかなるらむ（巻⑥969）（しばらくの間で も行って見たいものだ。神奈備の飛鳥川の淵は浅くなり瀬になっているか。）</p> <p>次は藤原の古りにし里を詠んだ。平城遷都後、藤原の地にとどまった女性が詠 んだか。藤原の古りにし里の秋萩は咲きて散りにき君待ちかねて（巻⑩2289 作者未詳）（あなたの訪れを待ちわびて、萩の花は散ってしまいました。）</p> <p>藤原宮は天武・持統天皇の理想の都。万葉集には、藤原宮に関する歌が残る。</p> <p>1つは、「^{ふじわらのみや}藤原宮の役民の作りし歌」（巻①50 作者不詳）という長歌。1つは 「藤原宮の御井の歌」という長歌（巻①52 P148）。宮の井戸水を「常にあらめ ^み御井の^{すみず}清水」と、聖水の永遠性を歌う。反歌では、聖水を汲む乙女を歌う。</p> <p>^{ふじはら}藤原の大宮仕へ^{おのみやつか}生れつくや^あ娘子が^あともは^あともしろきかも（巻①53 作者不詳） （藤原の大宮に仕える者としてこの世に生まれついた乙女たちは羨ましい。）</p>	<p>P302</p> <p>P303</p> <p>P304</p>
<p>4. 前近代の文 学と飛鳥・藤原 古事記と飛鳥・藤原 の神話や伝説 神武東征神話</p> <p>石之日売の伝説</p> <p>赤猪子の伝説</p> <p>伊勢の国の三重の 嫁（采女）の伝説</p>	<p>古事記と日本書紀を比較すると、登場人物（神）がより個性的に描かれ、ドラ マチックな物語になっているのが古事記。古事記では、長男の^{いつせのみこと}五瀬命 （彦五瀬命）と四男の^{かむやまといはればこのみこと}神大和伊波礼毘古命（神日本磐余彦天皇）は、天下を 治めるべき良い場所を求めて東へ向かった。しかし兄の五瀬命は戦死。残った 一行は紀伊半島を南下して熊野から大和をめざす。しかし熊野で大きな熊が 現われ、一行は気絶。そこに高天原の命を受けた^{たかくらじ}高倉下がもたらした剣に よって目覚める。その後、八咫鳥の^{くに}先導や^{かみ}国つ神の服従により刃向かう者を 征討し、神大和伊波礼毘古命は^{かしはらのみや}畝傍の白橿原宮で即位し、初代神武天皇に。 古事記中巻はこの神話で始まる。日本書紀にもこの神話があり、内容は類似。</p> <p>^{いわたひめ}石之日売（＝磐之媛、仁徳天皇の^{おおきさき}大后）は嫉妬深い女性。天皇は石之日売が 紀伊（和歌山県）に出かけた留守中に、^{ゆたのおきらつめ}八田若郎女を宮中に呼ぶ。それを知っ た石之日売は宮中には戻らず、実家（大和の葛城）をめざして舟で進み、途中 の山代の^{つづきみや}筒木宮に留まる。天皇は臣下を派遣して歌を贈り、また自らも出向い て歌を交わすうちに打ち解け、大后は宮中に戻る。万葉集巻②冒頭の歌「君が 行き日長くなりぬ…」は、この時に大后が詠んだとされる。</p> <p>雄略天皇は、^{はつせ}泊瀬川のほとりで衣を洗う^{ひきたべの}引田部赤猪子という女性を見初め、結 婚を約束して^{はつせのあさくらのみや}初瀬朝倉宮へ帰る。しかし天皇は約束を忘れ、80年が過ぎた。 老女になった赤猪子は、天皇を訪ねる。2人は歌を交わすが、結婚は実現しな かった。赤猪子は天皇からたくさんの贈り物を賜わり、帰って行った。</p> <p>雄略天皇は^{はせ}長谷（泊瀬）の^{ももえつき}百枝槻（ケヤキの大木）の下で宴会をした。伊勢の 国の三重の^{うねべ}嫁（采女）が天皇に捧げる盃にケヤキの葉が落ちたことに気付かず、献上。 天皇は嫁の首を斬ろうとしたが嫁は宮殿と百枝槻を讃える歌を詠み許された。</p>	<p>P305</p> <p>P306</p>

<p>かいふうそう 懐風藻と皇子伝</p> <p>おおとものみこ 大友皇子伝</p> <p>大津皇子伝と 「臨終一絶」</p> <p>かわしまのみこ 川島皇子伝と「山齋」 (庭園、山荘)</p> <p>おおみわのたけちまる 大神高市麻呂の 「從駕応詔」 (侍宴応詔詩)</p>	<p>懐風藻の漢詩や万葉集の貴族の歌は、漢籍の教養をもとに詠まれた。</p> <p>大友皇子伝では、観相の話（唐の劉徳高^{りゅうとくこう}が容姿を激賞）や、不思議な夢（朱衣の老人から太陽を授かったが、奪い去られたという夢）を見て中臣（藤原）鎌足に相談した。鎌足は、ずる賢い者が隙を狙っているが、徳を身につければ憂うるに及びません、と答えた。また大友皇子伝の最後では、皇子が天命を授かりながら、とげ得なかったとする（＝懐風藻では、皇位の正当な継承者は、大友皇子であるとした）。</p> <p>大津皇子伝では、「容姿に優れ器量も大きい」「文武に秀で、性格は大らかで自由であり、偉ぶるところがない」と評する。また死に臨んで作ったとされる「臨終一絶」という漢詩が残されている（太陽は西に傾き、夕べの鼓聲^{こせい}に命の短いことを実感する。死への道には客も主人もなくただ一人、この夕、私は死出の旅路につく）。しかし、後の人の詩であるともされる。</p> <p>川島皇子は「心穏やかで度量があり、雅やか」とする。「山齋」という詩が残る（風や月は遊席に澄み渡り、マツやカツラの木のように、未長い友情を期す）。また懐風藻は、川島皇子が大津皇子の謀反を密告したとも伝える。密告があったことについては、否定的な意見もある。</p> <p>高市麻呂は「從駕応詔」という詩で、宮中の春宴のことを「マツの生える岩間から流れ落ちる滝が音を立てながら飛沫^{しぶき}をあげ、池の畔には竹藪に沿って咲き誇る花畑が一面に広がる」と＝老年に至って天皇從駕の列に加わることができた喜び。高市麻呂による持統天皇の伊勢行幸諫止事件（後述）からの復活。</p>	<p>P307</p> <p>P308</p> <p>P309</p>
<p>大神氏と三輪山 大神高市麻呂の 伊勢行幸諫止説話</p> <p>正史からみる 大神高市麻呂</p> <p>三輪山伝説と大神氏</p>	<p>日本霊異記に、大神高市麻呂の伊勢行幸諫止説話が載る。持統天皇は伊勢行幸の準備を命じた。中納言だった高市麻呂は、その時期は民の農事の妨げになるとして、天皇を諫め、職を辞してまで行幸を止めようとした。また高市麻呂は旱^{ひでり}の時、自分の田を犠牲にして民の田に水を分け与えた。すると龍神が高市麻呂の田にだけ雨を降らせた。説話の最後で、高市麻呂は忠臣と賞賛されている。大神高市麻呂は、日本書紀、続日本紀に何度か登場。日本書紀には、壬申の乱で大伴吹負^{おおとものふけい}の軍に入って活躍し、箸陵^{はしはか}（箸墓）と中ツ道の戦いで、近江軍の撃破に功績をあげた勇猛な将として、後には持統天皇の伊勢行幸にあたり、冠を脱ぎ捨てて諫めた行政官として記される。続日本紀では、高市麻呂は諫止事件の約10年後、從四位長門守、翌年には左京大夫に就任。從四位上として死去したが、壬申の乱の功により、從三位を贈られた。享年50。子孫は大神神社の社家となり、代々、同神社の神主を務めた。</p> <p>古事記の崇神記には三輪山の地名譚も。活玉依毘売^{いくたまよりひめ}（活玉依媛）という美しい娘のもとに、夜ごと男が通い、娘は身ごもる。娘は両親の言葉に従い、麻糸を通した針を男の着物の裾に刺した。翌朝、その糸をたどると、美和山の神社で途切れていて、男が美和山の大神^{おおものぬしのおおかみ}（倭大神物主櫛瓊瓊杵尊命）だったことが分かった。娘の糸巻きに残っていた麻糸が三卷^{みわ}（三勾）だったので、この地を三輪と呼ぶようになった。この話の前段では、崇神天皇は大神物主大神と、活玉依毘売の子である意富多多泥古命^{おおたたねこ}（太田田根子、大直禰子命）を神主として、三輪山に大神を祀ったとある。意富多多泥古命は三輪氏の祖とされ、大神神社</p>	<p>P309</p> <p>P310</p>

<p>いそのかみまる 石上麻呂の行幸</p> <p>じゅうが 従駕歌と人麻呂の 留京三首</p> <p>やまとととひもそひめのみこと 倭迹迹日百襲姫命と 箸墓伝説</p>	<p>の祭主になった大神氏（三輪氏）の出自譚ともなっている。大神氏は大三輪氏とも書かれ、大和国城上郡大神郷に拠を置く有力氏族だった。</p> <p>石上麻呂は、持統天皇の伊勢行幸に従駕し、歌を残す。我妹子をいざみの山を 高みかも大和の見えぬ国遠みかも（巻①44 P80）いざみの山は、高見山。 （柿本人麻呂はこの行幸には参加せず、飛鳥の都に残り、留京三首を詠む。）</p> <p>万葉集の石上麻呂の歌の左注には、①天皇が広瀬王たちを留守官に残して行幸する②大神高市麻呂が冠を投げ捨てて御前に捧げ、農繁期前の行幸はすべきではないと重ねて諫めた③天皇はその諫言に従わず、3月6日に行幸した、と記されている。</p> <p>日本書紀の崇神紀に、孝霊天皇の皇女（崇神の叔母）の倭迹迹日百襲姫命と箸墓伝説が載る。疫病が蔓延したとき、大物主大神を敬い祀れば太平になるとの神託を受けて祀ったが、効き目がない次に大物主大神は、わが子の意富多多泥古命（太田田根子、大直禰子命）を探り出して自分を祀らせよ、と夢に現われて語った。そのようにすると、疫病は終息し、天下は太平となった。倭迹迹日百襲姫命は大物主大神の妻となった。大神は夜だけ表われたので、姿を見せてほしいと姫が求めると、大神は櫛笥（櫛の箱）の中に小蛇となつて現われた。姫が驚き叫ぶと、大神は自分に恥を与えたとして、高く飛び去り、御諸山（三輪山）に登った。姫は悔いて、箸でホト（陰部）を突いて自殺。姫の墓は箸墓といい、夜は神が作り、昼は人が作ったと言われる。</p>	<p>P310</p> <p>P311</p>
<p>日本靈異記と飛鳥・飛鳥時代</p> <p>ちいさこべのすがる 小子部栖輕の説話</p> <p>聖徳太子にまつわる 説話 （片岡山伝説）</p> <p>僧・道昭の説話</p>	<p>日本靈異記の仏教説話は奈良時代が中心だが、飛鳥や飛鳥時代の説話も多い。説話には、年代、地名が詳記され、しかも実在の人物が登場する。</p> <p>小子部栖輕は、雄略天皇に「雷神を捕らえてこい」と命じられる。栖輕は豊浦寺と飯岡の間にある丘（雷丘）に落ちていた雷神を天皇に献上するが、天皇は光り輝く雷神に恐れをなし「落ちたところに返してこい」。数年後、栖輕が亡くなると天皇は忠義を讃え、この丘に栖輕の墓を作った。これに雷神が腹を立てて墓標を踏みつぶすが、その割れ目に足を取られ、抜けなくなる。天皇は雷神を逃がし、栖輕の墓と墓標を作り直した（日本書紀にも似た話がある）。</p> <p>太子は、道ばたで病んだ乞食に出会い、身につけた衣を与える。数日後に死んでいた乞食を手厚く葬った太子が、後日、人をやり墓の中を確かめてみると乞食の姿は消え失せていた。実は乞食は、仏菩薩の化身であった。この伝説は日本書紀、万葉集にもある。家ならば妹が手まかむ草まくら旅に臥やせるこの旅人あはれ（巻③415 聖徳太子 P208）聖武天皇は、太子の生まれ変わりとも。</p> <p>道昭は船連という氏族（姓）の出身で河内の人。仏法を唐に求め、玄奘三蔵の弟子となった。日本で初めて火葬された人。</p>	<p>P312</p> <p>P313</p>
<p>とうしかでん 藤氏家伝の逸話</p> <p>鎌足と中大兄皇子の 出会いの経緯</p>	<p>藤氏家伝の「大織冠伝」では、中大兄皇子と諫臣（主君の非をいさめる家臣）中臣（藤原）鎌足との強固な君臣関係の逸話や経緯が記される。</p> <p>鎌足は、蘇我蝦夷・入鹿父子の専横をただすため、軽皇子（のちの孝徳天皇）に近づく。</p>	<p>P313</p>

4. 万葉集をはじめとする文学 (3)

項目名	解説	頁
<p>5.近現代の文学、芸術作品と飛鳥・藤原</p> <p>文学に描かれた飛鳥・藤原 芸術作品に描かれた飛鳥・藤原</p>	<p>折口信夫（<small>おりぐちしのぶ しやくちようくう</small> 釈 迢 空。民俗学者、詩人）は唯一の小説・死者の書（中将姫と大津皇子が登場）を残す。なお折口の祖父は、飛鳥坐神社に勤務（同神社には折口の歌碑も）。</p> <p>松本清張は古代史研究にも心血を注ぎ、小説・<small>ひ みち</small>火の路を残す。飛鳥の石造物（酒船石、猿石、二面石、亀石など）を、ペルシャ人がもたらしたゾロアスター教（拜火教）の遺構とする。</p> <p>1. 絵画 <small>むかいじゆんきち</small> 向井 潤 吉は甘樞丘遠望で、伝統的な民家のある風景を描く。<small>ひらやまいくお</small> 平山郁夫は、<small>たかひか</small>高耀る藤原京の大殿で、金と緑を基調に藤原京を幻想的に描いた。<small>あんのみつまさ</small> 安野光雅は、明日香村の風景を独自の視点で切り取る。烏頭尾精（明日香村に生まれ育った日本画家）は、ライフワークとして日本の古都を描き続ける。奈良県立万葉文化館の万葉日本画は、154人の画家が万葉歌から1首ずつ選んで描く。</p> <p>2. 漫画 里中満智子は天上の虹（長編漫画）で、持統天皇（<small>さくらら</small> 讚良）を描く。</p> <p>3. 写真・映像 <small>いりえたいきち</small> 入江泰吉は、甘樞丘より望む飛鳥古京、飛鳥八釣の里、飛鳥古京などの作品を残す。<small>ほざんこういち</small> 保山耕一は、日々かわる奈良の美しい風景を撮り続ける映像作家で、映像詩・飛鳥などの作品が有名。</p>	<p>P318</p> <p>P319</p> <p>P320</p>
<p>6.近現代における万葉集</p> <p>近代以前の万葉学</p> <p>国民的歌集としての近代の万葉集</p> <p>アララギ派の歌人と万葉集</p>	<p>鎌倉時代、学問僧の<small>せんがく</small>仙覚は、將軍の命により万葉集を校訂し、また古くから点（漢字本文に付ける訓）の加えられてこなかった歌（無点歌）について新たに点を加え、万葉集注釈10巻を完成。江戸時代には国学者・<small>けいちゆう</small> 契 沖の万葉代匠記と同・<small>かものまぶち</small> 賀茂真淵の万葉考が刊行。以後、<small>たちばなの</small> 橘（加藤）<small>ちかげ</small> 千蔭の万葉集略解など真淵の弟子たちが、続々と注釈書を刊行。折口信夫も、本書を入手している。明治以降、万葉集は国民的歌集として確立し、一般読者を獲得。近代国家の文明化した国民という意識を高める必要から、国民の古典として認定された。①天皇から庶民に至るまで、幅広い層が素朴な感動を表現した、②貴族の歌も庶民の歌も、同一の民族的基板に基づいていた、という2つの側面で補い合った。アララギ派の進展とともに、万葉尊重の空気が歌壇に浸透。正岡子規は歌よみに与ふる書で、万葉の尊重と写真主義を唱えた。伊藤左千夫は子規没後、門下の機関誌として、写真と万葉調を基礎にした<small>あしび</small>馬酔木を創刊。のち機関誌はアララギへと継承され、大正期には一大勢力に。明治期には同派の長塚節、佐佐木信綱、折口信夫らが飛鳥に足を運んだ。「万葉びと」は、折口の造語。大正末期、アララギ派の<small>しまきあかひこ</small>島本赤彦、中村憲吉が岡寺前の旅籠に泊まり、飛鳥を詠んだ。昭和に入ると、斎藤茂吉が万葉秀歌（上・下）を刊行し、ロングセラーに。土屋文明は飛鳥を何度も訪ね、戦後、万葉集私注（全20巻）を刊行。明治以降の歌人で飛鳥を訪れた回数が多いのは、折口と土屋。小谷稔著の『飛鳥にきた歌人』には、近代歌人と飛鳥の関わりがまとめられている。</p>	<p>P321</p> <p>P322</p>

<p>万葉集と軍国主義</p> <p>万葉集の防人の歌</p> <p>現代における万葉集</p> <p>牧野富太郎と万葉植物</p> <p>代表的な現代の万葉学者</p> <p>辰巳利文と万葉地理学</p> <p>伝統文化としての短歌と令和の時代</p>	<p>戦前から戦時下にかけて、忠君愛国の象徴として万葉集が美化された。防人の歌には、今日よりは顧みなくて大君の醜の御盾と出で立つ我は（巻④4373今奉部与會布）。「天皇を守る強い御盾となるために、私は旅立つのだ」。</p> <p>先の大戦中に愛唱された「海ゆかば」は、大伴家持の長歌から歌詞を採った。巻④には、九州北部の警備に徴集された防人の歌が収録。巻④は東国の人々の暮らしに密着した東歌だが、ここにも防人の歌が載る。多くは別離の悲しみ。戦後は、おおらかな歌やロマン風の歌など、万葉びとの息吹が感じられる歌が教材に。全国の自治体や社寺により、万葉植物を紹介する園地も整備。県内では万葉の森（香具山北東麓）や、万葉文化館（明日香村飛鳥）が整備。平成以降も万葉ファンが拡大。「万葉歌碑めぐり」「万葉歌人と出会う旅」などが企画され、また万葉集の英語訳も進む（＝万葉ブームの国際化）。</p> <p>牧野富太郎は、万葉植物に強い関心。牧野の遺志を継いで、牧野万葉植物図鑑が令和になって刊行された。</p> <p>犬養孝は各地の万葉遺跡の保存運動や、万葉集の普及に努め、「犬養節」には多くのファン。中西進は、万葉集の比較文学的研究で知られる。小学生に向けた「万葉みらい塾」、高校生に向けた「万葉青春塾」も開催。万葉文化館初代館長。辰巳利文は実地踏査を重んじる「万葉地理学」の草分けで、その功績は犬養孝らに引き継がれた。また末永雅雄らとともに「飛鳥古京を守る会」をおこし、「明日香村特別措置法」の制定につなげた。</p> <p>「令和」の元号で、万葉集がブームに。その後のコロナ禍で行動が制約されるが、新型コロナ定額給付金を活用して『愛するよりも愛されたい：令和言葉・奈良弁で訳した万葉集』（佐々木良）が出版されるなど、新しい展開も。</p>	<p>P323</p> <p>P324</p> <p>P325</p> <p>P326</p> <p>P327</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------

5. 民俗、伝承、文化（1）

<p>1. 飛鳥時代の</p> <p>芸能、伝承</p> <p>された芸能</p> <p>雅楽</p> <p>雅楽の発展</p>	<p>雅楽は、俗楽に対する「雅正の楽」（儒教に基づき、中国の宮廷祭祀で演奏された音楽。孔子の「礼楽思想」に基づく＝礼と楽を正しく行えば国が安泰）。</p> <p>雅楽の代表的な演目の「蘭陵王」は、中国の散楽（儀礼や祭祀のあとに行われる饗宴のための音楽。日本の行事に馴染むよう改変された）。一方で飛鳥時代には地方の隼人舞、久米舞、国栖舞なども演じられた。日本の雅楽は、中国や朝鮮から伝わった外来の音楽や舞と、神楽歌など由来の音楽・舞が融合。宮内庁では今も雅楽が引き継がれているが、中国では清朝崩壊により滅失。</p> <p>雅楽はさまざまに展開。①散楽は、奈良時代に中国から伝来。曲芸、軽業、ものまね、呪術、奇術など、大衆的な芸能。②それが日本古来の芸能と融合し、猿楽に発展。③猿楽とは別に、散楽と農村で行われていた楽芸が結びついて田楽が出現。④猿楽は田楽の影響を受けながら、現在の能・狂言に。⑤能（14世紀頃に大成）は、謡曲と囃子を伴奏にした歌舞劇で、人の感情を繊細に表現。⑥狂言はセリフによる喜劇で、庶民の生活にみられる笑いを描く。能楽は2008年、雅楽は2009年にユネスコのユネスコの無形文化遺産に。</p>	<p>P330</p> <p>P331</p>
------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------

<p>ぎがく くわがく 伎楽 (呉楽)</p>	<p>日本に初めて伝来した外来の音楽劇。伎楽とは、もとは古代チベットやインドの仮面劇で、西域から呉（中国南部）を経て伝わり、法会などで催された。</p> <p>日本書紀によると、百済の味摩之（呉で伎楽舞を習得）を桜井に住ませ、少年たちに教習させた。飛鳥時代に大陸から伝わり、川原寺、橘寺、法隆寺、四天王寺、太秦寺などに伎楽の一団が置かれ、天武朝には新羅の客らをもてなすため、川原寺の伎楽を筑紫に運んだ。伎楽面は、日本の仮面のルーツ。</p> <p>味摩之が伎楽を教習した場所は、明日香村豊浦（善信尼らが住持した桜井道場の推定地）または土舞台（桜井市谷＝大和名所図会に掲載）とされ、それぞれに、伎楽伝来の地頭章碑が立つ。雅楽寮（大宝元年設置）では、伎楽も教習。伎楽は寺院楽でもあり、国家儀礼にも利用。東大寺の大仏開眼会では雅楽、舞楽とともに奉納。伎楽はその後、雅楽などに圧倒されて衰退したが、多くの伎楽面や教訓抄（鎌倉期の雅楽書）が残り、伎楽による劇も復元。伎楽の伴奏の多くは雅楽に取り入れられ、後世の芸能への影響は大きい。</p>	<p>P332</p>
<p>飛鳥の石造物と伎楽面</p>	<p>須弥山石（石神遺跡で出土）は斉明朝に作られ、仏教において世界の中心にある山を象った。そこでは盂蘭盆会（お盆の行事で、祖霊を死後の苦惱世界から救済する仏事）が行われた。石人像（須弥山石とともに発見）の男女は、異国風の顔と衣服で、盃を持つ男は伎楽面の「酔胡王」をつけた姿か。仏教世界で、伎楽は外国からの客を迎えるときに演じられ、石人像は饗宴の場で伎楽が演じられたことを示すか。猿石（吉備姫王墓）は伎楽の演者か（それぞれの石像が役割をになってドラマを演じている）。女像の裏面は「迦楼羅」、山王権現像の表面は「崑崙」、もう1つは「獅子」、僧は「力士」、男の像の頭巾をかぶっているのは胡人の表現であり、「酔胡王」の伎楽面をつけた姿か。</p>	<p>P333</p>
<p>飛鳥・藤原地域を題材や舞台にした能や幸若舞曲</p>	<p>伎楽や散楽は、日本古来の芸と結びつき、能（猿楽）のルーツに。鎌倉後期には、寺社の法会や神事のときに、「翁猿楽」（呪術的な猿楽）を演じた猿楽の座（劇団）が形成され、猿楽座によって、南北朝時代に「能」が演じられるようになった。能楽の大和四座（金春、金剛、観世、宝生）のルーツは、観世座や宝生座の拠点だった結崎（川西町）、外山（桜井市）など、多武峰を1つの源流とする寺川や飛鳥川の流域。桜井市山田（山田寺跡の周辺）には、観阿弥の出身地といわれる山田猿楽座があったとされ、田原本町には、能とゆかりの深い補巖寺や秦楽寺がある。幸若舞は室町時代に生まれ、武将たちが愛好（信長の「人間五十年 下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり…」は幸若舞の「敦盛の舞」。「幸若」は、代表的な流派の名前で当初は歌舞を伴う。</p>	<p>P334</p>

<p>みつやま 三山 (能)</p> <p>飛鳥川 (能) (飛鳥川の畔で 再会する親子)</p> <p>くず 国栖 (能) (壬申の乱が モチーフ)</p>	<p>次第に、ごく簡単な舞とともに物語を語る「語り物」へ変化。江戸期には能楽とともに幕府の式楽とされたが、現在は福岡県みやま市だけに残る。飛鳥・藤原地域を題材とした能や幸若舞曲には、以下のようなものがある。</p> <p>大和三山の恋争い(万葉集)、桜児伝説、鬘児伝説がモチーフ。良忍上人(融通念仏宗開祖)は、耳成山麓で1人の女と出会う。1人の男性のことで争った2人の女性の確執を語って消える。実は彼女は争った2人のうちの桂子の霊。上人が申うと、愛を失って入水した桂子の霊、崇られて狂う桜子の霊が現われ、生前そのままに争う。しかし最後には上人の念仏により、恨みが晴れて成仏。都で母を見失った少年が、再会祈願のため、吉野へ参詣。帰路、飛鳥川を渡ろうとして、田植えをしていた女に「危ない」と止められる。「昨日は渡れたのに」という少年に、女は「飛鳥川の湊瀬が雨ですすぐ変わる」と諭す。女は子を探す身の上を語り舞を舞う。それで少年の母であることが分かり、2人で都へ帰る。</p>	<p>P334</p>
<p>いるか 入鹿 (幸若舞) (乙巳の変が モチーフ)</p> <p>たいしよっかん 大織冠 (幸若舞) (鎌足が宝珠を 取り戻す話)</p> <p>大和猿楽四座と 多武峰の八講猿楽</p>	<p>おおとものみこ 大友皇子に追われて吉野に逃げた大海人皇子が、国栖に住む老夫婦により助けられる。夜になると夫婦は消え、天女が現われて舞(「五節の舞」の起源)を舞う。その音楽に惹かれて蔵王権現が出現。蔵王権現は力強く威光を示し皇子(のちの天武天皇)が国土を改め、治めることになる将来の御代を寿ぐ。</p> <p>ちゅうぼうつ なかのおおえのみこ 暴虐な蘇我入鹿を中臣(藤原)鎌足が「鎌」で誅伐(中大兄皇子は登場しない)。鎌足の名が鎌(幼児のときに狐から鎌を与えられた)に由来し、その鎌で入鹿の首を斬ったという筋書き。</p> <p>大織冠(鎌足)は自分の美しい娘を唐の皇帝に嫁がせる。皇帝はお礼に宝珠を日本に届けようとするが、途中で竜に奪われる。それを聞いた鎌足は海女と契りを結び、男子を産む。鎌足は海女に素性を明かし、宝珠を取り戻すように頼む。海女は宝珠を取り戻すが、竜に襲われて絶命。しかし海女が自分の乳房に隠していた宝珠を取り戻し、無事、興福寺の本尊の眉間に収められた。</p> <p>猿楽は、足利将軍家や大社寺の庇護により、室町期に隆盛。大小の猿楽座のなかでも人気だったのが、大和猿楽四座。円満井座が金春流に、外山座が宝生流に、結崎座が観世流に、坂戸座が金剛流(のち喜多流)にと、それぞれ現在のシテ方流儀の礎に。結崎座からは観阿弥、世阿弥が登場し、猿楽を集大成。</p>	<p>P335</p>
<p>みょうらくじ 妙楽寺(多武峰、談山神社)への参勤は、大和猿楽四座の義務(世阿弥の『申楽談義』による)。結崎座では「近畿近辺にいるにもかかわらず、多武峰の催しに欠勤した者は、座を追放する」。多武峰では、維摩八講会(鎌足の命日10月16日を最終日として7日間講じた)に付随し、13、14日に神事として猿楽が演じられた(=八講猿楽)。大和猿楽座が務めた66番の猿楽は、演目「翁」の源流。八講猿楽では、本物の馬や甲冑を使う派手な演目もあり、大和四座はここで新作を上演するのが習わし。多武峰の猿楽は、「多武峯様」と呼ばれた。</p> <p>またらじんめん 摩多羅神面(翁面) (梅原猛との遭遇)</p>	<p>みょうらくじ 妙楽寺(多武峰、談山神社)への参勤は、大和猿楽四座の義務(世阿弥の『申楽談義』による)。結崎座では「近畿近辺にいるにもかかわらず、多武峰の催しに欠勤した者は、座を追放する」。多武峰では、維摩八講会(鎌足の命日10月16日を最終日として7日間講じた)に付随し、13、14日に神事として猿楽が演じられた(=八講猿楽)。大和猿楽座が務めた66番の猿楽は、演目「翁」の源流。八講猿楽では、本物の馬や甲冑を使う派手な演目もあり、大和四座はここで新作を上演するのが習わし。多武峰の猿楽は、「多武峯様」と呼ばれた。</p> <p>大和四座による多武峰への参勤は、16世紀半ばには廃絶。明治期の神仏分離で、妙楽寺が談山神社となったこともあり、多武峰と能楽の所縁はますます疎遠に。大和猿楽の三大義務(興福寺・修二会、春日大社・若宮祭、多武峰参勤)のなかで、多武峰はほとんど忘れられていた。しかし梅原猛が2010年、談山神社で摩多羅神面と出会い翌年、これを用いた能楽「翁」が奉納(観世清和)された。</p>	<p>P336</p>

<p>多武峰談山能と 談山能伝承会</p>	<p>これを機に「多武峰談山能」が開催。奉納が行われた旧常行堂は、仏教修行の場で、神仏分離前には、阿弥陀三尊像が安置。背後には後戸（悪魔調伏の秘法を行う）があり、摩多羅神面（大ぶりの白色の翁面）はここに祀られていた。その後、談山神社では、多武峰談山能（現代における能楽を見つめなおす）が旧常行堂で毎年奉納（能楽の聖地を顕彰する公演で、摩多羅神面を使った「翁」を上演）。2017年度からは、談山能伝承会主催による新6ヶ年計画が始動。</p> <p>「翁」（式三番）はストーリーがなく「能にして能にあらず」。翁が「天下太平 国土安穩」を祈る予祝の芸能で、儀礼的曲目。演者は精進潔斎して臨む。</p>	<p>P337</p>
<p>2.祭礼・民俗 行事 「お仮屋」の祭礼 (頭屋儀礼)</p> <p>男綱・女綱 成人の日、1月11日</p> <p>住吉の土(埴土) 取り神事 2月、11月</p> <p>おんだ祭 (飛鳥坐神社)</p> <p>文殊お会式 3月25、26日 盟神探湯神事 (甘檜坐神社)</p> <p>花会式(飛鳥寺) 4月8日</p>	<p>県内の氏神祭祀の多くは、宮座の構成員から順番で選ばれた頭屋（当家）を中心に行われる。頭屋の家の門口や庭に（竹、杉、檜などで）お仮屋を作って神霊を迎える「お仮屋の祭祀」が広く行われた。頭屋は氏社から神霊を家に迎えて祀り（頭屋は家の中でお籠もり）、祭りが終わればお仮屋は壊される。屋外で神霊を迎える場合は、神霊用のお仮屋のほか、植物を使って大型のお仮屋を作り、その中に頭屋が籠もった。祭りの際にお仮屋を作ることは全国的なものだが、県内では鎮守の森の杉や檜の葉を使うことが特徴。多くの集落では、お仮屋建ての前か祭礼の前に、吉野川や竜田川へ行き、禊ぎをしたり、小石を拾ってお仮屋に入れる。大和川の北側の集落では竜田川、南の集落は吉野川へ行く。</p> <p>稲渚（男綱、綱掛神事、成人の日）と栢森（女綱、勧請綱掛、1月11日。いづれも飛鳥川上流）では、綱掛神事が毎年行われる。男女の対だけでなく、神道と仏式により、行われる。子孫繁栄、五穀豊穰とともに、疫病や災厄を押し止めるため。稲渚では神式で、飛鳥坐神社の宮司が神事を行う。栢森では仏式で、竜福寺（栢森）の住職が読経などを行う。</p> <p>畝傍山山頂の土取場（畝火山口神社の旧境内地）に、大阪の住吉大社から、毎年、祈年祭と新嘗祭に埴土を取りに来る神事。昔は河俣神社（雲梯村）で装束を着替えたため、同神社は「装束の宮」。「馬つなぎ」（畝傍山中腹）から徒歩で山頂に登り、霊水（天の真名井）で手を清め、埴土を取って山を下りた。</p> <p>近年、土取の日は、住吉大社と畝火山口神社の間で決められる。飛鳥坐神社のお田植え祭・おんだ祭は、西日本三大奇祭の1つで、2月の第1日曜日に行われる。神事の前後には、天狗、お多福、翁、牛がささらで参拝者の尻を叩きまわり、厄払い。神楽殿の奉納神事では、牛が登場する田植えの所作、天狗が翁を仲人役に結婚式、夫婦和合の儀式など。御供撒きでは福の紙（神）が撒かれ、これを手に入れると子宝に恵まれる。稲の成長と豊穰、子孫繁栄、縁結び、成育安全を願う参拝者で賑わう。</p> <p>安倍文殊院で本尊・文殊菩薩を奉賛する同寺最大の法要。大般若経転読法会が行われ、本堂前で「智恵のお加持」の祈祷。本堂舞台では「智恵のお餅まき」。熱湯に手を入れて、火傷するかしないかで是非・正邪を判断する神明裁判。日本書紀の記載に基づき、4月第1日曜日、甘檜坐神社で行われ、寸劇で再現。</p> <p>釈迦の誕生日を祝う。仏生会、降誕会、灌仏会、浴仏会、龍華会、花祭とも。飛鳥寺では、誕生釈迦仏を本堂の前に置き、参拝者は読経の中で誕生仏に甘茶を注ぐ。本堂正面の扉が特別に開かれ、飛鳥大仏を無料で拝観できる。</p>	<p>P338 ~339</p> <p>P340</p> <p>P341</p>

<p>たいしえしき たちぼなでら 太子会式（橋寺）</p> <p>4月と10月の各22日の前にある日曜日</p> <p>けまり 蹴鞠まつり</p> <p>4月29日、11月3日</p>	<p>寺伝では橋寺は欽明天皇とその皇子（のちの用明天皇）の離宮（橋宮）があり、聖徳太子はここで生まれた。会式は太子の追善供養で春と秋の2回。当日は100種類の季節の食材を供える。食材を乗せた100個の三宝を経堂（仮の安置所）から、参列者が手渡しで太子殿玉殿まで運び、本尊の聖徳太子坐像に供える。</p> <p>鎌足と中大兄皇子が法興寺の蹴鞠会（<small>ほうこうじ</small>）で出会った故事にちなみ、談山神社で年2回開催。神事のあと鞠庭（<small>まりば</small>）へ移動し、8人が鹿革の鞠を右足だけで蹴り上げる。</p>	<p>P341</p>
<p>はにとり 埴採神事、火きり</p> <p>神事、火入神事</p> <p>5月1日、11月 第1金曜、土曜日</p>	<p>神話に基づき、令和元年から再現。埴採神事は、5月1日に天香山神社の宮司や臣下役の住民が2カ所の聖地に出向き、白檜（<small>しらかし</small>）の鋤と赤檜（<small>くわ</small>）で白埴（天香山神社）と赤埴（<small>うねおにいますたけはにやす</small>）を採取。11月に行う火入神事の前夜には、天平瓮（<small>あめのひらか</small>）（薄い小皿）を焼成するための火を採る「火きり神事」が、火きり杵（<small>ぎね</small>）を用いて、畝尾坐健土安神社で行われる。火入神事は翌日、天香山埴焼奉製会により開催され同社での祭典後、野焼き会場に移動して、前日採火した御神火を野窯に点火、焼き上がった天平瓮は榎原神宮に奉納。</p>	<p>P342</p>
<p>久米寺練供養 （久米レンゾ）</p> <p>5月3日</p> <p>デンソソ祭</p> <p>（お峯のデンソソ）</p> <p>7月28、29日</p>	<p>久米寺（榎原市久米町）で行われる。二十五菩薩来迎練供養会式とも。境内の護国道場から本堂（金堂）まで、約100mの来迎橋の上を25菩薩が練り歩く。</p> <p>畝火山口神社の夏祭り。中心はお峰山の水取り神事（吉野川の水が持つ意義を象徴的に示す）で、26日の朝、神職が吉野川の水を汲みに行く。吉野川畔の大淀町土田のエノキの巨樹の下（通称ケヤキウラ、ケヤキガフチ）で修祓式（<small>しゅぼつしき</small>）</p>	<p>P343</p>
<p>ホーランヤ</p> <p>8月15日</p>	<p>榎原市東坊城町の春日神社と八幡神社の両境内などで行われる災厄払いの行事（勇壮な火祭り）。地元の6つの地区が参加。各地区で大小の松明を作る（大きいものは長さ4m、直径2m、重さ500kg）。午後には春日神社から八幡神社へ、火のついた松明をかついで練り歩く。</p>	
<p>いのこ暴れまつり</p> <p>12月第1日曜</p>	<p>山口神社（桜井市高田）の山の神祭り。神社に捧げた物を奪い合う子ども祭りで、いのこの暴れまつり、いのこあらし、とも。集落中の15歳までの子どものいる家が輪番（<small>ろうばん</small>）で頭屋を営む。祭りは、集落の集荷場で行われる。当日は藤蔓で竹をくくった御仮屋を集荷場の外に作る。御仮屋には鋤、鋤、鎌、鋸、槌などのミニチュアを吊り、その上に神社の分霊を移した屋形を乗せ、赤飯、御神酒などを供える。御仮屋暴れが終わると、子どもたちがヌレワラを持って集まり、それで神棚の灯明を消し、どなり暴れる。行事が終わると、山口神社で、屋形を次の大頭屋に引き渡す。なおこの祭りに先立ち、大名持神社（吉野町妹山）に参り、吉野川から御白石（<small>おしらいし</small>）を持ち帰り、山口神社に奉納する。</p>	



5. 民俗、伝承、文化 (2)

項目名	解 説	頁
<p>夏越の祓、年越の祓</p> <p>秋の宮講祭礼</p>	<p>としごいのまつり にいなめきい おおほらえ 祈年祭、新嘗祭、大祓など飛鳥時代の朝廷の祭礼は、現代にも伝わる。</p> <p>全国の多くの神社で、師走の大祓は年越の祓、6月の大祓は夏越の祓。</p> <p>夏越の祓では、茅の輪くぐり（蘇民将来伝説）に由来）が設けられる。飛鳥坐神社では、鳥居下の大きな茅の輪をくぐる。近くの祓戸神社では、大祓詞を唱え穢れを人形（人の形の白紙）で祓い、穢れを移した人形を藁船で川に流す。</p> <p>明日香村では各大字（おおあざ）で秋の宮講祭礼（次第に形骸化）。於美阿志神社（檜前）や八王子神社（大根田）の秋の祭礼では、前日までに吉野川で身を浄め、小石を3つ持ち帰る。頭屋の家にお仮屋を設け、床の間に神饌供え、行列して宮に渡った。板蓋神社（川原）の秋祭りでは、小石は拾うが、昭和末期には飛鳥川へ行った。葛神社（阪田・祝戸）では、吉野川へ行き小石を3つ拾う、お仮屋を設ける、御湯を炊き、神饌を供え、神主がお祓いする、並んで葛神社を参る。阪田では、頭屋の家の床の間にかけた中臣（藤原）鎌足の掛軸の前に2本のスス竹と幣串を立て、鎌足像に神饌を供えた。</p>	<p>P344</p>
<p>季節の行事</p> <p>若水汲み</p> <p>とんど（左義長）</p> <p>ジئمサン レンゾ （練道、連座）</p> <p>大汝参り（香具山 周辺、耳成山口神社 の宮講を含む国中、 宇陀郡など）</p> <p>ハゲツショウ （半夏生、さなぶり）</p>	<p>元旦に飛鳥川へミカンや干し柿を入れた手桶を持ち水を汲む。水で戸主がまず口をすすぎ顔を洗い、家族も倣う。雑煮を炊くのにも用いた（今は廃れた）。</p> <p>旧正月の火祭りで、多くは1月14日。竹を三角錐に組み、正月飾りや古いお札などを各家から持ち寄って燃やし、無病息災を祈る。習字の紙を燃やし、字の上達も祈る。この火を持ち帰り、灯明にしたり小豆粥や善哉を炊く習わしも。橿原神宮の神武天皇祭の日（4月3日）。よもぎ餅を作り神棚と仏壇に供える。奈良盆地の農村の習わし。農繁期前の春の1日を農休みとする。社寺の会式（久米レンゾ、當麻レンゾなど）、または村落の社寺の祭礼にあわせて実施。本来は、田の神を迎える「田の神祭り」か。八十八夜レンゾ（苗代に種をまく八十八夜に行う）などがあり、飛鳥ではこの例が多い。</p> <p>吉野町で大名持神社（式内社）が妹山を背に鎮座。すぐ下には吉野川の深い淵（潮生淵＝毎年旧暦6月晦日、熊野の潮水が湧き出るとされていた）。ここで水垢離の禊ぎを行い、吉野川の石を拾い、水を汲んで持ち帰る。持ち帰った水は自分たちの村の川に流し、一同が禊ぎ。同趣旨の祭儀は畝火山口神社にもある。夏至から数えて11日目。「ハゲツショウサナブリ」とも。宮などに集落の皆が集まり、田植えが無事に終わったことを氏神に感謝し、豊穰を祈願。供物のお下がりなどで酒食をともにした。さなぶりは早苗振り、早苗饗、さ（田の神）昇りか。当日はさなぶり餅（半夏生餅＝全粒小麦を使った生菓子）を作って食べる。この頃、奥飛鳥では、葉の半分が白くなった多年草「ハンゲショウ」を見ることができる。</p>	<p>P345</p> <p>P346</p>

<p>ほっさく かざひ 八朔日待ち、風日 待ち</p> <p>秋祭り</p> <p>だんじり(地車、10月 櫃原市内で曳く、市 の有形民俗文化財) ノガミ(野神)祭 (ノガミ信仰)</p> <p>芋の名月(旧8/15)、 豆の名月(旧9/13)</p> <p>い こ 亥の子</p> <p>おおつごもり 大晦日(12/31)</p>	<p>日待ちとは、夜に村人が頭屋の家や宮に集まり、忌籠りをすること。八朔は旧 暦8月1日(新暦8月31日~9月1日)でその頃に行く。秋の豊作を祈願し、 弁当などを持ち寄り、酒食をともにする。</p> <p>みやこう みやざ 宮講、宮座の祭礼の翌日以降、村人は神社へ参拝。宮講などの祭礼は簡素化さ れたが、各大字で秋祭りが継続。かつてはだんじり、太鼓などが練り歩き。 神社の氏子らが松明や提灯で飾り立てただんじりを曳く。江戸中期、五穀豊穡、 家内安全を祈願して始まった。太鼓や鉦ではやす。櫃原市内には江戸末期から 明治に作られただんじりが10台(十市町7台、今井町2台、小綱町1台)。 疫病や悪霊の侵入を防ぐため、綱を掛ける神事、綱を蛇に見立てた信仰や行事 が行われる。道切り、辻切りとも呼ばれ、集落の出入り口に注連縄や勸請縄を 掛ける。明日香村の男綱、女綱と同様の民間信仰。蛇は水神の使いであり、水 神に対して豊作と子孫繁栄を祈願。櫃原市では小綱町、地黄町、上品寺町でノ ガミが祀られ、地黄町のノガミの祭りは「すすつけ祭」として知られる。</p> <p>芋の名月は、中秋の名月の日(旧暦8月15日)の月見行事。里芋の収穫期に芋 を供え、収穫を感謝。約1ヶ月後の旧暦9月13日にも月見し、豆を供える。</p> <p>旧暦10月(新暦12月)の亥の日に行われる。小豆をまぶした亥の子餅を作り、 無病息災を祈願して食べる。子どもたちは東ねた藁(ホーレン、デンボ)を持 ち、亥の子歌を歌いながら家の戸口や地面を叩いて回った。収穫を祝い、田の 神を送る意味があったが、今では継承している大字も少なくなった。</p> <p>大根、人参、里芋、蒟蒻などを具材とした権座(ゴンダ)という煮物を食べる。</p>	<p>P346</p>
<p>3.鎌足と入鹿 にまつわる 伝説・伝承</p> <p>中臣鎌足と蘇我入鹿</p> <p>鎌足誕生にまつわる 史跡と説話 鎌足生誕の地</p> <p>鎌足産湯の井戸 (大原神社= 明日香村小原)</p> <p>おおもふにん 大伴夫人の墓</p>	<p>鎌足は中大兄皇子とともに、入鹿を暗殺し(乙巳の変)、大化改新を遂行。</p> <p>鎌足は死の前日に、天智天皇となった皇子から「大織冠」(647~664年の間 に定められた最高位。史上、鎌足だけが授かる)と「藤原」の名を賜わる。の ち鎌足は神格化されて大明神に。入鹿はその専横ぶりが日本書紀に書かれ、逆 臣扱いに。日本書紀には、法興寺(飛鳥寺)西での皇子と鎌足の出会いが記さ れ、そのシーンは、15~16世紀の多武峯縁起絵巻などに描かれる。同絵巻に は皇子が刎ねた入鹿の首が、御簾に飛びつくさまも描かれる。今昔物語集では 鎌足が太刀で入鹿に一撃をくらわせ、そのあと皇子が首を打ち落としている。</p> <p>日本書紀や藤氏家伝によると、鎌足は大和国高市郡藤原(今の明日香村)に生 まれ、父は中臣御食子、母は大伴智仙娘。大鏡では、常陸国鹿島(茨城県 鹿嶋市)。多武峯縁起絵巻には、鎌足が生まれたとき、鎌をくわえた白い狐が 現われ、生まれた子の足元に鎌を置いたので、鎌子と名づけたとある。</p> <p>藤氏家伝によると、鎌足は藤原の第(藤原の邸宅)で生まれた。藤原の伝承 地の1つが明日香村小原で、ここに大原神社(鎌足誕生の候補地の1つ)があ る。神社の奥を流れる中の川のほとりに「藤原鎌足産湯の井戸」が残される。 小原には生誕伝承地とされる藤原寺があったとも。</p> <p>大原神社の近くに鬱蒼とした円墳のような盛り上がりがあり、それが大伴夫 人(鎌足の母)の墓とされる(古墳ではないという説もある)。</p>	<p>P348</p> <p>P349</p>

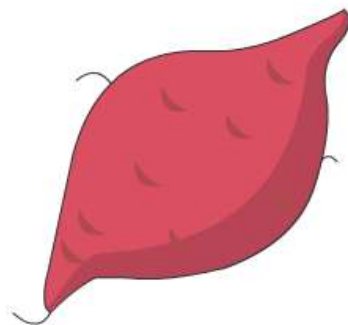
<p>白い狐と鎌</p>	<p>大伴夫人とは、藤氏家伝によると、大伴久比子の娘である^{ちせんのいらつめ}智仙娘の呼び名。智仙娘は、^{なかとみのみけこ}中臣御食子の妻となり、鎌足を生んだとされる。</p> <p>一説によると、鎌足の父は鹿島神宮に仕える神官で、若くして都に学び、帰郷後に鎌足が誕生。鎌足2歳のとき、白い狐がやってきて（または母の夢に出て）、鎌足の前に鎌を置いて去った。父はその後妻子を伴い上京。鎌足が入鹿を鎌で暗殺したという説（聖徳太子絵伝など）は、この白い狐と鎌の説話と結びついており、鎌足は^{しょうぐんじぞう}勝軍地蔵（中世の軍神）の化身ともされた。</p>	<p>P350</p>
<p>大化の改新にまつわる史跡と説話 法興寺の^{けまりえ}蹴鞠会 ^{かたら}談い山、^{だんじよ}談所ヶ森^{もり} (神社名の由来) ^{ごはれつざん}御破裂山鳴動と 神像破裂 鎌足公墓所と 御破裂山の鳴動</p>	<p>鎌足と中大兄皇子の出会い、法興寺（飛鳥寺）の蹴鞠会。場所は、飛鳥寺西方遺跡の辺り（飛鳥寺の西側～飛鳥川までの一帯）。蹴鞠の最中、皇子の靴が脱げ落ち、転がる。それを見た鎌足は素早く靴を拾って捧げ持ち、皇子に献じた。以来、2人は意気投合し、同志を募って入鹿暗殺の策謀を練り上げた。</p> <p>談山神社の^{ごんでん}権殿横から山道を登ると、談所ヶ森「御相談所」の碑。ここで2人は蘇我大臣家を滅ぼすため相談。山道をさらに登ると鎌足公墓所。御破裂山（多武峯の最高峰）の山頂に、鎌足公墓所（円墳状の塚）。国家の異変や藤原家の大事が起きると、鎌足を葬った山が大鳴動するとされた。710年間（898～1607年）に35回の鳴動。東から鳴動するときは朝廷に異変、南からするときは幕府に、北からすれば藤原一門に、西からすれば万民に、山の中央が鳴動すれば多武峯の寺に異変が起きると。多武峯の鳴動・怪異は12～13世紀前半がピークで、中世後半には激減。不動滝（桜井市の多武峯街道沿い）近くの石は真ん中から2つに割れている（御破裂山鳴動で割れたとされる）。多武峯聖霊院（談山神社の前身）には鎌足の木像（9世紀後半）がご神体として安置。この像は御破裂を起こす霊像として、畏怖（898～1614年の間に53回破裂）。鎌足像の破裂は、災いを知らせる予兆。周辺の村々では16世紀に入ると、多武峰曼荼羅などの鎌足像を祀る祭事が始まった。</p>	<p>P351</p>
<p>^{しょうりょういん}聖霊院の鎌足像 後世の鎌足信仰 多武峰曼荼羅</p>	<p>多武峰周辺では、神格化された鎌足の肖像画が描かれ、信仰された。なかでも朝服（官人の衣服）をつけた鎌足を中央に大きく描き、向かって左下に不比等（鎌足の次子）、右下に^{そうぎょう}僧形^{じょうえ}の定恵（長子）の3人を配した画像は、多武峰曼荼羅と通称され、礼拝（理想的な^{ほひつしや}補弼者としての聖徳太子信仰の影響か）。</p>	<p>P351</p>
<p>聖徳太子と鎌足</p>	<p>聖徳太子伝（中世に多く作られた）によって、太子とともに鎌足が語られた。太子伝の多くは、太子の生涯を描くとともに、中大兄と鎌足による蘇我入鹿の暗殺をフィナーレとした。理想的な功臣としての鎌足を太子のイメージに重ねるとともに、太子が求めた理想の政治が大化の改新で完成したとする。</p>	<p>P352</p>
<p>^{しょうぐんじぞう}勝軍地蔵信仰 八講祭、八講さん、 明神講</p>	<p>^{いくさがみ}勝軍地蔵は、^{いたらくいん}軍神（13世紀前半頃に誕生した戦う神仏）。^{たらくいん}多楽院（戦国期の多武峰四院の1つ）に同地蔵が安置され、勝軍地蔵信仰を広める拠点に。</p> <p>^{りょうじよほっしんのう}良助法親王の著書によると、同地蔵は大織冠（鎌足）の先祖の^{あまつこやねの}天津兒屋根^{みこと}命の化身、鎌足は同地蔵の^{すいじやく}垂迹（仮の姿）とされた。白い狐がもたらした鎌は、同地蔵の^{さんまやぎょう}三昧耶形（仏の証しとなる持ち物）とされた。勝軍地蔵信仰は、室町・戦国時代の武家勢力から近代国家による戦争まで影響を及ぼした。</p> <p>談山^{ごんげん}権現講（多武峰の法会）は周辺の村々に広がり、八講祭、明神講などと呼ばれ、現在に継承。談山神社周辺（桜井市、明日香村）では、鎌足をしのぶ八講祭、八講さん、明神講が行われた。</p>	<p>P352</p>

<p>薬師堂 (明日香村大字上)</p>	<p>明日香村では8つの大字で順番に祀っていたが、今は大字上だけが、毎年3月に鎌足公像を祀る。鎌足像礼拝儀礼で著名なのが、桜井市の8つの大字が毎年3月、交替で行う八講祭。なかでも今井谷では、樹齢約400年の八講桜のもとに巨大な多武峰曼荼羅が運び込まれ、談山神社宮司が、談山権現講式(鎌足の栄誉を讃える祭文)を読み上げていた(近年は、すべて談山神社の神廟拝所で行うようになった)。明神講は毎年1月14日、鎌足像を拜む儀礼。明日香村八鈞では、集会所に鎌足像を掲げ、村人が参集して般若心経を唱和し、講の修了後、とんどを行う。鎌足ゆかりの地では、このような儀礼が守り伝えられてきた。お堂の奥にある不動の滝の水で洗顔すると、眼病に効くとも。薬師如来坐像(平安中期のものか)を本尊とし、同時期の十一面観音像、四天王像、鎌足像を安置。伝承によると、定恵(鎌足の子)が多武峰山上、山腹、山下に建てた八講堂の1寺として、薬師如来と鎌足木像を奉祀した。</p> <p>『飛鳥古跡考』(1751年)には「長安寺後方山中の不動の滝の水で7月から8月まで洗顔すると、効験があった」。上地区には江戸中期、長安寺、教雲寺、薬師堂の3カ寺があったか。薬師堂は、長安寺の一堂か。</p>	<p>P352</p>
<p>藤原鎌足公古廟 (大織冠神社=茨木市)</p>	<p>鎌足の亡骸は、摂津国阿威山に葬られたあと、唐から帰国した定恵(長男)により、遺骨の一部が談山神社に改葬。阿威山墓は、將軍山1号墳(大阪府茨木市安威)に比定されていたが、昭和初期に発見された阿武山古墳(茨木市、高槻市)から、黒塗りの夾紵棺(布を重ね漆で固めた棺)、大織冠と思われる冠、玉枕(ガラス玉を編んで作った枕)などが出土し、今はこちらが有力。茨木市の大織冠神社の創建時期は不明だが、鳥居には1824年建立の銘。鎌足の命日には毎年、廟前で祭事が行われる(=鎌足の詣り墓)。また豊臣秀長によって多武峰の鎌足の木像(神霊)が遷座され、その後帰山した経緯のある大和郡山市にも、鎌足の分霊を祀った大織冠鎌足神社が残る。入鹿の首塚は、飛鳥寺境内から西門を抜けて約30m西、高さ148cmの花崗岩製の五輪塔。鎌倉後期~南北朝時代のものか。水輪は天地が逆。明治期の地籍図では、字「五輪」。石田茂作の著書には、飛鳥寺(安居院)の真西約90mのところ</p>	<p>P353</p>
<p>入鹿にまつわる伝承 入鹿の首塚</p>	<p>ろに「馬子塚」という五輪の石塔がある(入鹿の首塚は、かつては馬子塚と呼ばれていたか)。馬子塚と呼ばれる五輪塔は、本明寺(橿原市石川町)境内に残る。石川精舎跡(蘇我氏の根拠地)に建てられたか。越智氏の供養塔説もある。祭神は蘇我入鹿(入鹿を祀る神社は日本で唯一)。社伝によると、乙巳の変で斬られたとき、入鹿の首がここまで飛んできたとも(その伝説は地元にはない)。</p>	<p>P354</p>
<p>入鹿神社 (橿原市小綱町) 茂古の森(明日香村 上の気都和既神社) など</p>	<p>もうこの森、茂古の杜、気都和既の杜とも。乙巳の変のとき、入鹿の首が鎌足を追いかけてきたが、「もう追いかけては来まい」と鎌足が休んだといわれる。境内には、鎌足の腰掛け石も。気都和既神社では、細川の上流の大字(上、細川、尾曾)は宮講と祭典を行う。また入鹿の首は、宗我坐宗我都比古神社(橿原市曾我町)近く的首落橋辺りの家に落ちたとも。それでその家の屋号はオッタヤ、オッテヤ。かつては横を小川が流れ、首落橋もあったとか。ほかにも、伊勢国境の高見山まで飛んでいったという伝承も。</p>	<p>P355</p>

<p>4.伝説、伝承</p> <p>の地</p> <p>さまざまな伝説の地</p> <p>赤埴聖地（香具山の西北部）、白埴聖地（同西斜面）（榎原市南浦町、香具山）</p> <p>月の誕生石（榎原市南浦町、天香山神社）</p> <p>蛇つなぎ石（榎原市南浦町、香具山）</p> <p>月の輪石（榎原市東池尻町、御厨子神社）</p> <p>黒の駒（明日香村橋、橋寺）</p> <p>蓮華塚（同上）</p> <p>豊年橋（明日香村越、高取川に架かる橋）</p> <p>難波池（明日香村豊浦、向原寺）</p> <p>龍蓋池（明日香村岡、岡寺＝龍蓋寺）</p>	<p>香具山の槌は、呪力のあるものとして神聖視。日本書紀には、神武天皇が大和に入るとき、「香具山の埴土で多くの平瓮や巖瓮を作り神を祀れば、賊軍を平定できる」というお告げがあり、それに従ったところ天下を平定できたとある。</p> <p>また崇神天皇の時代、武埴安彦が、倭国の物実（象徴）とされた天香山の埴土を密かに妻に取らせ、天下を取ろうと謀反を企てたとされる。</p> <p>赤埴は山頂の斑れい岩が風化したもの。天香山神社境内には、赤埴聖地、国見台付近には白埴聖地の石標が立つ。畝尾坐健土安神社と香具山の間には、赤埴山という小丘があり、埴安伝承地の石碑が立つ。</p> <p>天香山神社の北東（境外）にある花崗岩の巨石。妊婦が腹帯をして横たわっているような形。円形の黒い斑点があり、これを月が使った産湯の跡、また小さな斑点を月の足跡として、この石から月が生まれたという言い伝えがある。</p> <p>香具山の北に張り出した尾根上の巨石で、古池の南。表面には何筋かの細い線状の文様。香具山は竜王山とも呼ばれ、山頂に高龍神（雨の龍王）を祀り、雨乞いの神事が行われた。竜王が大蛇に乗って現われ、その蛇を繋ぎ置いたか。</p> <p>御厨子神社の境内（御厨子山頂近く）にあり、幅の広い裂け目が中央に通り、真っ二つに分かれている。根裂石ともいわれ、同社の祭神の根裂神に関連するか。同社の古い社名は水尻神社、社のある杜は壇上の森と呼ばれていた。</p> <p>聖徳太子は飛鳥と斑鳩の間を、愛馬の黒の駒（黒駒）で通った。太子は献上された馬の中から、神馬（四脚が白い「甲斐の黒駒」）を見抜いたとされる。試乗するとこの馬は天高く飛び上がり、富士山を越え、各地を経て3日後に帰還した。橋寺の境内には、この馬を模した像が立つ（現在、3代目）。</p> <p>橋寺の寺伝では、聖徳太子が勝鬘経を講じると、天から蓮の花びらが落ちてきて積もった。それを埋めた方形の土壇は蓮華塚または畝割塚という。太子がこの広さで、田地1畝の基準を示したとも。また南の山に千の仏頭が現われて光明を放ち、太子の冠が三光（日、月、星）で輝いたとされ、三光石という奇岩はその言い伝えを残す。かつては同寺の東に太子が産湯を使った井戸も。</p> <p>寛政年間に大洪水があり、堤が決壊して板橋も流れた。越村の服部宗賢（高取藩の藩医）は流れない橋を架けたいと決心、貯えた金で石橋工事に取りかかる。榎原市見瀬の山で広い板石を見つけ、村人も運搬を手伝う。見事な橋が完成し、豊年が続いたことからこの名がついた。今の橋は、国道工事のため、少し移動。</p> <p>向原寺（豊浦寺跡）の南横。日本書紀の難波の堀江（物部尾輿が仏像を投げ込む）という伝承あり。後世には、推古天皇8年、信濃の本田善光がこの池の中で光を差している仏像を拾い上げ、安置して礼拝したのが信州善光寺の起源と。</p> <p>かつて悪龍がいて、急に大雨を降らせたり田畑を這い回り作物の根を枯らした。</p>	<p>P356</p> <p>P357</p> <p>P358</p> <p>P359</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------

<p>(龍蓋池は谷の水脈が表出する地点)</p> <p>瑠璃井 (明日香村岡、岡寺)</p> <p>龍ヶ谷の磐座と龍神社 (桜井市多武峰、談山神社)</p>	<p>この龍を義淵僧正が法力で池に閉じ込め、石で蓋をして改心させた。龍蓋池は岡寺本堂前にあり、水面上に突出した石(蓋石)が見える。この要石を揺らすと雨が降るとも。かつての池は本堂近くまであり、畔では燃灯供養も行われた。岡寺奥の院への参道の中ほど、今も清冽な水が湧く(今は飲めない)。大和名所図会では、弘法大師が龍神を祈ると湧き出たとする。道の突き当たりに稲荷明神社(如意稲荷社)、その右奥に弥勒の窟(石窟堂=弥勒菩薩坐像を安置)。</p>	<p>P359</p>
<p>関伽井屋の井戸(国重文。桜井市多武峰、談山神社)</p> <p>男淵(飛鳥川上流の滝壺。明日香村畑)</p> <p>榎龍神(明日香村平田)</p>	<p>井戸は「摩尼法井」と呼ばれ、定恵(鎌足の子)が法華経を講じたとき、龍王が出現したと伝える。談山神社東大門から続く参道沿いには国重文・摩尼輪塔がある(刻銘は「妙覚究竟摩尼輪」)。塔身の上部に、円盤形を刻み出す。</p> <p>竜神が住むと伝わる。昔ある男がここに毒を流し、鰻を獲った。それをさばいで料理し、全て売った。しかし帰宅すると父親が出刃包丁で割腹して死んでいた。男淵の鰻は竜神の使いなのでその後、男淵に手を出すことはなくなった。</p> <p>平田の高取川沿いに、大字の住民によって「榎龍神御神体碑」が祀られる。</p> <p>岡寺へ行く三叉路にはエノキの大木があったが、道路工事で伐られた。木の空洞には2匹の蛇が棲み、1匹は木とともに切られ、もう1匹は溝にうずくまる。以来、平田では災難や事故が続いた。昭和36年にかつての豊年橋の板石を2つに割り、この石碑を立てると、不幸事も起きなくなったという。</p>	<p>P360</p>
<p>鬼の俎、鬼の雪隠(明日香村野口、平田)</p> <p>石舞台(明日香村島庄、石舞台古墳)</p> <p>亀石(明日香村川原)</p> <p>くつな石(明日香村阪田)</p> <p>あさかじ地蔵と耳なほし地蔵(明日香村栗原、平田)</p>	<p>1つの古墳が2つの石造物に。辺りは霧ヶ峯と呼ばれ、霧が発生して旅人が迷いやすい。それが、鬼が旅人を料理して食べ、雪隠で用をたしたという伝説に。名前の由来として、「狐が女に化けて、古墳の上で舞を見せた」「旅芸人が来たが、舞台がなかったので、仕方なく大石を舞台に演じた」などの話が残る。奈良盆地が湖だった頃、湖をはさんだ当麻の地と川原の地で、水争い。結果、水は当麻のものとなったが、争いのため、湖の多くの亀が死んだ。あわれに思った村人は、亀の形を石に刻んで供養したとされ、それが亀石と。今、亀石は南西を向いているが、もし西(当麻)を向いたときは奈良盆地は洪水で泥沼になると。また川原寺の境界を示す標石ともされ、国の史跡(川原寺跡に包含)。</p> <p>龍神社(現在は葛神社に合祀)の御神体の大石。昔、ある石屋がこの石に目をつけ、切り出そうとノミを打ち込むと、割れ目から赤い血が流れ、血まみれの蛇が出現。驚いた石屋は逃げ帰ったが、その夜から高熱と腹痛に襲われ、死去。以来、村人は神の宿る石として祀った。</p> <p>栗原のあさかじ(朝鍛冶、朝風)地蔵は左肩が欠け、平田の耳なほし地蔵は両耳が欠けている。昔、2つの地蔵がケンカとなり、栗原の地蔵は鼻を削がれて肩を割られ、平田の地蔵は両耳を削がれた、という言い伝えがある。平田の地蔵は「自分は仏なので耳がなくても心で聞けるが、人間は耳がなければ難儀するだろう」と、耳の不自由な人を救っているといわれる。</p>	<p>P361</p>

<p>なみだ地蔵 (明日香村入谷、地蔵寺)</p> <p>コグリ石 (橿原市新賀町、市杵島神社)</p> <p>岡寺の厄除け参り (明日香村岡、岡寺)</p> <p>久米仙人伝説 (橿原市久米町、久米寺)</p> <p>いもあらい地蔵尊 (橿原市石川町、芋洗い、一口)</p>	<p>お供えの錐<small>きり</small>を患っている耳に当てて願をかけると治るとされ、またお礼に新しい錐を奉納する習わしも伝承され、平田の地蔵の堂内には、多くの錐が並ぶ。地蔵寺の地蔵は「なみだ地蔵」と呼ばれる。昔、旅人がこの地蔵を持ち出して連れ去ったところ、地蔵が「帰らせてくれ、帰らせてくれ」と言って泣いたので、もとの所に戻って来たと言われる。</p> <p>用途不明の石 (飛鳥時代、兵庫県高砂市の竜山石<small>たつやまいし</small>製)。この石と台石は、国家儀式で使われた幢幡<small>どうぼん</small> (旗) を立てた基礎石か。竜山石は高級石材なので相応しい。岡寺 (日本最初の厄除け霊場) では1~3月、本堂内で随時「やくよけ法要」。</p> <p>水鏡<small>みづかがみ</small> (鎌倉初期の歴史物語) 冒頭に「厄年の2月初午の日に岡寺へお参りすると良い」とあり、すでに定着していた。義淵僧正の悪龍封じ込めに関連か。</p> <p>久米仙人 (葛城の里で誕生) は龍門ヶ獄<small>りゅうもんがたけ</small> (吉野山麓) で神通飛行術を習得。その後百数十年、久米寺に住む。東大寺の大仏建立にあたり、仙人は大木大石を3日3夜のうちに境内へ飛ばし、聖武天皇は仙人に免田30町歩を与えた。</p> <p>天然痘<small>ほうそう</small> (疱瘡) のことを昔は「いも」。集落の入口には、疱瘡が入って来ないよう、地蔵を祀った。いもあらい地蔵尊の辺り (橿原神宮前駅東口) は芋洗芝<small>いもあらいしば</small>と呼ばれ、近くを芋洗川が流れる (かつては現在地より少し西の国道沿い)。空を飛んでいた久米仙人は、若い女性 (妹) の白い脛<small>すね</small>を見て神通力を失い、ここに落下、そこに地蔵を安置した。ここは飛鳥川上流の芋峠を経て吉野につながり、芋峠<small>ほそ</small>や細川の名も、疱瘡からついたか (疱瘡—妹—芋峠—細川)。</p> <p>久米仙人はその女性と夫婦になり、神通力を失う。しかし新都造営の際に仙人であったことを行事官に知られ、「多量の木材を空を飛ばして運んでみよ」と命じられた。仙人は道場に籠もり、心身を清め、食を断ち、7日7夜、祈り続けたところ、8日目の朝、山から多くの木材が工事現場に飛んできた。これを聞いた天皇は、仙人に免田 (税などが免除された田) 30町歩を与え、仙人は喜んでその地に伽藍を建てた (=久米寺)。</p>	<p>P362</p> <p>P363</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------



<p>伊勢街道(初瀬街道)</p> <p>「舒明天皇初葬地」</p> <p>冬野説</p> <p>おかげ燈籠 (明日香村岡ほか)</p> <p>八木札の辻 (橿原市北八木町 2丁目)</p> <p>八木の接待場跡(橿 原市八木町2丁目、 八木札の辻の西)</p> <p>岡村の接待場 (明日香村岡)</p> <p>多武峰や岡寺への 西からの道 (御所街道、 八木街道、 西多武峰街道)</p> <p>鉄道開通の影響 現在の近鉄橿原線、 吉野線の開通</p> <p>飛鳥駅の設置と その影響</p> <p>朝風峠(明日香村 稲淵～平田。朝風は 飛鳥川左岸一帯)</p>	<p>52 町目の町石の近くに不思議な形の摩尼輪塔(重文)。</p> <p>大坂、河内、大和から伊勢神宮を結ぶ伊勢街道(初瀬街道)は、奈良盆地の中央を東西に貫く幹線道。盆地平野部では、古代の横大路と接続。伊勢街道沿いには、道しるべとして太神宮燈籠や道標。7～14 世紀の斎王(天皇に代わって伊勢神宮に仕えた皇女)も、この道を通った。</p> <p>日本書紀によれば、舒明天皇は滑谷岡に葬られ、翌年、押坂陵(桜井市の段ノ塚古墳)に改葬された。初葬地は明日香村の小山田古墳とする説がある(小山田古墳は蘇我氏の有力者の墓とも)。滑谷岡は明日香村冬野という伝承があるが、該当する古墳は確認されていない。</p> <p>おかげ参りのピーク時、大坂から伊勢までの街道筋は、大群衆で歩くのが困難なほど。おかげ参りの記念碑・おかげ燈籠が明日香村など各所に残り、「おかげ」「おかげ講中」「御影年」という文字が刻まれている。</p> <p>下ツ道(中世からは中街道)と伊勢街道(横大路)の交差点。江戸中期以降、伊勢参りや大峯山への参詣者などで賑わう。八木には「八木札の辻交流館(橿原市指定文化財「東の平田屋」)のほか、5棟の市指定文化財(建築)がある。</p> <p>大和の伊勢街道沿いでは、八木が最大の宿場町。住民は、おかげ参りの旅人に、食事や湯茶の接待。接待場跡にあった2つの太神宮燈籠の1つは、大和八木駅近くに移動。竿石(火袋を支える石)に「参宮接待連中」の銘文がある。</p> <p>伊勢街道や伊勢南街道からは離れているが、双方につながる道筋。当初は村内外から、米、麦、茶、酒などが寄せられた。村内各所におかげ燈籠が残る。</p> <p>金剛山や御所方面からは、「御所街道」が明日香村越を通り、多武峰や岡寺に向かう道へ続く。豊年橋のたもとなど明日香村各所に、道標や燈籠が残る。八木からは「八木街道(栢森を経て吉野に向かう)があり、明日香村島庄で、「西多武峰街道(細川、上を経て多武峰に通じる)が分岐。現在は県道155号多武峰見瀬線(多武峰～橿原市見瀬町)が整備され、道路事情は改善。村内には西多武峰街道に沿って上居や上の集落、峠を越えると桜井市下や下居の集落。</p> <p>明治中期、大阪鉄道(奈良～王寺～桜井)、奈良鉄道(京都～奈良～桜井)開通。今の近鉄橿原線にあたる大和西大寺～橿原神宮前は、大正12年までに、直系の前身の大阪電気鉄道(大軌)により、奈良線に続く畷傍線として開通。同年、吉野口から現在の橿原神宮前駅まで、吉野鉄道が延伸、六田まで繋がる。吉野鉄道は、昭和3年に吉野まで延伸。徒歩で芋峠越えや冬野越えする人は激減。「飛鳥駅周辺地区」は、明日香村の玄関口である飛鳥駅、国道169号など交通結節点だが、昭和初期まで駅はなかった。新駅を求める運動が起こり、前身の橋寺駅が昭和4年に設置(当時の地主が土地を寄付)。昭和45年に飛鳥駅に改称。平成2年から特急停車駅に。同29年以降は道の駅「飛鳥」として登録。</p> <p>朝風(稲淵集落の前身)には、南淵請安の邸宅や墓があったか。奈良時代には寺(朝風廃寺)があったと推察される。朝風峠のやや北に朝風という小字が残り、鎌倉時代まで「朝風千軒」と呼ばれる集落があったと考えられる。</p>	<p>P367</p> <p>P369</p> <p>P370</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------

6. 歴史的風土保存の経緯、現状と今後

項目名	解説	頁
<p>1.歴史的風土保存の経緯</p> <p>古都保存法の制定</p> <p>飛鳥保存と</p> <p>1人の針灸師・ 御井敬三</p> <p>昭和45年の 閣議決定</p> <p>古墳壁画の保存公開 の経緯と寄附金つき 記念切手事業</p> <p>明日香村特別措置法 (明日香法)の制定</p>	<p>昭和41年制定の古都保存法(古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法)では、国土交通大臣が区域を指定し、都市計画においては重要な地区を「歴史的風土特別保存地区」として決定し、開発行為に規制を加える。これに伴い、開発が不許可になった場合は、地区内での土地の買入れも行われる。現在の対象都市は、京都、奈良、鎌倉の三市に、天理市、橿原市、桜井市、斑鳩町、明日香村、逗子市、大津市を加えた10市町村。</p> <p>飛鳥保存の閣議決定が実現したのは、御井敬三の飛鳥への思いから。御井は昭和40年頃に飛鳥を訪れ、千年以上の昔に漢方脈診が伝わった地であると知り、関心を持つ。目が不自由ながらこの地に心を打たれ、農家の柴小屋を借りて別荘とし、のち診療所を弟子に任せて飛鳥に移住。そこで昔ながらの風景が、橿原市方面から破壊され始めたことに気付く。美しい飛鳥を残したいという思いは、患者であった松下幸之助を通じ、昭和45年正月に佐藤栄作(当時の首相)に届けられ、同年夏に佐藤は飛鳥を訪問。同年12月、「飛鳥地方における歴史的風土及び文化財の保存等に関する方策について」が閣議決定。飛鳥地方は古都保存法に基づく施策が講じられたが、開発圧力に対抗するには不十分。このため昭和45年に上記が閣議決定。ここで、古都保存法や風致地区指定の拡大、史跡の指定と主要な史跡の整備、道路・河川・歴史資料館・公園・宿泊研究施設・周遊歩道などの整備、財団法人の設立などが定められた。</p> <p>翌年度には国営飛鳥歴史公園が事業着手、現在は祝戸、石舞台、甘樫丘の3地区に加え、高松塚周辺、キトラ古墳周辺をあわせて5地区約60haが同公園に。高松塚、キトラ古墳壁画は日本の文化財保護の象徴的存在。しかし壁画の劣化が大きな問題に。現在は両壁画とも、最新技術による修理が完了(当面は保存公開施設に置かれる)。両壁画の寄附金つき記念切手が発行された。特に高松塚は記念切手史上最高の1億2千万円余りが発行。寄附金を原資として、高松塚壁画館が古都飛鳥保存財団により整備、模写壁画などが公開。明日香法では、同村における歴史的風土の保存と住民の生活環境、産業基盤の整備との調和を図るため、村の全域を対象に、古都保存法上の特別保存地区とする特別な措置が講じられている。明日香法に基づく同村整備基金が積み立てられ運用益を活用するとともに、交付金も村に交付されている。</p>	<p>P372</p> <p>P373</p> <p>P374</p> <p>P375</p>
<p>2.行政セクター などによる 施策の推進</p> <p>文化観光推進法の 制定と明日香村での 取り組み</p> <p>行政セクター等の連 携による施策の推進 公衆トイレや休憩所 などの設置</p>	<p>(景観法の制定)平成16年交付の「景観法」に基づき、村では平成23年に「明日香村景観計画」を策定。同計画では、①景観マスタープラン編②景観形成方策編③大字景観計画編の3部構成。同計画における③大字景観計画とは、各大字の特徴に応じ、大字単位で住民自らが定める計画とされ、10年後の姿を目標の基本とし、準備が整った大字から作成が進められている。集落を取り囲む農地や山林、河川なども含めた大字全域が対象。</p> <p>令和2年、「文化観光推進法」(文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律)が公布・施行。観光事業者と文化施設が連携し、歴史的・文化的背景やストーリー性を考慮した文化資源の魅力の解説・紹介が行われ、来訪者が学びを深めることを期待。同法に基づき村の「明日香まるごと博物館地域計画」は、世界遺産構成資産候補である遺跡そのもの(牽牛子塚古墳など9つ)を文化観光拠点施設としている。また別途国の認定を受けた県の「いかす・なら地域計画」では、橿原市付属博物館などを拠点施設とする。村内では、国営明日香歴史公園が5地区で整備され、各地区に公衆トイレや屋根付きの休憩所、四阿などがあり、利用者の周遊拠点となっている。また飛鳥駅前(道の駅)など主要拠点に公衆トイレがあるほか、古墳などの近くにある中小の公園や公共施設のトイレを利用することも考えられる。</p>	<p>P376</p> <p>P377</p> <p>P378</p>

<p>電線地中化などの 推進 ご当地ナンバー 「飛鳥」の交付</p>	<p>明日香村では、川原寺跡周辺、大字飛鳥や大字岡の伝統的町並みなどで、電線の地中化が継続的に推進。またメインの歩行者通りの石貼り舗装も進行中。 「走る広告塔」として、令和2年から、橿原市、高取町、田原本町、三宅町、明日香村の5市町村で「飛鳥ナンバー」の交付が開始。</p>	<p>P379</p>
<p>3.住民などによる 景観の維持 や伝統の継承 伝統的な町家や 集落景観の保全 明日香村の集落景観 の特性</p>	<p>明日香村の集落は、大字飛鳥は東西軸の街村(1)、岡・島庄の両大字は南北軸の街村(2)、それ以外の大字では、おおむね地形を反映した土地利用でまとまった塊村(3)が形成。飛鳥川・冬野川上流の山地部(稲淵、栢森など)では、川と深い関わりを持った塊村と、棚田が一体となった集落景観。山間部(畑、入谷など)では、周囲を森林に囲まれた中に民家が点在する散村的な集落も。飛鳥川上流の5大字は、「奥飛鳥の文化的景観」(テキストP241)。村北部の低地部(奥山、小山など)では、周囲を農地や樹林に囲まれた塊村集落も。飛鳥駅の近くでは、計画的に整備された住宅市街地も。一方、越や真弓、御園</p>	<p>P380</p>
<p>伝統的な町家や 集落景観の保全</p>	<p>飛鳥・藤原地域には、伝統的な町家や「囲造り」の民家が残る。奈良盆地に多い囲い造りとは、敷地の周囲に長屋門、納屋、稲小屋、米蔵、内蔵、離れ座敷など付属屋を配置した分棟配置型の屋敷構え。土塀や主屋の一部も含めて四方を完全に取り囲む閉鎖型と、明日香村の通例のような開放型がある。</p>	<p>P381</p>
<p>無住社寺などの維持</p>	<p>これに対し街村では、厨子2階建てなどの主屋が道路に接する。明日香村の岡、飛鳥の両大字や橿原市の今井町、八木町では、主屋に厨子2階建てが用いられる。厨子2階建ては近世後期に完成し、明治後期まで一般的だった町家様式で、2階部分の天上が低く、虫籠窓(明かり取りや通風のため)をあけた屋根裏部屋のような空間(江戸期には「町人が武士を見下ろさず」の禁制から、本格的な2階建ては建てられなかった)。明日香村檜隈、御園では、尾根筋を南北に蛇行する古道が旧集落の主軸で、ほとんどの主屋は、この主動線沿いに南面して建ち並ぶ。尾根筋や斜面には畑地、果樹園、樹林。谷部や低地部には水田。集落の中心には、社叢を持つ於美阿志神社と天神社。同村奥山(中ツ道と阿倍山田道が交差する場所)は低地にあり、西側には水田。</p>	<p>P382</p>
<p>無住社寺などの維持</p>	<p>明日香村の寺院は、ほとんどが無住。神社で神職がいるのは飛鳥坐神社だけで、他の神社の儀式や神事は、各大字の依頼を受けた同神社の神職が行っている。古都飛鳥保存財団は、無住社寺などへの助成事業を行う(総費用の1/3が限度)。1987～2022年度までの間、約210件、約2億6千万円を助成。主要な古民家の茅葺き屋根の葺き替えなども。今後はサポーターの募集も必要か。</p>	<p>P383</p>
<p>棚田や里山の保全 あすかオーナー制度 (棚田オーナー等)</p>	<p>「棚田オーナー制度」は、棚田での米作りを通じた新しい文化の発信をめざす「棚田ルネッサンス」として、稲淵地区で平成8年スタート。 地元農家が指導し、米作りだけでなく、周辺の草刈り、案山子づくりなども。オーナー制度は稲淵の棚田の魅力を知ってもらう情報発信ツールでもあり、NPO法人「明日香の未来を創る会」が運営。オーナー募集やイベントの案内は、一般財団法人「明日香村地域振興公社」が行っている。</p>	<p>P384</p>
<p>飛鳥里山クラブの 活動</p>	<p>同クラブは、国営飛鳥歴史公園のボランティア。飛鳥の自然、歴史、文化を学び、その魅力を伝えるとともに、地域に貢献することを目的として平成7年に設立。同クラブの「里山づくり隊」は、植生調査、草刈り、体験イベントも。</p>	<p>P385</p>
<p>飛鳥里山クラブの 活動</p>	<p>同クラブは、国営飛鳥歴史公園のボランティア。飛鳥の自然、歴史、文化を学び、その魅力を伝えるとともに、地域に貢献することを目的として平成7年に設立。同クラブの「里山づくり隊」は、植生調査、草刈り、体験イベントも。</p>	<p>P386</p>

<p>滞在型来訪者受入れ 国営飛鳥歴史公園内 宿泊研修施設の整備 古民家を利用した 宿泊施設の整備</p> <p>飛鳥民家ステイ (ホームステイ) を通じた 体験交流の促進</p> <p>漢方^{かんぽう}の産業化や伝統 的郷土料理の復元 漢方薬の伝統</p> <p>漢方の産業化への 取り組み</p> <p>「蘇」の復元製造</p> <p>飛鳥鍋の復活と普及</p> <p>伝統芸能の保存活動 への取り組み</p> <p>南無天踊り</p> <p>八雲^{やくもごと}琴</p> <p>飛鳥蹴鞠^{あすかけまり}</p> <p>万葉朗唱</p>	<p>祝戸荘の設置管理者は、株式会社祝戸荘ホテルマネジメント（星野リゾートの子会社）に決定。また株式会社星野リゾートは、同村真弓地区で、リゾート型宿泊施設「星のや」の整備も行っている。</p> <p>旧大鳥家住宅（同村飛鳥。飛鳥坐神社参道に北面）は、長谷工グループの古民家活用プロジェクト第1弾として、宿泊施設「プランシエラ ヴィラ明日香」となり、同村初の登録有形文化財に。明治3年の建築で、木造厨子2階建て。一般社団法人「大和飛鳥ニューツーリズム」は、国内外からの学生たちが一般家庭に滞在する「飛鳥民家ステイ」と体験交流型教育旅行の受け入れを実施。連携自治体は明日香村、橿原市、高取町、桜井市、宇陀市、下市町、奈良県。</p> <p>漢方薬は生薬^{しょうやく}（薬用植物や動物・鉱物が原料）を伝統的処方に従って混合して作られる。東大寺献物帳の「種々薬帳」には、光明皇后が献納した薬のリストが載り、生薬も現存。中南和地域は、今も漢方薬の製造や薬草栽培で知られる。飛鳥時代から続く寺院での施薬が、売薬業などの地場産業として発展した。県は「漢方のメッカプロジェクト」を立ち上げ。県産物の代表がヤマトトウキ（セリ科）で、その根が生薬^{とうき}の当帰。滋養強壮、鎮痛、補血を目的に婦人薬として多用。明日香村では除草剤を使わずに、ヤマトトウキを栽培。「ならこすめ」ブランドの化粧品セット（トウキと県産5種類の和漢エキス配合）が開発・販売。また高松塚古墳や石舞台の周辺では、大和橘^{やまとたちばな}を育てている。大和橘の皮を乾燥させた橘皮^{きっぴ}は、生薬として珍重されてきた。なら橘プロジェクトが活動中。</p> <p>蘇は古代の貴重な滋養薬で、牛乳を煮詰めて作る。鑑真が唐から持ち込んだとも。蘇は薬用のほか、貴族の宴会料理や仏教行事でも用いた。全国的に貢蘇（蘇を朝廷に貢納）が命じられていた（延喜式）。藤原道長は「蘇蜜煮」を服用。橿原市の西井牧場は、「飛鳥の蘇」を食品として復元・製造。</p> <p>牛乳で鶏肉を煮る「飛鳥鍋」は、渡来人が考案したとも、妙楽寺（談山神社）の修行僧が始めたとも。今の飛鳥鍋を考案したのは、藪内増治郎氏（旧飛鳥村の村長）か（名古屋コーチンの肉をヤギの乳で煮た）。昭和28年、橿原観光ホテルが、藪内氏に依頼して復活・提供したという。今は冬の鍋料理の定番。</p> <p>明日香村伝承芸能保存会が、以下の伝承芸能の保存に尽力。</p> <p>なもて踊りとは、江戸前期～明治末まで、奈良盆地で行われてきた雨乞い行事。次第に歌舞音曲を伴う農民芸能に進化。県下各地の神社に、その様子を描いた絵馬が残る。伝承芸能保存会の南無天踊りは5部構成で、第1部では皇極天皇の雨乞いの儀式、第2部では、各大字で行われた雨乞い行事を物語るとされる。</p> <p>江戸時代に創案された二弦琴^{にげんきん}の一種。スサノオが詠んだ「八雲立つ」の歌に因んで名づけられ、神事などで奏した（出雲琴とも）。古墳時代の遺跡からも出土。これを継承するため「明日香の響保存会」（今は伝承芸能保存会の部会）が活動。</p> <p>蹴鞠のはじまりは、中国・戦国時代の齊^{せい}に遡る。日本には飛鳥時代に伝来。法興寺（飛鳥寺）の槻の木の下で「打鞠（うちまり）」が行われたとあり、その際の中大兄皇子と鎌足の出会いのエピソードは有名。その蹴鞠の普及啓発を行う。「犬養節」にならい、思い思いの旋律で万葉集を朗唱する。伝承芸能保存会のもと、「明日香村で万葉の歌を朗唱する集い」などを行う。</p>	<p>P388</p> <p>P389</p> <p>P390</p> <p>P391</p> <p>P392</p> <p>P393</p>
<p>4.樹木・草花や 作物による 景観形成など</p>	<p>飛鳥・藤原地域の名木には、古宮土壇^{ふるみやどだん}のエノキ、石舞台古墳の夜桜（ソメイヨシノ）、甘樫丘展望台のソメイヨシノ。明日香村川原（小山田地区以外）では、板蓋神社、庚申さん、照葉樹に囲まれた龍神さん（川原寺跡の龍神社）、クスノキの巨木のある天王さん（八阪神社）の4カ所を当番制で管理。</p>	

古宮土壇のエノキ 明日香村中央公民館 東側のクスノキ	橿原市和田町～明日香村豊浦。田に水を張る6月とヒガンバナの9月には、写真愛好家に人気。エノキはヨノミともいい、その実は食用。万葉集にも登場。新しい村役場からも至近の位置。天王社（八阪神社）の敷地にあるが、祠はなく、このクスノキ（楠、樟）がご神体のようにそびえ立つ。	P395
呉津孫神社の ムクロジ ムクロジの実と果皮	明日香村栗原。全国的にも有数の無患子の巨樹。コブ状の大きな根の張りが特徴。同神社は、本来は呉人（呉国の人）の祖神を祀ったか。ムクロジは秋になると黄葉し、たくさんの果実（直径約2cm）をつける。タネは黒色で硬く、羽根つきの玉や数珠にも使われる。漢字で無患子と書くので、縁起が良いとされ、お守りにも。果皮はサポニンを含み、明治期までは洗浄剤。	P396
川原寺跡の照葉樹 橘寺門前のイチョウ 稲渕棚田のイチョウ 石舞台、甘樫丘展望 台のソメイヨシノ	川原寺跡に龍神社と呼ばれる祠があり、霊木的なカシ類の大木が並ぶ。西側門前の大イチョウ。晩秋には落葉が敷き詰められて黄色いじゅうたんに。稲渕の棚田の西側最上部にあるイチョウ。周囲の風景に溶け込み、独特の趣。石舞台古墳の周囲や甘樫丘展望台には、ソメイヨシノが列植。石舞台ではライトアップも。甘樫丘展望台では花びらが宙に舞うさまも見事。	P397
橿原神宮前駅の クマノザクラ 談山神社の薄墨桜 万葉の草花や作物 による景観形成	同駅前中央口広場に、令和3年に植栽。古都飛鳥保存財団から、7本の若木が市に寄贈されたもの。紀伊半島の自生種で、ほぼ100年ぶりの桜の新種かつては多武峰一帯に薄墨桜（エドヒガン）が自生。鼓の材料として使われた。秋の彼岸の頃には、明日香村の各所でヒガンバナ（いちし）が咲く。	P398
ヒガンバナ	道の辺のいちしの花のいちしろく人皆知りぬ我が恋妻は（巻⑩2480 作者不詳） （私の恋しい妻のことを皆、はっきりと知ってしまった。）	P399
ナノハナ	菜の花は食用。橿原市の醍醐池に近い藤原宮跡では、菜の花と桜が同時に咲く。 籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岡に菜摘ます児 家告らな	P400
ナンバンギセル （南蛮煙管）	名告らさね…（巻①1 雄略天皇 ※P20） ※末尾に補記したページは、当会著『奈良万葉の旅百首』（京阪奈情報教育出版刊）の該当ページです。 （思ひ草）イネ科の寄生植物で、ススキ、ミョウガ、サトウキビなどの根に寄生、晩夏～秋に花を咲かせる。道の辺の尾花が下の思ひ草 今さらさらに何か	P401
ハス（蓮）	思はむ（巻⑩2270 作者不詳）「思ひ草」のように、今さら何を思い悩もうか 蓮華は仏教のシンボルとして、寺院建築の瓦、柱、仏像などに意匠が使われた。	P402
アサガオ（朝顔）	日下江の入江の蓮 花蓮 身の盛り人 羨しきろかも（古事記 引田部赤猪子） （蓮の花のように盛りの年頃の女性たちは、なんと美しいこと、羨ましい。） （漢名「牽牛花」）アサガオの種は牽牛子。牽牛子塚古墳は別名「アサガオ塚」。	P403 P404
ヤブカンゾウ	萩の花 尾花 葛花 なでしこが花をみなへし また藤袴 朝顔が花（巻⑧1538 山上憶良） 秋の野の七草の最後にアサガオが出てくる （藪萱草 忘れ草）恋忘れのための呪物（呪力を持ったもの）。 忘れ草わが紐に付く香具山の古りにし里を忘れむがため（巻③334 大伴旅人） （香具山のある懐かしい故郷をいつそのこと忘れられるように。）	P405
イネ（稲）	秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りな言痛くありとも（巻②114 但馬皇女）（あなたに寄り添いたいのです、たとえ誰かの言葉に心を痛めても。）	P406
ススキ（薄、芒） 尾花とも	秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方にわが恋ひやまむ（巻②88 磐姫皇后）（私のせつない恋心は、いつになったらすっきりするのか。） 人皆は萩を秋と言ふ よし我は尾花が末を秋とは言はむ（巻⑩2110 作者不詳）	P407
	秋の野の尾花が末の生ひなびき心は妹に寄りにけるかも（巻⑩2242 柿本人麻呂）	

<p>ハンゲショウ (半夏生、半化粧)</p>	<p>(ススキの穂が風になびくように、私の心はあなたになびいています。) 名由来は、花期になると、花序に近い2、3枚の葉の下半分が葉緑素を失って化粧をしたように白く変化するから、という説、また花を咲かせる時期が、夏至から11日目、雑節の「半夏生」の頃に当るからとも。なお雑節の半夏生の半夏は、カラスビシャクのこと、このカラスビシャクが生える時期をさすか。</p>	<p>P0408 P409</p>
<p>ハギ (萩)</p>	<p>万葉集で、最も多く詠まれている植物。 秋萩は盛り過ぎるを いたづらに かざしに挿さず 帰りなむとや (巻⑧1559 沙弥尼) (萩の枝を髪に飾ろうともせず、帰ろうとされるのですか。)</p>	<p>P410</p>
<p>ヤマブキ 徒然草と万葉の草花</p>	<p>山吹の立ちよそひたる山清水 汲みに行かめど道の知らなく (巻②158 高市皇子) 兼好法師は、万葉の草花のような伝統的な草花を「なつかし」と表現し、新来の外来種にはない趣きや親しみを感じていた。</p>	<p>P411</p>
<p>甘樫丘でのササユリの保護と案内活動</p>	<p>国営飛鳥歴史公園の甘樫丘地区や高松塚周辺地区では、万葉植物のササユリの保護・増殖を図る取り組みが、「飛鳥里山クラブ」とともに継続実施中。甘樫丘地区での同クラブ「ササユリの香る丘見学ツアー」は、6月初旬頃開催、所要約1時間。</p>	<p>P412</p>
<p>万葉の草花や樹木による「草木染め」</p>	<p>明日香村立部では草木染めの体験教室(水谷草木染め)を開催。また国営飛鳥歴史公園のキトラ古墳周辺地区などでも、体験イベントが実施されることも。</p>	<p>P418</p>
<p>5.飛鳥・藤原 地域の現状と 今後</p>	<p>飛鳥・藤原の地特有の歴史的風土は、住民の生活や生業<small>なりわい</small>の中で形作られ、時の経過とともに重層的に育まれてきた。 今後は、「静的・現状維持的」な保存を訴えるだけではなく、農林業の活性化、観光・交流の振興、定住の促進と関係人口の拡大など、「動的・創造的」な保存や活用のための活動を継続的に行わなければならない。 そのためには、国、県、村が連携して歴史的文化的遺産の発掘調査などを引き続き進め、その成果を丁寧に分析・整理し、飛鳥時代の制度、技術、文化はわが国の礎をなしたものであること、それらの多くが東アジアを中心とした世界との交流によって生み出されたことなど、飛鳥・藤原の地の普遍的・本質的な価値をより明確に発信して行かなければならない。</p>	





【「中級編」合格まで使える書籍】

1. 『飛鳥への招待』 飛鳥学冠位叙任試験問題作成委員会編 中央公論社 1900円
2. 『奈良県の歴史散歩』（上・下） 奈良県高等学校教科書等研究会歴史部会編
山川出版社 各1200円
3. 『奈良の寺』 奈良文化財研究所編 岩波新書 780円
4. 『増補改訂版 奈良「地理・地名・地図」の謎』 当会監修
じっぴコンパクト新書 1000円
5. 『奈良百寺巡礼』 当会著 京阪奈情報教育出版 980円
6. 『奈良万葉の旅百首』 当会著 京阪奈情報教育出版 1000円

この冊子の PDF ファイル: NPO 法人「奈良まほろばソムリエの会」公式ホームページ
<http://www.stomo.jp/> (「リンク集」内)